

# 飛田坂本遺跡

四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う発掘調査報告書

1998年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



# 飛田坂本遺跡

四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う発掘調査報告書

1998年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター





調査区遠景（西上空より）





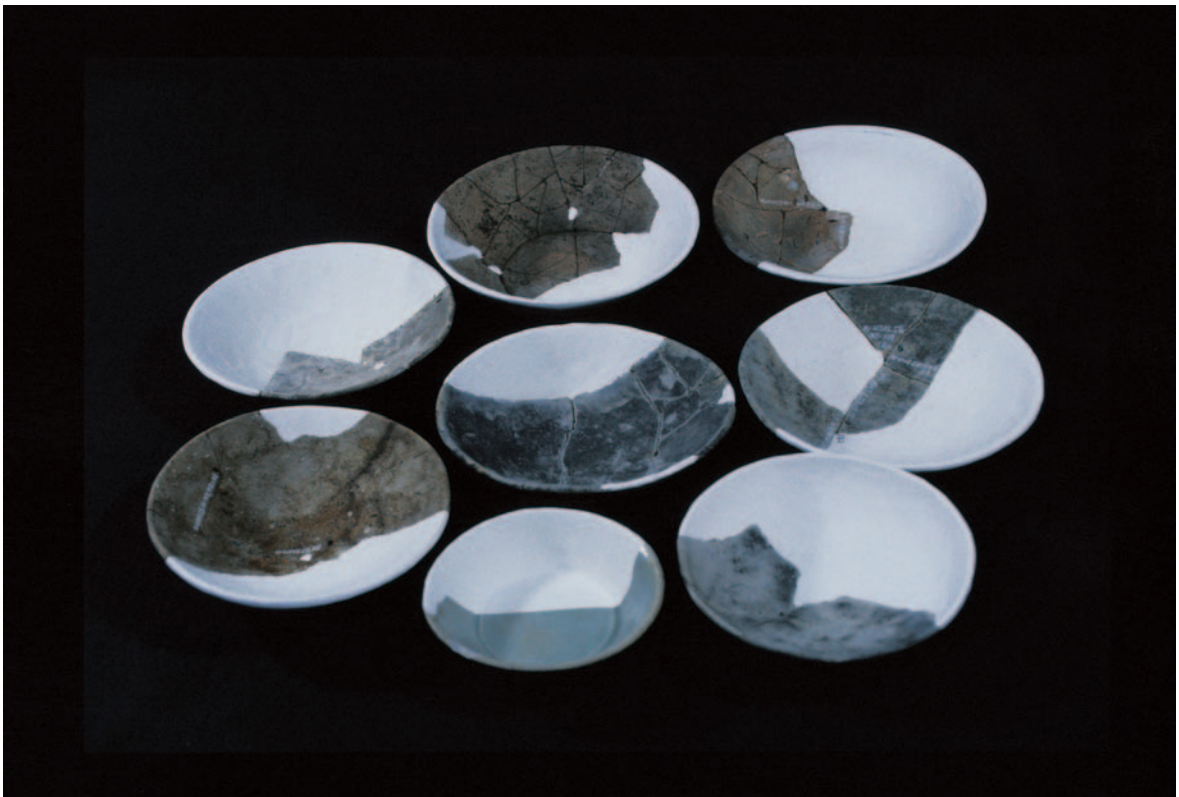
調査区全体完掘状況







出土遺物



出土遺物





出土遺物 須恵器 (Fig.28-5)



出土遺物 須恵器 (底部墨書)



# 序

四国横断自動車道路（伊野～須崎間）建設に伴い、日本道路公団高松建設局（四国支社）高知工事事務所の委託を受けて平成7年度から埋蔵文化財の発掘調査に取り組んできました。

今回報告する飛田坂本遺跡からも数多くの貴重な資料が確認されました。平成8年度の調査では、遺物は縄文時代～近世の遺物を確認し、遺構では中世を中心とする掘立柱建物址等を確認され、時期は12世紀後半～14世紀前半と考えられます。

桜川流域の周辺では今まで中世山城跡が確認されているが、今回の調査で中流～下流にかけて集落が確認されたのは初めてで、鎌倉時代～室町時代にかけて流通の拠点となる集落が遺跡周辺で展開されていた可能性が十分考えられます。

高知県では中世の資料が少なく、土器編年を考えるうえでも良好な一括資料を得ることができ、高知県の中世の歴史を考えるうえでも貴重な資料が得られました。

最後に調査に多大なご理解とご協力いただいた日本道路公団高松建設局（四国支社）高知工事事務所、高知県教育委員会、須崎市教育委員会、地元為貞地区の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
所長 古谷 碩志

# 例 言

- 1 本書は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが日本道路公団高松建設局高知工事事務所（四国支社）の委託を受けて平成8年度に実施した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
- 3 調査対象地は、須崎市為貞地区の四国横断自動車道工事範囲の内、道路公団工事部分である。
- 4 調査期間は、試掘調査平成8年1月～3月、本調査は平成8年9月～平成9年3月まで実施した。
- 5 調査面積 調査対象地6,000㎡、調査面積4,000㎡である。
- 6 調査体制  
    総務担当 吉岡利一（高知県文化財団埋蔵文化財センター主幹）  
    調査員 小嶋博満（                〃                                主任調査員）  
            〃                下村 裕（                〃                                調査員）
- 7 本文の執筆、編集は小嶋が行った。なお、執筆、編集にあたっては山本哲也（調査第一班長）、出原恵三（調査第三班長）に助言を得た。
- 8 検出遺構は掘立柱建物址（SB）、土坑（SK）、溝（SD）、石垣、性格不明（SX）、調査略号は96-21SHSである。
- 9 調査に当っては、日本道路公団高松建設局高知工事事務所（四国支社）、高知県教育委員会、須崎市教育委員会、地元為貞地区の方々に全面的にご協力をいただいた。
- 10 発掘調査、整理作業では多くの方々の協力を得た、名前を記して謝意を表したい。（敬称略）  
発掘作業員  
（重機） 石川康人、石川健史、大塚剛史、石川紀夫、大杉英樹  
野村寛、森光信春、岸本省三、森光初悦、大崎敬獅、谷脇勲、村田一仁、川崎光政、門田秀實、梶原敦史、梅原信幸、梅原智慧子、長山玲子、谷脇悦子、吉永弘恵、梅原静恵、梅原真知子、谷脇亀寿、堅田千鶴子、野村光子、武田綾、大野千歳、堅田計美、堅田幸子、吉本文子、小野栄子、笹岡亀意、三本照美、武田平、高橋健  
下記の方々に洗浄、注記、接合、復元、遺物の実測、トレースなど整理作業でご協力をいただいた。  
整理作業員  
矢野雅、岩貞泰代、宮本幸子、久万公子、楠瀬憲子、小松経子、山本由里、松山真澄、尾崎富貴、松木富子
- 11 出土遺物は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

## 第 I 章 調査の経緯と経過

### 第 1 節 調査に至る経緯

調査の経緯	1
-------	---

### 第 2 節 調査の経過

調査の経過	1
-------	---

第 3 節 試掘調査の結果	2
---------------	---

## 第 II 章 遺跡の地理的、歴史的環境

(1) 地理的環境	4
-----------	---

(2) 歴史的環境	5
-----------	---

## 第 III 章 調査の概要

1、調査の方法	7
---------	---

2、基本層序	7
--------	---

## 第 IV 章 遺構と遺物

### 第 1 節 A 区

調査区の概要と層序	13
-----------	----

### 第 2 節 B 区

調査区の概要	15
--------	----

掘立柱建物跡 (S B 1)	15
----------------	----

(S B 2)	17
---------	----

(S B 3)	19
---------	----

(S B 4)	20
---------	----

B 区、遺構 (ピット)	21
--------------	----

S K - 1	23
---------	----

S D - 1	25
---------	----

S D - 2	26
---------	----

S D - 3	26
---------	----

集石遺構 S X 1	27
------------	----

集石遺構 S X 2	27
------------	----

集石遺構 S X 3	28
------------	----

集石遺構 S X 4	28
------------	----

礫状遺構	31、32
------	-------

### 第 3 節 C 区

調査区の概要と層序	48
-----------	----

SK-2	48
SK-3	49
SK-4	50
SK-5	53
SK-6	54
SK-7	55
SK-8	56
SK-9	57
SD-4	58
C区、遺構（柱穴）	59
集石遺構SX-5	64
集石遺構SX-6	65
石垣状遺構	69
第4節 D区	
調査区の概要	77
D区、A、B、C地点の層序	79
A地点の層序	79
B地点の層序	79
C地点の層序	79
D区、遺構外出土遺物	81
第V章 考察	83



# 挿図目次

- Fig. 1 飛田坂本遺跡位置図  
Fig. 2 周辺の遺跡分布図  
Fig. 3 調査区基本層序(A区～D区)  
Fig. 4 飛田坂本遺跡調査区位置図  
Fig. 5 検出遺構全体図  
Fig. 6 A区出土遺物地点  
Fig. 7 A区出土遺物実測図(1～5)  
Fig. 8 S B 1 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 9 S B 1 遺構出土遺物実測図  
Fig. 10 S B 2 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 11 S B 2 遺構出土遺物実測図(1～4)  
Fig. 12 S B 3 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 13 S B 3 遺構出土遺物実測図(1～3)  
Fig. 14 S B 4 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 15 B区遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 16 B区遺構出土遺物実測図(1～7)  
Fig. 17 S K 1 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 18 S K 1 遺構出土遺物実測図(1～5)  
Fig. 19 B区S D 1 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 20 B区S D 2 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 21 B区S D 3 遺構平面及びエレベーション図  
Fig. 22 B区集石遺構(S X 1) 平面図  
Fig. 23 B区集石遺構(S X 2) 平面図  
Fig. 24 B区集石遺構(S X 3) 平面図  
Fig. 25 B区集石遺構(S X 4) 平面図  
Fig. 26 B区磔状遺構平面及び側面図  
Fig. 27 B区磔状遺構出土遺物実測図(1～31)  
Fig. 28 B区遺構外出土遺物実測図(1～11)  
Fig. 29 B区遺構外出土遺物実測図(12～17)  
Fig. 30 B区遺構外出土遺物実測図(1～44)  
Fig. 31 B区遺構外出土遺物実測図(45～70)  
Fig. 32 B区遺構外出土遺物実測図(71～88)  
Fig. 33 C区S K 2 遺構平面及びエレベーション図

- Fig. 34 C区SK3遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 35 C区SK3遺構出土遺物実測図(6・7)
- Fig. 36 C区SK4遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 37 C区SK4遺構出土遺物実測図(8~23)
- Fig. 38 C区SK5遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 39 C区SK5遺構出土遺物実測図(24~26)
- Fig. 40 C区SK6遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 41 C区SK6遺構出土遺物実測図(27~29)
- Fig. 42 C区SK7遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 43 C区SK7遺構出土遺物(30・31)
- Fig. 44 C区SK8遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 45 C区SK8遺構出土遺物実測図(32)
- Fig. 46 C区SK9遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 47 C区SK9遺構出土遺物実測図(33・34)
- Fig. 48 C区SD4遺構平面及びエレベーション図
- Fig. 49 C区SD4遺構出土遺物実測図(1・2)
- Fig. 50 C区遺構(ピット)平面及びエレベーション図
- Fig. 51 C区遺構(ピット)出土遺物実測図(1~27)
- Fig. 52 C区集石遺構(SX5)平面図
- Fig. 53 C区集石遺構出土遺物実測図SX5(1~20)
- Fig. 54 C区集石遺構出土遺物実測図SX5(21~33)
- Fig. 55 C区集石遺構SX6平面図
- Fig. 56 C区石垣状遺構平面及び側面図
- Fig. 57 C区遺構外(石垣周辺)出土遺物実測図(1~13)
- Fig. 58 C区遺構外(石垣周辺)出土遺物実測図(14~18)
- Fig. 59 C区遺構外(石垣周辺)出土遺物実測図(19~43)
- Fig. 60 D区全体図及び出土遺物地点
- Fig. 61 D区基本層序及びセクション図
- Fig. 62 D区遺構外出土遺物実測図(1~18)

# 表 目 次

表 1	A区	遺物観察表	表19	B区	遺構外遺物観察表（5）
表 2	B区	S B 1 遺物観察表	表20	C区	S K 3 遺物観察表
表 3	B区	S B 1 ピット計測表	表21	C区	S K 4 遺物観察表
表 4	B区	S B 2 ピット計測表	表22	C区	S K 5 遺物観察表
表 5	B区	S B 2 遺物観察表	表23	C区	S K 6 遺物観察表
表 6	B区	S B 3 ピット計測表	表24	C区	S K 7 遺物観察表
表 7	B区	S B 3 遺物観察表	表25	C区	S K 8 遺物観察表
表 8	B区	S B 4 ピット計測表	表26	C区	S K 9 遺物観察表
表 9	B区	遺構（ピット）計測表	表27	C区	S D 4 遺物観察表
表10	B区	遺構（ピット）観察表	表28	C区	遺構（ピット）計測表（1～23）
表11	B区	S K 1 遺物観察表	表29	C区	遺構（ピット）遺物観察表（1）
表12	B区	礫状遺構遺物観察表（1）	表30	C区	遺構（ピット）遺物観察表（2）
表13	B区	礫状遺構遺物観察表（2）	表31	C区	遺構（S X 5）遺物観察表（1）
表14	B区	遺構外遺物観察表（弥生～近世）	表32	C区	遺構（S X 5）遺物観察表（2）
表15	B区	遺構外遺物観察表（1）	表33	C区	遺構外遺物観察表（1）
表16	B区	遺構外遺物観察表（2）	表34	C区	遺構外遺物観察表（2）
表17	B区	遺構外遺物観察表（3）	表35	C区	遺構外遺物観察表（3）
表18	B区	遺構外遺物観察表（4）	表36	D区	遺構外遺物観察表（1）

# 写真図版

- 巻頭図版 1 調査区遠景（西上空より）
- 巻頭図版 2 調査区全体完掘状況
- 巻頭図版 3 出土遺物・出土遺物
- 巻頭図版 4 出土遺物 須恵器・出土遺物 須恵器（底部墨書）
- P L 1 調査区発掘前 全景東側より・調査区発掘後 全景西側より
- P L 2 B区、東壁セクション・C区、南壁セクション
- P L 3 B区、掘立柱建物址（南より）・B区、掘立柱建物址（北より）
- P L 4 出土遺物状況
- P L 5 出土遺物状況
- P L 6 出土遺物状況
- P L 7 磔状遺構（西側より）・磔状遺構（南側より）・石垣状遺構（南側より）・磔状遺構（西側より）
- P L 8 集石遺構（S X 3）南側より・集石遺構（S X 4）南側より・集石遺構（S X 5）南側より・集石遺構（S X 6）西側より
- P L 9 S D 1（西側より）・S D 2（南側より）・S D 3（南側より）・S D 4（南側より）
- P L 10 D区出土遺物  
        木札（木簡） Fig. 62（8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18）
- P L 11 A区出土遺物 Fig. 7（1・2） Fig. 7（4・5） B区出土遺物 Fig. 9（1・2・3・5） Fig. 11（3・4） Fig. 13（1・3）
- P L 12 B区出土遺物 Fig. 16（2・3・4・5・6・7） Fig. 18（1・2・3・5）
- P L 13 B区出土遺物 Fig. 27（1・2・3・4・5・7・9・10・11・13）
- P L 14 B区出土遺物 Fig. 27（15・20・30） Fig. 28（3・5） Fig. 29（12・16） Fig. 30（2・3・5）
- P L 15 B区出土遺物 Fig. 30（6・7・8・9・10・11・13・14・16・17）
- P L 16 B区出土遺物 Fig. 30（18・19・20・21・22・23・24・25・26・27）
- P L 17 B区出土遺物 Fig. 30（28・29・31・32・33・34・35・37・38・39）
- P L 18 B区出土遺物 Fig. 30（40・43・44） Fig. 31（47・49・50・51・62・63・65）
- P L 19 B区出土遺物 Fig. 31（68） Fig. 32（77） C区出土遺物

		Fig. 35 (7)	Fig. 37 (8・9・10・11・13・16・19)
P L	20	C区出土遺物	Fig. 37 (21・22) Fig. 39 (26) Fig. 41 (27) Fig. 45 (32) Fig. 49 (1・2) Fig. 51 (1・3・4)
P L	21	C区出土遺物	Fig. 51 (5・8・11・13・14・15・16・17・18・19)
P L	22	C区出土遺物	Fig. 51 (20・23・24・25・26) Fig. 53 (2・3・ 6・7・8)
P L	23	C区出土遺物	Fig. 53 (10・11・12・15・18) Fig. 54 (22・23・ 26・27・28)
P L	24	C区出土遺物	Fig. 54 (30・31) Fig. 57 (5・10・11) Fig. 58 (16・18) Fig. 59 (19・20・25)
P L	25	C区出土遺物	Fig. 59 (27・31・35・37・43) D区出土遺物 Fig. 62 (2・3)
P L	26	①	Fig. 9 (4・6) Fig. 11 (2) Fig. 13 (2) ② Fig. 27 (22・19・23・12) ③ Fig. 27 (16・17・18・21) ④ Fig. 27 (27・28・26・29)
P L	27	⑤	Fig. 28 (1・2・4) ⑥ Fig. 28 (8) ⑦ Fig. 28 (9・10) ⑧ Fig. 28 (11)
P L	28	⑨	Fig. 29 (17・15・14・13) ⑩ Fig. 30 (30・48・36・4・1・ 46) ⑪ Fig. 30 (42・41・12) Fig. 31 (45) ⑫ Fig. 31 (52・ 70・57) Fig. 32 (72)
P L	29	⑬	Fig. 31 (61・64・58・66・53) ⑭ Fig. 31 (69・56・55) Fig. 32 (71・73) ⑮ Fig. 31 (60・67・59・54) Fig. 32 (76) ⑯ Fig. 32 (78・80)
P L	30	⑰	Fig. 32 (86・85・84・83) ⑱ Fig. 35 (6・12) Fig. 39 (24) Fig. 41 (29) Fig. 43 (30) Fig. 47 (34) ⑲ Fig. 37 (14・ 15・23) Fig. 43 (31) ⑳ Fig. 53 (1・14・19・17)
P L	31	㉑	Fig. 51 (6・2・27・12・10・9・7・21) ㉒ Fig. 53 (4・ 9・20・16) Fig. 54 (29・25) ㉓ Fig. 53 (13・5) Fig. 54 (24・21) ㉔ Fig. 57 (2・1・9・8)
P L	32	㉕	Fig. 59 (29・24・23・32・34・22) ㉖ Fig. 57 (4・6・3) ㉗ Fig. 62 (1・5) ㉘ Fig. 59 (41・33・28・26・40・30)
P L	33	発掘調査に携わった方々	



# 第Ⅰ章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

### 調査の経緯

日本道路公団が計画している高速道路工事計画区域内に所在する遺跡の中で、工事によって影響を受ける部分について調査を進める。

国道56号線は、高知市を起点とし、春野町、土佐市を通り須崎市へと続いている。交通量も年々増加の一途をたどっている。朝夕の通勤ラッシュによる渋滞がはげしく、緩和が望まれている。解決策として、日本道路公団は、四国横断自動車道が着手されてきた。

飛田坂本遺跡は、平成7年度に実施した四国横断自動車道路（伊野～須崎間）建設に伴う事前の試掘調査によって中世の包含層を確認した。同調査で確認された遺構は柱穴、掘立柱建物址、溝状遺構等、遺物では、土師質土器、中国製の青磁、畿内産の瓦器などが確認された。本調査によって全容を解明するため、平成8年度に日本道路公団四国支社高知工事事務所の委託を受け、高知県教育委員会、須崎市教育委員会の協力を得て実施した。

調査対象となったのは工事によって影響を受ける部分である。調査対象面積は6,000㎡、調査面積4,000㎡を調査した。期間は平成8年9月18日～平成9年3月31日迄であった。

## 第2節 調査の経過

### 調査の経過

発掘調査は、平成8年9月18日～平成9年3月31日まで行われた。なお、発掘調査にとりかかる前に、草刈、重機による調査範囲内の表土剥ぎを行った。以下調査の過程を略述する。

- |        |                               |
|--------|-------------------------------|
| 9月18日  | A、B、C、D区より、草刈り、表土剥ぎを開始する。     |
| 9月25日  | A区の調査を開始する。（調査区の北側）           |
| 9月26日  | トレンチを入れて層序の観察及び遺構確認を行う。       |
| 10月3日  | 遺構確認できない、遺物、杭列確認、A区調査終了。      |
| 10月4日  | A区の写真撮影、セクション図。               |
| 10月8日  | 雨天のため作業中止。                    |
| 10月9日  | D区の層序の観察及び遺構確認を行う。            |
| 10月11日 | 遺構確認できない、遺物確認（土師器、陶磁器）D区調査終了。 |
| 10月21日 | B区の調査を開始する。                   |

10月22日	層序の観察及び遺構確認を行う。
10月24日	遺構、遺物確認される。
10月29日	遺構検出。
11月12日	遺構掘り。
11月26日	B区調査終了。
11月28日	C区調査開始。
12月2日	遺構、遺物確認される。
12月16日	遺構検出。
12月25日	遺構掘り。
平成9年1月30日	航空写真撮影。
1月31日	記者発表。
2月1日	現地説明会。
2月10日	各バンク掘り下げ。
2月17日	複合遺跡のため下の層を確認する。
2月18日	調査区にトレンチを入れる。
2月25日	弥生の包含層は確認できない。
2月28日	調査区全体埋め戻し開始。
3月30日	埋め戻し終了。
3月31日	調査終了、器材の整理等、現場の残務処理を行い、現場での作業を終了する。

### 第3節 試掘調査の結果

飛田坂本遺跡は平成7年度に実施した試掘調査の結果、各トレンチから縄文、弥生時代、古代～近世の遺物を確認した。中世の遺構も検出した。(試掘トレンチ、18個開けて調査した)

各トレンチの位置、層序は次のとおりです。

- T R 1 —— 青灰色粘質土層から石列。(時期不明)
- T R 2 —— 縄文時代晩期の土器片2点。(Ⅵ層、黒墨層)
- T R 3 —— 土師器、須恵器、青磁。
- T R 4 —— 土師器、瓦質土器、青磁。
- T R 5 —— 土師器。
- T R 6 —— 土師器、青磁。
- T R 7 —— 土師器、青磁、陶磁器。
- T R 8 —— 土師器、瓦器、土錘、遺構確認。(柱穴)
- T R 9 —— 土師器。
- T R 10 —— 土師器、青磁。



T R 11——土師器。

T R 12——土師器、青磁、瓦器、瓦質土器、遺構確認。(柱穴、土坑)

T R 13——土師器、陶磁器。

T R 14——土師器、陶磁器。

T R 15——陶磁器。

T R 16——陶磁器。

T R 17——陶磁器。

T R 18——陶磁器。

試掘調査でT R 2から縄文時代晩期の遺物(VI層、黒墨層)を確認した。1点は胴部屈曲部破片、胎土はチャートの礫を含む・1点は口縁端部に刻み目文を施す。T R 8とT R 12から遺構を検出した。また、各トレンチから遺物を確認した。

平成8年度、T R 5～T R 18を本調査(平成8年9月～平成9年3月)。平成9年度、T R 1～T R 4を本調査(5月～6月)。本調査では、縄文時代の遺物、遺構は検出されなかった。須崎市は、今まで縄文の遺物、遺構は確認されていなかったが、今回の試掘調査で遺物が検出された事で、報告書に記載されたい。当遺跡周辺には、縄文の遺跡としては、佐川町の不動ヶ岩屋洞窟遺跡、土佐市戸波の二宮神社近傍遺跡がある。これらの場所から縄文人が須崎市にも移動したことも十分考えられる。発掘調査が進むにつれて解明されていくことを期待する。

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的、歴史的環境

### (1) 地理的環境

須崎市は、ほぼ高知県の中央に位置し、南は土佐湾に面して、北東は土佐市に連なり、北は佐川町、北西は葉山村、西は大野見村と境し、南西は中土佐町に接している。この須崎市を地理的にみれば、東経133度17分11秒、北緯33度23分53秒に位置し、東西約25km、南北約14kmに達する。

北部には不入山脈が鶴松森を経て葉山村の北部を通り蟠蛇森（769m）、虚空蔵山（675m）を擁している。秩父古生層を主として珪岩、石灰岩より成る。蟠蛇森は大野見村との境にある綱付山（842m）に次ぎ、佐川町も斗賀野との境界をなし、南面は仏像構造線に伴う断層崖で屹立して、東へ延びて土佐市北方の山嶺となっている。この山脈の南断層崖下には、2300mの丘陵があり、浦の内北部に延びて御領寺山脈となって土佐市との境をなし、多ノ郷付近では陥没と河の侵蝕による小平野をつくる。

南部は綱付山脈が角谷で海に没し、更に海蔵寺山から横浪半島の脊梁を形成し、竜崎に至って土佐湾に消える。法印峠から南に分脈が走り蜂ヶ尻に至りその先端に、神島、中島、戸島が点在して野見湾を抱いている。

新庄川は葉山村西部鶴松森に源を発して、構造線による葉山溪谷を東流する河岸段丘をつくり、上分の夫領付近から横谷となり、更に落合で依包川を合流して東に向きを変え新庄平野を貫流して須崎湾に注ぐ。

御手洗川（大間川）は蟠蛇川の南麓に源を発し、宮ノ川内奥には断層崖にかかる垂ノ滝あり、加茂の社前から東流して大間で須崎湾に注いでいる。

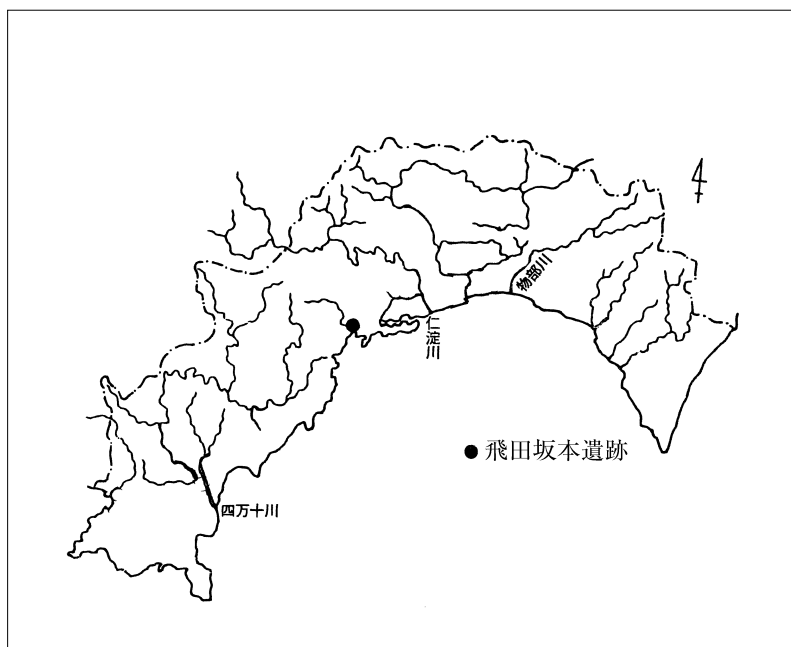


Fig. 1 飛田坂本遺跡位置図

桜川は虚空蔵山、蟠蛇森に発して東南流し支流とともに吾井郷の平野をつくり下村付近では度々流路を変えている。古くは土崎付近を流れていたが仏坂から西流する神田川が合流する新川橋付近から人工により流路を変えて押岡川の出口付近で合流し大坊岬で海に注ぐ。

## (2) 歴史的環境

須崎市の歴史は、約34遺跡がある。今回調査した飛田坂本遺跡付近（桜川流域）には、5遺跡が確認されている。上流から見てみると桑田山の西ノクボ遺跡（中世）古銭出土。吾井郷の弘岡乙丸遺跡（昭和38年発掘調査、弥生時代）、吾井郷の山添遺跡（中世）、吾井郷の畦田城跡（中世）、神田飛田字坂本の飛田坂本遺跡（弥生、中世）、過去に弥生中期末の青銅器（銅銚2本）が出土。室町時代中期の角塔婆（須崎市の史跡）が確認されている。

縄文時代の遺跡や遺物は、須崎市に近い佐川町西山の不動ガ岩屋の石灰岩洞穴遺跡や土佐市戸波西鴨地徳庵からは縄文時代でも古い時期のものと見られる石器や土器が発見されている。

佐川町西山の不動ガ岩屋洞穴遺跡は、昭和39年、42年と二回にわたって発掘調査されその結果、縄文章創期の細隆線土器や早期の押型文土器などが発見されてる。また、土佐市戸波西鴨地徳庵からは縄文早期以前のものと思われるポイント（石槍石器）が出土している。

このように須崎市に近いところに縄文時代のはじめのころの二つの遺跡がある。当遺跡でも、平成7年度による試掘調査で縄文時代の遺物（土器片数点）を確認している。

弥生時代に入ると、増岡遺跡と弘岡乙丸遺跡から弥生時代の神西式土器と呼ばれている土器が発見されている。また、弘岡乙丸遺跡南方約300m付近から石剣、新庄波介遺跡から三本の銅剣が出土、その中の二本は中細形銅剣で双孔のあるもの、残りの一本は中広形銅剣、もう一つ須崎市内で発見された弥生時代の青銅器が当遺跡の南方、山の中腹から広鋒銅銚2本、明治17年に発見されている。

古墳時代に入ると、浦の内灰方古墳群である。この古墳群は二基の古墳からなるもので現在までに耳飾り、土師器、須恵器が出土している。

中世になると、11世紀頃から山内氏入国前までを津野時代とし、特に土佐七守護の一人として勢力を振るったが、一条氏との攻防あり最後には長宗我部氏に屈服した。

戦国時代の城は天険、丘陵を利用した山城で専ら戦闘用の城累であった。須崎市内にもいくつかあるがその中には構造や城主も詳らかではないが十ヶ所ぐらい山城が確認されている。また、飛田名古屋坂の登り口の山端に敵、味方の供養塔といわれる角塔婆がある。明応5年（1496）のものであるからこの戦以前にもこの付近で交戦があったと考えられる。

今回の調査で遺物は中国製の青磁、畿内産の瓦器が多数出土（県下では一度に多量に出土したのはあまり例ががない）。遺構は掘立柱建物址4棟確認された。

近世は、土佐藩須崎砲台があり黒船の渡来により、海岸の防備、嘉永から安政年間にかけて、海岸各地に砲台跡がある。（国の史跡に指定）

遺物は肥前系陶磁器、伊万里、波佐見、江永、瀬戸：美濃少量出土。漳州窯（汕頭染付け）1点出土。

以後、昭和29年市制施行により、須崎、浦の内、多ノ郷、吾桑、上分の五ヶ町村が合併し現在に至っている。

参考文献 須崎市史 須崎市 1974年



Fig. 2 周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西ノクボ遺跡	中世	13	竹ノ鼻遺跡	弥生,古代,中世	25	東寺中遺跡	中世
2	弘岡乙丸遺跡	弥生	14	行正遺跡	中世	26	塗師屋遺跡	弥生,中世
3	山添遺跡	弥生	15	南ノ沖遺跡	中世	27	中氏の宝篋印塔	中世
4	畦田遺跡	中世	16	清末遺跡	古代,中世	28	溝添遺跡	中世
5	飛田坂本遺跡	弥生,中世	17	古田遺跡	弥生	29	トギヤ遺跡	中世
6	石木戸城跡	中世	18	須崎城跡	弥生	30	土居遺跡	中世
7	菊之森城跡	中世	19	土佐藩砲台跡	近世	31	札付城跡	中世
8	岩永遺跡	縄文,中世	20	蔭畑遺跡	中世	32	伝水上志計志麻呂供養塔	中世
9	張城遺跡	中世	21	岡本城跡	中世	33	南山遺跡	中世
10	針木城跡	中世	22	波介遺跡	弥生	34	戸島遺跡	弥生,中世
11	土居の谷遺跡	中世	23	畝鼻遺跡	中世			
12	久保ノ前遺跡	中世	24	増岡遺跡	弥生			

周辺遺跡一覧表

# 第Ⅲ章 調査の概要

## 1 調査の方法

平成7年度の試掘調査で遺構（柱穴、土坑）、遺物（土師器、青磁、瓦器）を確認した遺跡について工事によって影響を受ける部分の全面発掘調査を行う。

調査区は以前田畑であった。草刈から調査を進め、包含層の上面まで機械による掘削を行い遺物包含層以下は全て人力で遺構等の検出作業を行った。中世の包含層を確認し、遺構の完掘後、古い時代の層を確認したが包含層は確認できなかった。調査後は航空写真を撮影し、遺構の完掘後には、ヘリによる航空写真測量も行う。

本遺跡の基準点は、測量会社にお問い合わせした。調査区東側をK1、西側K2、基準点2点を設置した。K1の座標  $X = 46639.916$   $Y = -18122.394$   $H = 17.088$ である。K2の座標は  $X = 46546.873$   $Y = -18215.848$   $H = 7.548$ である。調査は、調査区の形状に合わせて設置した。4×4mのグリットに基いて行い、調査区の北側をA区、中央上段をB区、中央下段をC区、南側をD区に分けて調査を実地した

## 2 基本層序

本遺跡は桜川流域左岸の下流域に位置する遺跡である。

調査区A区の層序は東壁セクションである。1層は現在の水田面で、にぶい黄色シルト層である。II層は、水田の床土で灰色シルト層である。III層は褐灰色（小礫を含む）層で、遺物（瓦質土器、土師器、染付け碗）各1点ずつ出土。IV層は明黄褐色（礫を含む）で遺物は確認されなかった。V層はオリブ黒粘質土で遺物は確認されない、鉄分を少量含む。

調査区B区の層序は東壁セクションである。1層は表土オリブ黄色。II層はオリブ褐色（近世の遺物）である。III層は暗オリブ褐色層で（中世の遺構、遺物）。IV層は灰褐色（弥生、古代の遺物）を含む層である。

調査区C区の層序は南壁セクションである。I層は表土（黄灰色）。II層は暗灰黄褐色（近世の遺物）である。III層は暗灰黄色（土師器、集石を含む）包含層である。IV層はオリブ黄色（小礫を含む）である。

調査区D区の層序は北壁セクションである。1層は現在の水田面でにぶい黄灰色シルト層である。II層はオリブ黄色で遺物は確認されなかった。III層は青灰色粘質土層で、近世と思われる墨書を記した木簡（10点）、これらの近世木簡については水稲耕作にかかわる直接的な資料として重要である。特に中世から近世にかけてこのような資料がほとんど現存していない事からすれば稲作にあたっての品種改良、作付けや収穫時期などにただならぬ苦心を払った近世農村の実態について有益な示唆を与える資料として評価することができる。IV層は暗褐色層で遺物は確認出来なかった。V層は小、中礫が多く含まれる層で鉄分を少量含む。



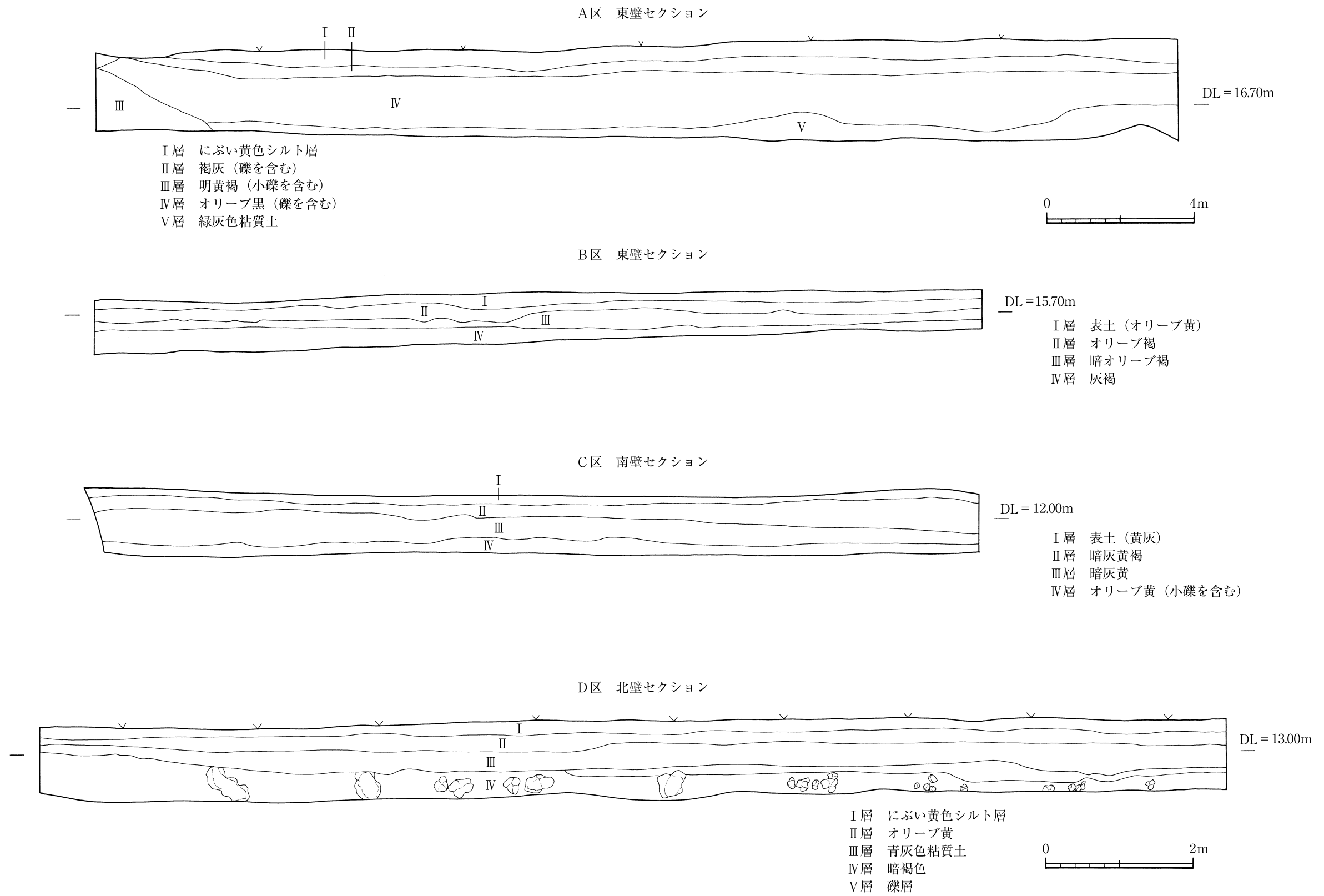


Fig. 3 A~D区 調査区基本層序





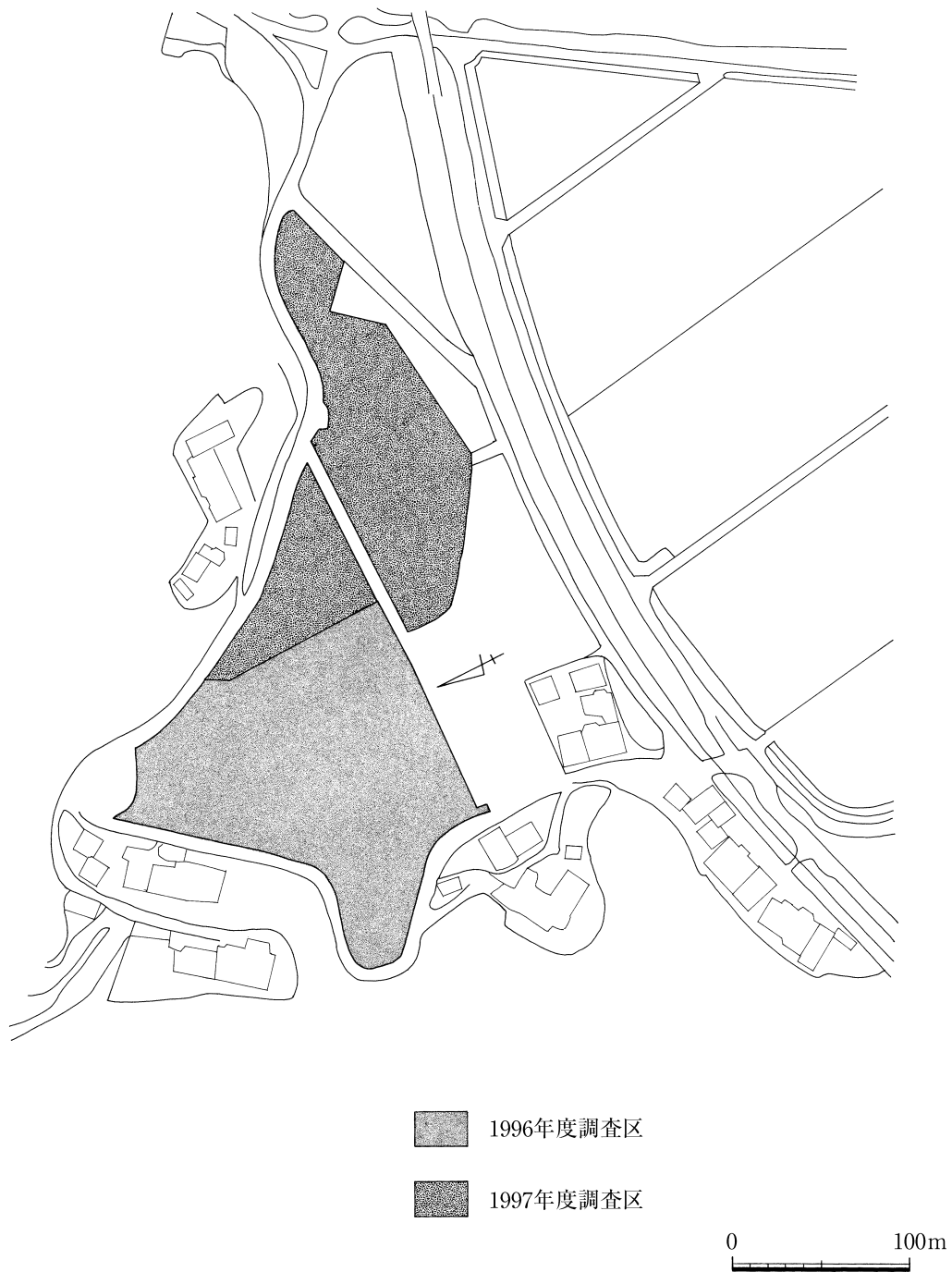


Fig. 4 飛田坂本遺跡調査区位置図

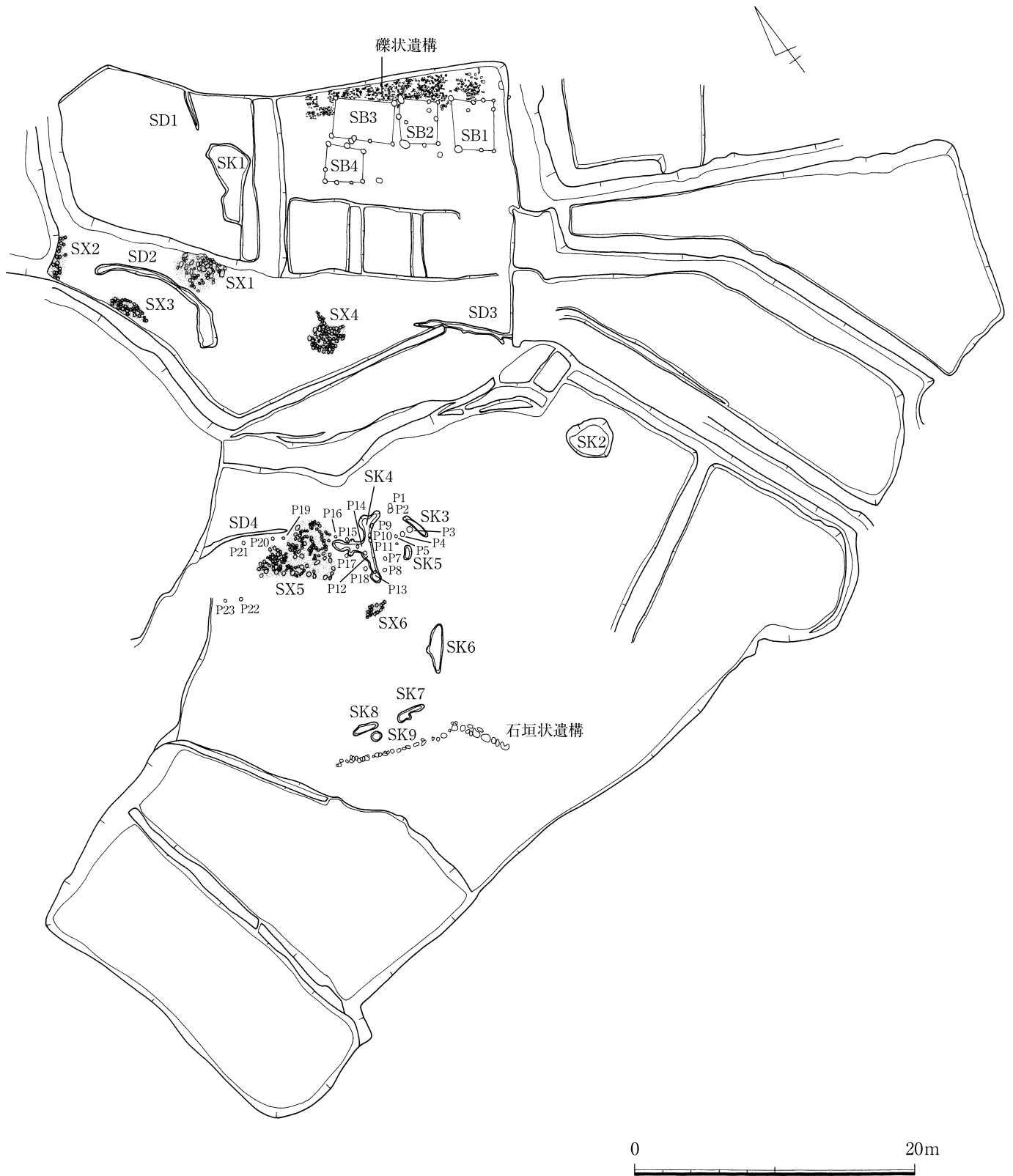


Fig. 5 検出遺構全体図

# 第Ⅳ章 遺構と遺物

## 第1節 A区

### 調査区の概要と層序

#### 調査区の概要

A区の調査区は、北側の上段部分である。南北17m、東西8m、面積136㎡を測る。現在水田面である。調査の結果、遺物はトレンチの南側のⅢ層（褐灰色）から瓦質土器（鍋類）形態は口縁部分が「く」の字状に外反している、その東側から土師器（内面回転台成形）を確認する。トレンチの北側のⅡ層から近世（染付け碗、波佐見系陶磁器17～18世紀頃）、同じ層の南東から土製人形（近世と思われる）Fig 7（4）は天神像と思われる資料、Fig 7（5）は境内を一体化した物と思われる。遺物包含層は確認されたが調査区以外の山の斜面から流れ込んできたと思われる。遺構は確認出来なかつた。現在調査区の東側の斜面が凹んだいて昔は谷部であったと考えられる

#### 層序

東壁セクションを観察する。1層は表土(にぶい黄色シルト層である)、Ⅱ層は水田の床土（褐灰色のシルト層、遺物を含む層）。Ⅲ層明黄褐色（遺物を含む層、小礫を含む）、Ⅳ層オリーブ黒（小礫を含む）である、Ⅴ層は緑灰色粘質土で遺物は含まれてない。

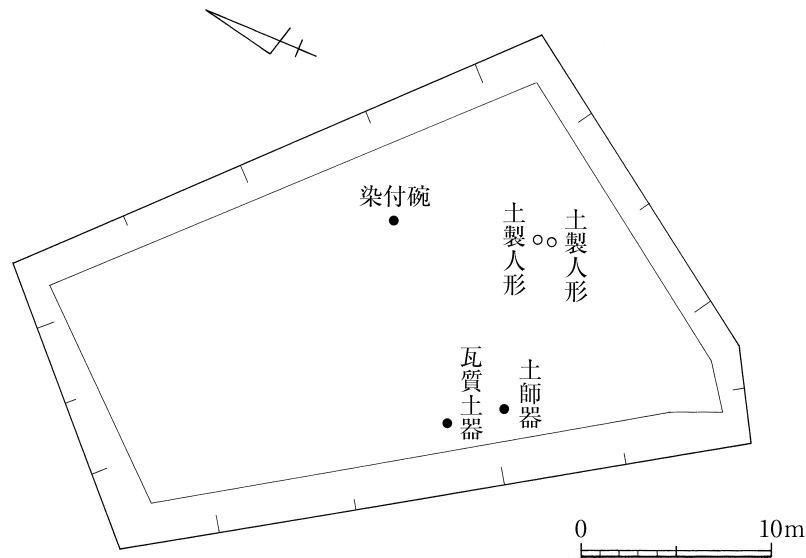


Fig. 6 A区 全体及び出土遺物地点

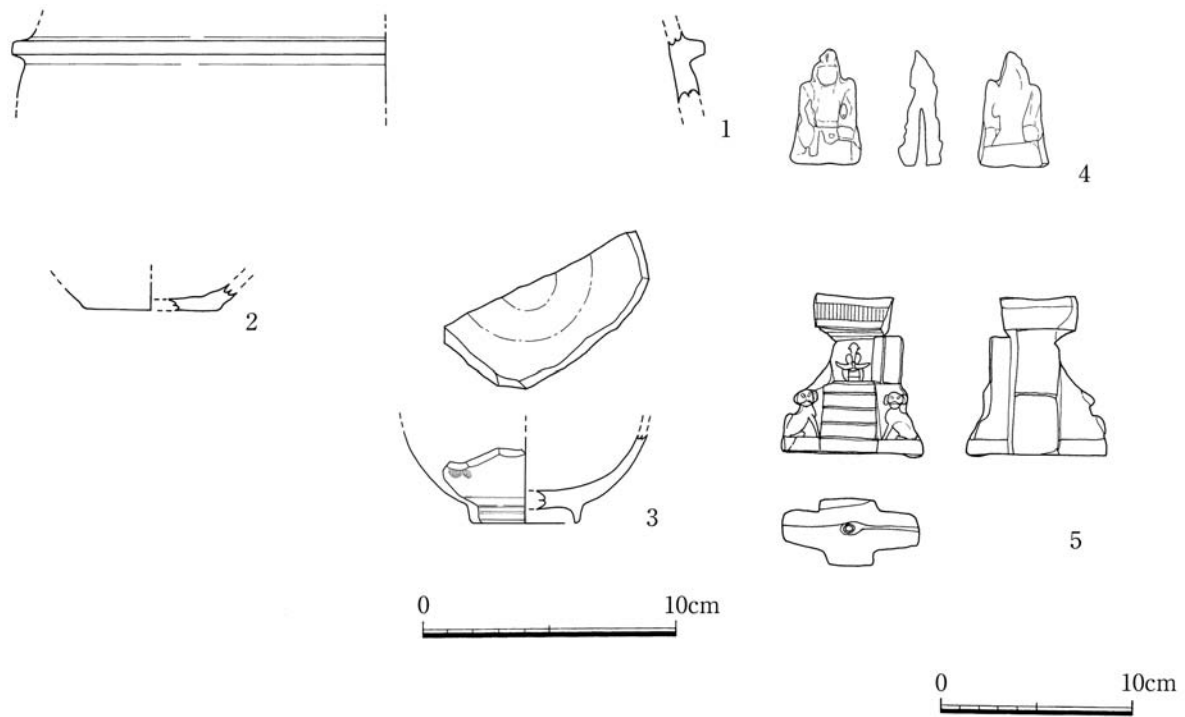


Fig. 7 A区 出土遺物実測図 (1~5)

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
7-1	Ⅲ層	瓦質土器		- - -	口縁部は「く」の字状に外反する	全体的に摩耗が著しく不明	鍋類
7-2	〃	土師器 (小皿)		- (1.1) - 5.4	平坦な底部から、体部はやや内湾気味に立ち上がる。	内面、回転台成形 底部は摩耗が著しく不明	
7-3	Ⅱ層	陶磁器		- 13.6 - 4.0	蛇の目高台から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。 高台の部分に染付けのラインが2本はある。 体部下段染付けの線が1本はある	高台、蛇の目の部分は無釉 高台内は施釉	波佐見系陶磁器 17~18世紀染付け
7-4	〃	土製人形 ①	全長	3.05	天神像と思われる資料。 小脇に抱えた鯛も明瞭ではない 底部開孔する	成形は「型起し」前後合わせの座像胎土はにぶい橙色系	近世
7-5	〃	土製人形 ②	全長	3.2	境内を一体化した物と思われる階段の左右に二匹の狛犬と思われる像が座る。 階段の上段に天神像が座っているように思われる 底部は開孔する	成形は「型起し」前後合わせ 胎土はにぶい橙色系	〃

表1 A区 遺物観察表

## 第2節 B区

### 調査区の概要

#### 調査区の概要

B区の調査区は、東側中央上段～中段部分である。現在はミカン畑である。やや東から西にかけてなめらかに傾斜している。掘立柱建物跡4棟、柱穴、SK1基、SD3条、集石遺構(SX1～4) 礫状遺構1基を確認。遺物は弥生から古代、中世、近世の遺物を確認する。詳しくは各項で述べることにする。

#### 掘立柱建物跡

##### SB1 (Fig. 8)

調査区、南側に位置する。棟軸N-40°-Wにとる建物跡である。規模は、桁行3間(3.8m)、梁間2間(3m)を測るがやや歪みを生じる。柱穴の掘り方は楕円形を呈しており径20～52cmを測り、大小さまざまである。深さは24～55cmを測る。埋土は、暗灰褐色粘質土である。遺物は、P1から土師器の小皿、P2から土師器の杯、P4から土師器の杯、P6から土師器の杯、P8から土師器の杯、P9から青磁の碗が出土している。実測不能の土師器の細片も出土。

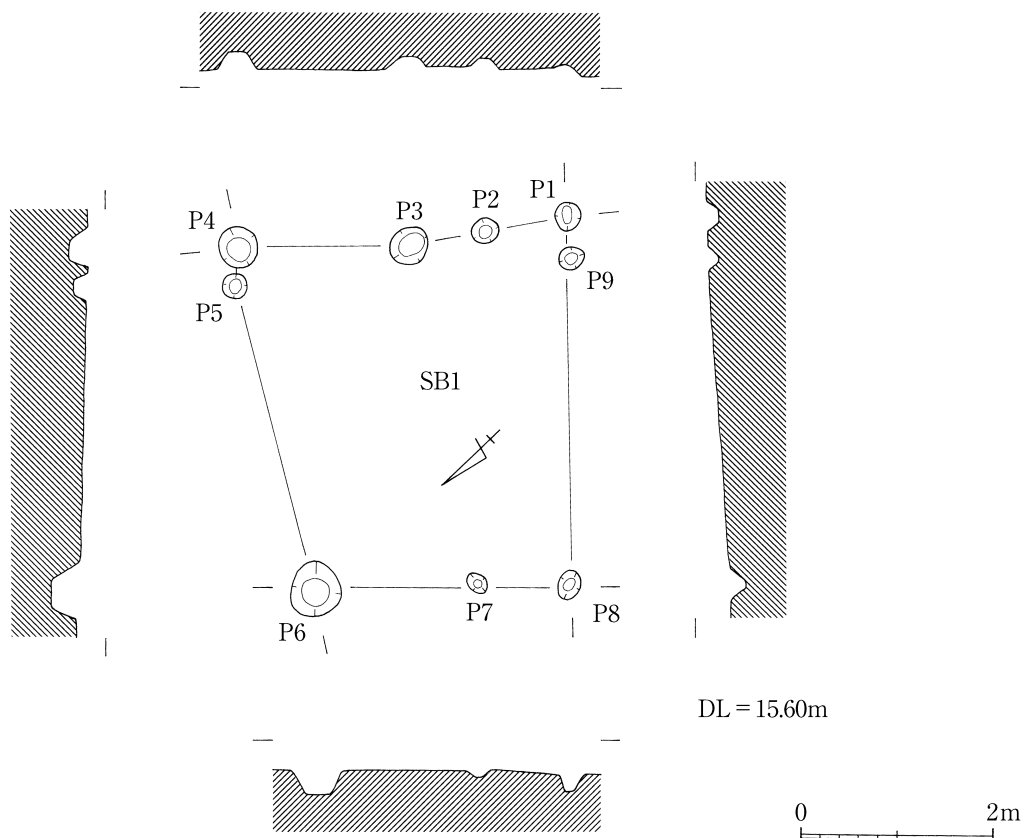


Fig. 8 SB1 遺構平面図及びエレベーション図

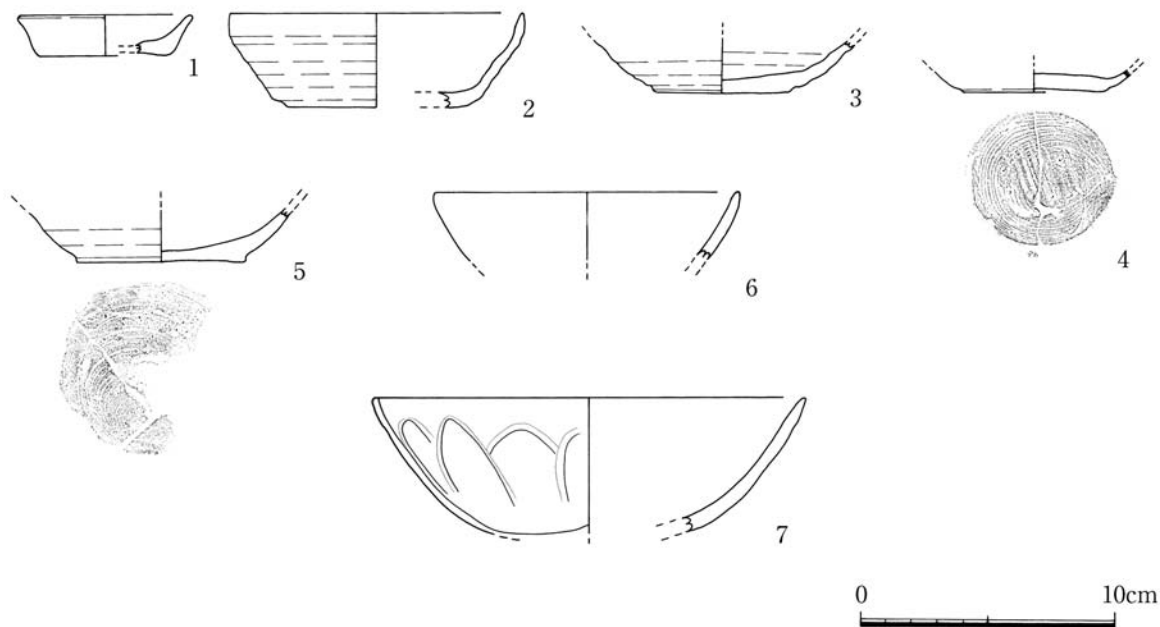


Fig. 9 SB1 遺構出土遺物実測図

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
9-1	P1	土師器 (小皿)	6.6 1.6 -	5.0	平坦な底部で、器壁が厚く体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部でやや外反する	口縁端部ヨコナデ全体的に摩耗が著しく不明	
9-2	P2	土師器 (杯)	11.4 3.65 -	6.2	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる、口縁部は内側に屈曲	底部外面糸切り、回転台成形、口縁内外面ヨコナデ調整	
9-3	P4	〃	- (2.2) -	5.4	平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、体部内外面口クロ痕残る	
9-4	P6	〃	- 0.8 -	5.5	平坦な底部、内面は浅黄橙と青灰の混じり、外面は橙、青灰の混じり	外面底部糸切り	
9-5	P6	〃	- (2.2) -	6.7	平坦な底部からやや内湾気味に外上方に立ち上がる	内外面口クロ痕が残る、底部糸切り	
9-6	P8	〃	12.0 (2.6) -	-	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る	回転台成形、口縁端部ヨコナデ	
9-7	P9	青磁 (碗)	16.8 (5.3) -	-	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る、外面鑄蓮弁文が施される	体部内外面施釉	

表2 B区 SB1遺物観察表

ピットNO	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態	ピットNO	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P 1	0.8×0.7	14	楕円形	P 6	1.5×1.5	22	円形
P 2	0.8×0.8	17	円形	P 7	0.5×0.5	12	〃
P 3	1.0×1.1	20	〃	P 8	0.9×0.5	19	楕円形
P 4	1.0×1.0	20	〃	P 9	0.7×0.7	13	円形
P 5	0.6×0.6	18	〃				

表3 B区SB1 ピット計測表

S B 2 (Fig. 10)

調査区B区のS B 1の北側に位置する。棟軸N-52°-Wにとる建物跡である。規模は桁行2間(3.9m)、梁間2間(3.3m)を測る。柱穴の掘り方は楕円形を呈しており、径20~60cmを測りさまざまである。深さは12~52cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物はP 3から東播系須恵器(鉢)、P 4から土師器の小皿、P 6からも土師器の小皿、P 7からは土師器の杯が出土。

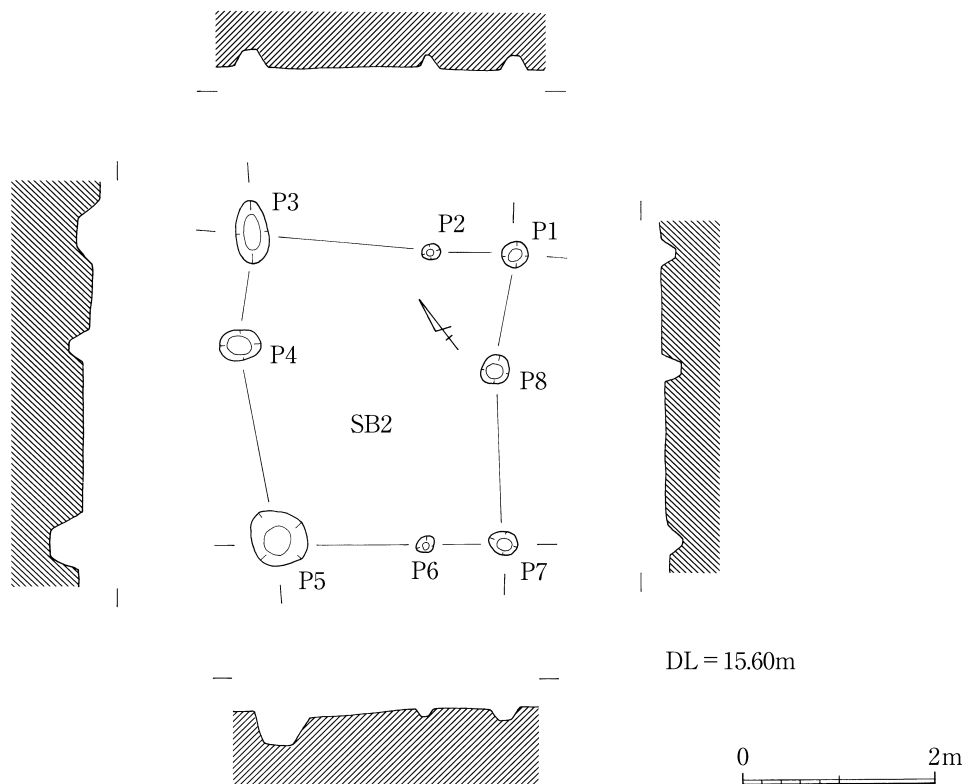


Fig. 10 SB2 遺構平面及びエレベーション図

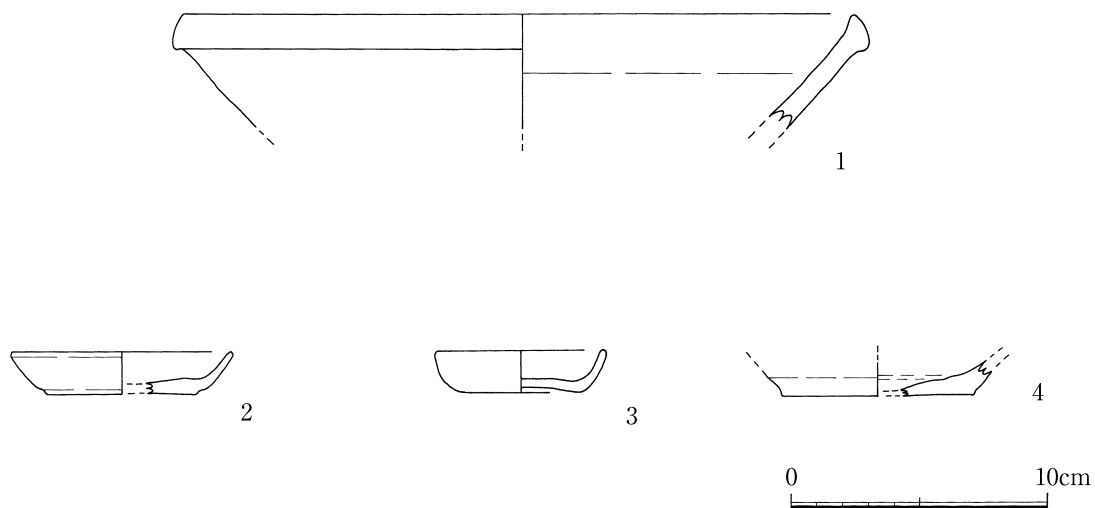


Fig. 11 SB2 遺構出土遺物実測図 (1~4)

ピットNO	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態	ピットNO	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P 1	0.7×0.7	18	円形	P 5	1.5×1.5	35	円形
P 2	0.5×0.5	15	〃	P 6	0.5×0.5	14	〃
P 3	1.5×0.9	25	楕円形	P 7	0.8×0.8	17	〃
P 4	1.0×0.8	23	〃	P 8	0.9×0.8	18	〃

表4 B区 SB2ピット計測表

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
11-1	P 3	須恵器 (捏ね鉢)		26.4 (4.4) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部肥厚し上方に拡張される	回転ナデ調整	
11-2	P 4	土師器 (小皿)		8.6 1.75 — 5.8	平坦な底部から直線的に立ち上がる	底部糸切り、回転台成形	
11-3	P 6	〃		6.2 1.7 — 4.4	やや上げ気味の底部から、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、全体的に摩耗が著しく不明	
11-4	P 7	土師器 (杯)		— (1.4) — 7.6	平坦な底部から直線的に立ち上がる	底部糸切り、内底口クロ痕が残る	

表5 B区 SB2 遺物観察表



S B 3 (Fig. 12)

調査区B区、S B 2の北側に位置する。棟軸N-48°-Wにとる建物跡である。規模は桁行3間(4.8m)、梁間2間(4.0m)を測る。柱穴の掘り方は楕円形を呈しており径28~40cmを測りさまざまの大きさである。深さは16~36cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物はP 1から土師器の小皿、P 2からも土師器の小皿、P 7からは土師器の杯が出土する。

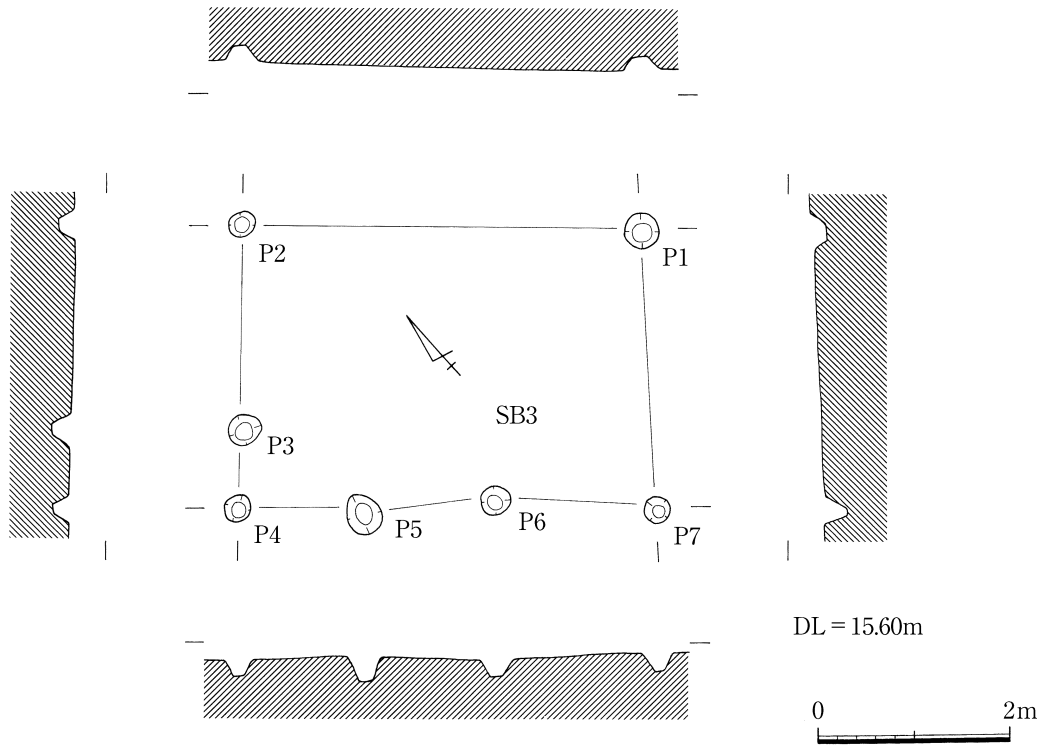


Fig. 12 SB3 遺構平面及びエレベーション図

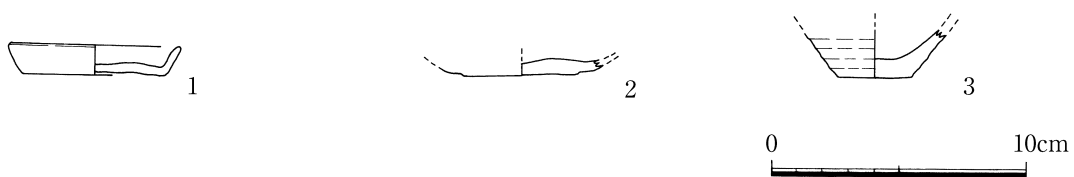


Fig. 13 SB3 遺構出土遺物実測図 (1~3)

ピットNO	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態	ピットNO	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P 1	1.0×1.0	20	円形	P 5	1.2×0.9	27	楕円形
P 2	0.8×0.7	18	楕円形	P 6	0.7×0.7	20	円形
P 3	1.0×1.0	24	円形	P 7	0.6×0.6	15	◇
P 4	0.7×0.6	17	◇				

表6 B区SB3ピット計測表

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
13-1	P1	土師器 (小皿)		6.6 1.2 — 5.6	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁部に至る	外面底部糸切り、 全体的に摩耗が著しく不明	
13-2	P2	〃		— (0.6) — 4.5	平坦な底部	底部糸切り 回転台成形	
13-3	P7	土師器 (杯)		— 1.9 — 2.8	器壁の厚い底部から体部は直線的に立ち上がる、底径が非常に小さい	回転台成形全体的に 摩耗が著しく不明	

表7 B区 SB3 遺物観察表

### SB4 (Fig. 14)

調査区、B区の西側に位置する。棟軸N-50°-Wにとる建物跡である。規模は桁行3間(3.2m)、梁間2間(3.1m)を測るがやや歪んでいる。柱穴の掘り方は楕円形を呈して径32~52cmを測る。深さは20~48cmを測る。埋土は茶褐色粘質土である。遺物は皆無である。

尚、SB4については、建物の規模は他に比べてやや小さいし、建物の位置、遺物も遺構から確認できなかったのが倉庫と考えている。

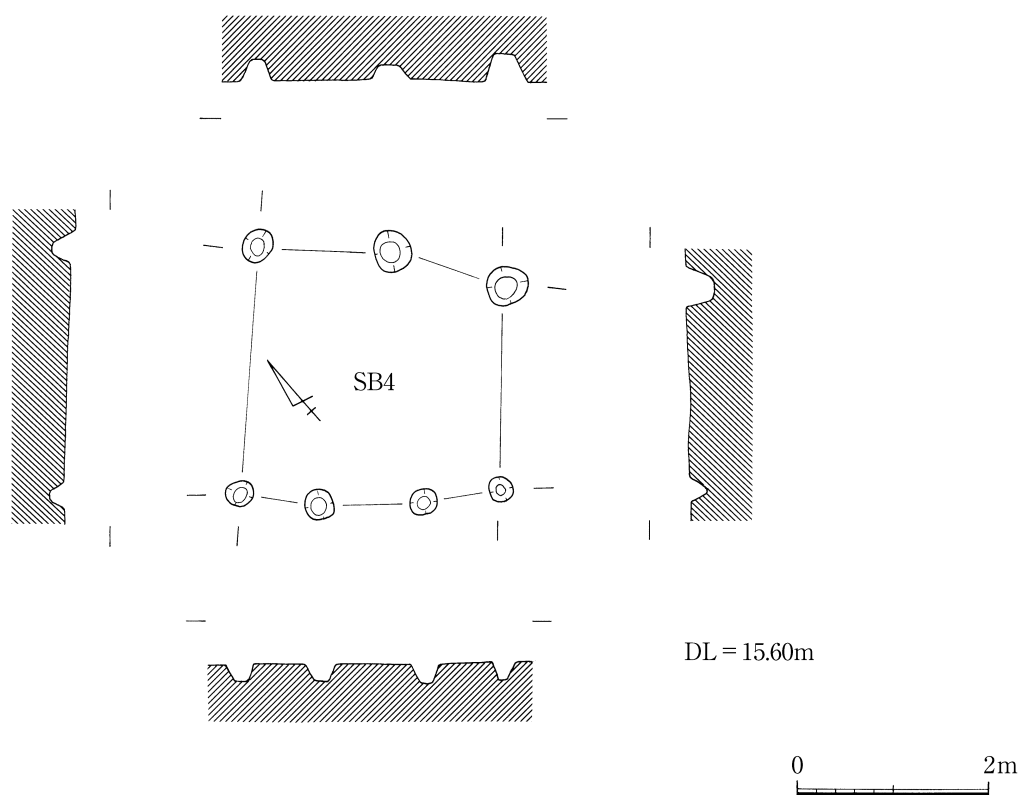


Fig. 14 SB4 遺構平面及びエレベーション図

ピットNO	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態	ピットNO	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P 1	1.1×1.0	32	円形	P 5	0.8×0.7	20	円形
P 2	1.0×1.0	17	〃	P 6	0.7×0.5	12	楕円形
P 3	1.0×0.9	20	〃	P 7	0.7×0.7	19	円形
P 4	0.7×0.6	14	〃				

表8 B区 SB4 ピット計測表

B区遺構（ピット）(Fig. 15)

P 1は、S B 1の南東側で検出した。半円になっているのは右の部分が段差になっていて掘れな  
いたため、正しくは円形で、深さは15cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色で、遺物は白磁（皿）が出  
土。P 2は、P 1の西側で検出した。楕円形で深さは14cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色で遺物  
は青磁(碗)が出土。P 3は、S B 1から検出した。円形で深さは20cmを測る。埋土はオリーブ褐色  
である。遺物は土師器の小皿が出土。P 4はS B 2の上段で検出した。楕円形で深さ18cmを測る。  
埋土は暗オリーブ褐色で遺物は土師器の小皿が出土。P 5はS B 2のP 4の北西で検出した。円形  
で深さは24cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色で遺物は白磁（杯）が出土。P 6は、S B 4の南側  
で検出した。円形で深さ30cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色で遺物は土師器の小皿が出土。P 7  
は、S B 2の西側で検出した。円形で深さ14cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色で遺物は土師器の  
小皿が出土。

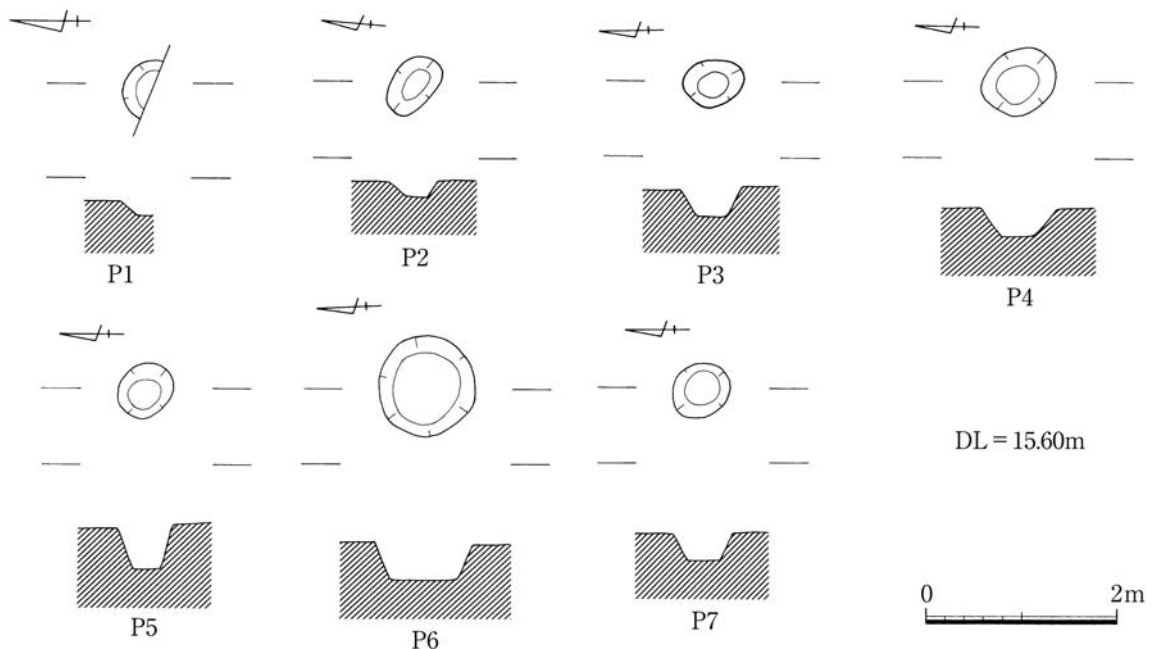


Fig. 15 B区 遺構平面及びエレベーション図

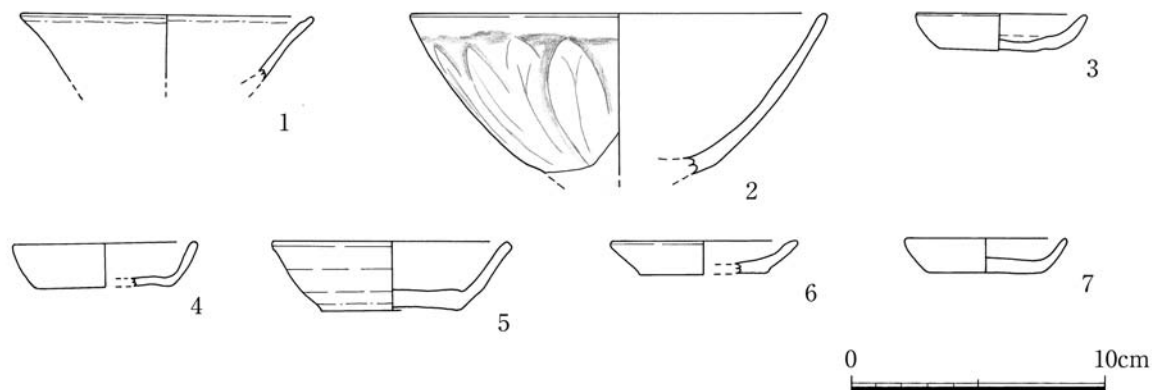


Fig. 16 B区 遺構出土遺物実測図 (1~7)

ピットNO	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態	ピットNO	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P 1	0.8×0.8	15	円形	P 5	0.7×0.6	24	円形
P 2	0.5×0.6	14	楕円形	P 6	1.3×1.3	30	◇
P 3	0.7×0.6	20	円形	P 7	0.7×0.6	14	◇
P 4	1.0×0.8	18	楕円形				

表9 B区 遺構 (ピット) 計測表

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
16-1	P 1	白磁 (皿)	11.5 (2.6) — —	11.5 (2.6) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	口縁端部は口禿である、外面ロクロ痕が残る、体部内外面施釉	
16-2	P 2	青磁 (碗)	16.2 (6.3) — —	16.2 (6.3) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る、口縁端部は若干外反する、外面に鑄蓮弁文が施される	体部外面施釉	
16-3	P 3	土師器 (小皿)	6.6 1.4 — 4.2	6.6 1.4 — 4.2	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	口縁端部ヨコナデ、全体的に摩耗が著しく不明	
16-4	P 4	◇	7.2 1.7 — 5.4	7.2 1.7 — 5.4	平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁端部に至る	外面底部糸切り、全体的に摩耗が著しく不明	
16-5	P 5	白磁 (杯)	7.2 1.7 — 5.4	7.2 1.7 — 5.4	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る、口縁端部はやや外反する、外底露胎、口縁端部の内側露胎	体部外側ロクロ痕残る	
16-6	P 6	土師器 (小皿)	7.2 1.3 — 5.0	7.2 1.3 — 5.0	平坦な底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	全体的に摩耗が著しく不明	
16-7	P 7	◇	6.3 1.35 — 4.5	6.3 1.35 — 4.5	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	口縁端部内外面ヨコナデ、底部糸切り	

表10 B区 遺構 (ピット) 観察表

SK-1 (Fig. 17)

B区、SK1は掘立柱建物址の北側で検出した不整長方形の土坑で、長辺5.8m、短辺1.2~2.3m、深さ20~35cmを測り、埋土は暗オリーブ褐色である。出土遺物は30点ぐらいみられ、1~5が復元できた。

出土遺物 (Fig. 18) 1~5

器種、形態は、(1)は土師器の杯で底部から胴部にかけて残存し、器壁の厚い平坦な底部、底径6.6cmを測る。(2)も土師器の杯で平坦な底部、体部外面回転台成形、口縁部は12.0cmを測る。(3)も土師器の杯、平坦な底部で口縁部は12.9cmを測る。(4)は瓦器(椀)で底部から胴部にかけて残存し薄い紐状の貼付高台、外面指頭圧痕が残り、底径4.0cmを測る。(5)は短刀、金属製品で片刃、全長32.5cm、全幅4.3cm、全厚0.75cm、重量255.4g、これは祭祀遺物と考えられている。

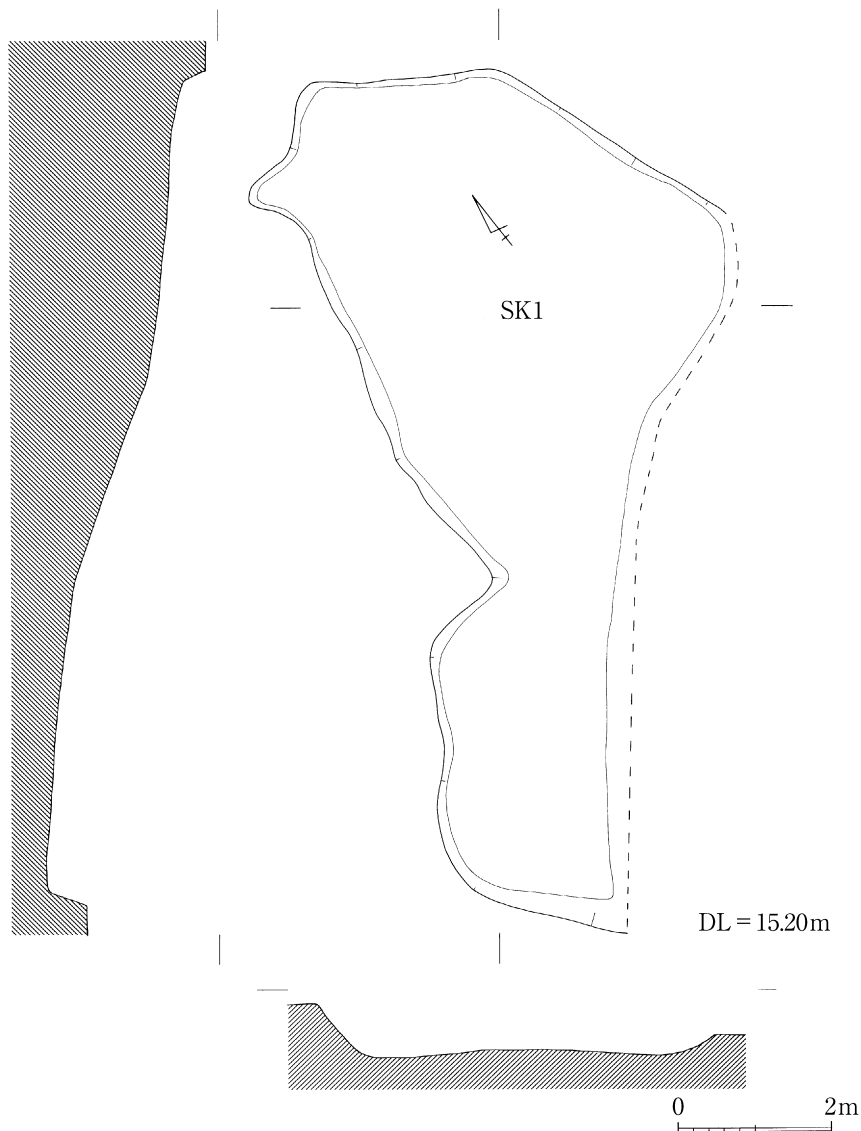


Fig. 17 SK1 遺構平面及びエレベーション図

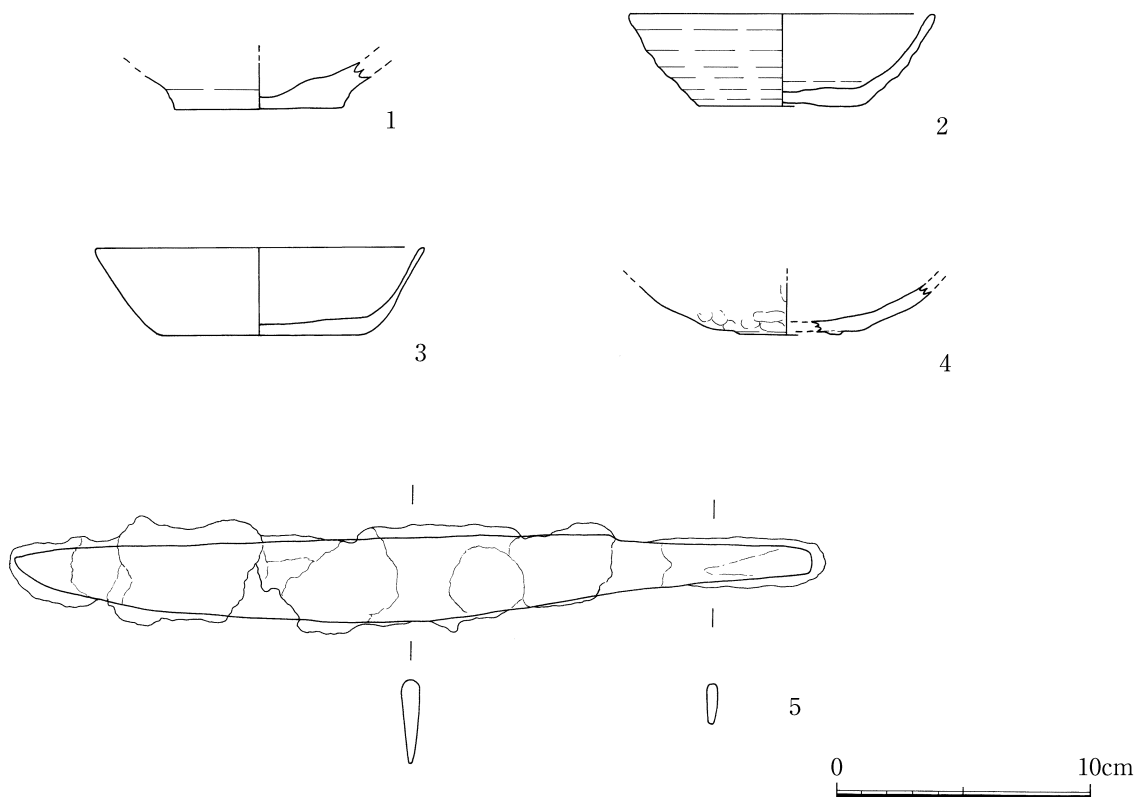


Fig. 18 SK1 遺構出土遺物実測図 (1~5)

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
18-1	SK 1	土師器 (杯)		- (1.8) - 6.6	器壁の厚い平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
18-2	〃	〃		12.0 3.6 - 6.4	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁端部に至る	体部外面回転台成形、底部は摩耗が著しく不明	
18-3	〃	〃		12.9 3.4 - 8.3	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	全体的に摩耗が著しく不明	
18-4	〃	瓦器 (椀)		- (2.2) - 4.0	薄い紐状の貼付高台から内湾気味に外上方に立ち上がる	体部外面指頭圧痕	
18-5	〃	短刀	全長 全幅 全厚 重量	32.5 4.3 0.75 255.4g	材質 金属製品	特徴 片刃である、錆化が著しい	

表11 B区 SK1 遺物観察表

SD1 (Fig. 19)

調査区、B区、SD1は、SK1の北東側で検出した東西に細長い溝である。長さ6.2m、幅33~40cm、深さ10~12cmを測り、底面はほぼ平坦であり、断面は逆台形を呈す。

出土遺物は溝部の中央部から下段にかけて実測不能の土師器の細片が数点出土する。溝部の東側(上段)からは認められなかった。復元図示できる遺物はなかった。

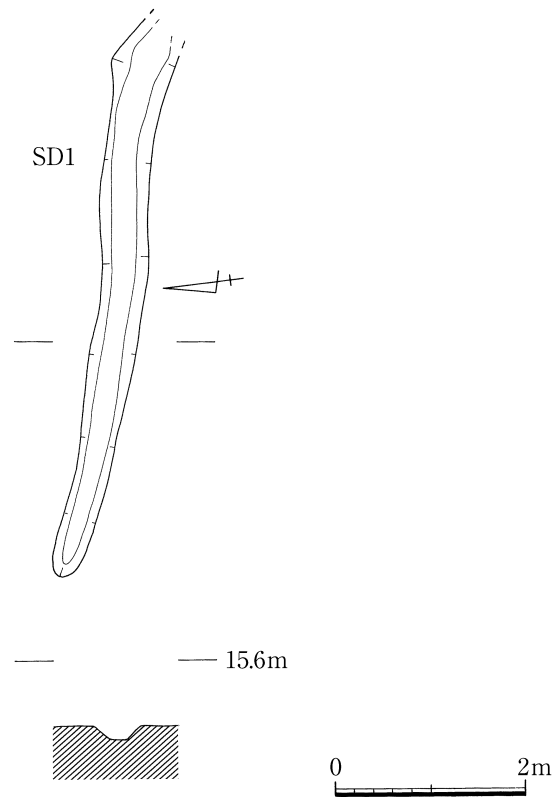


Fig. 19 B区 SD1 遺構平面及びエレベーション図

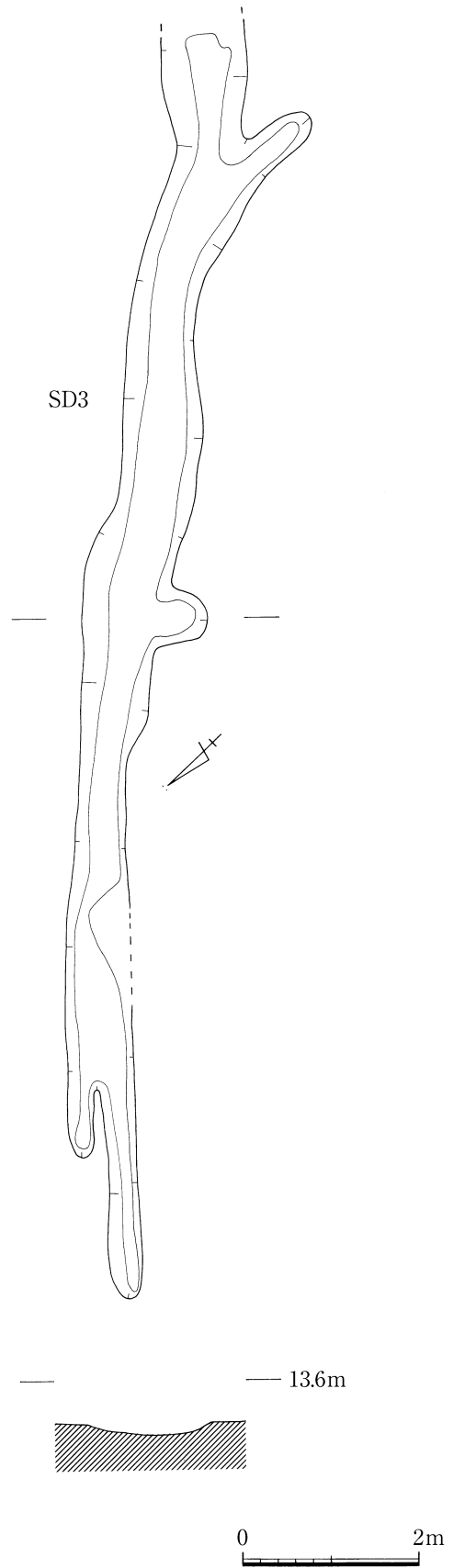
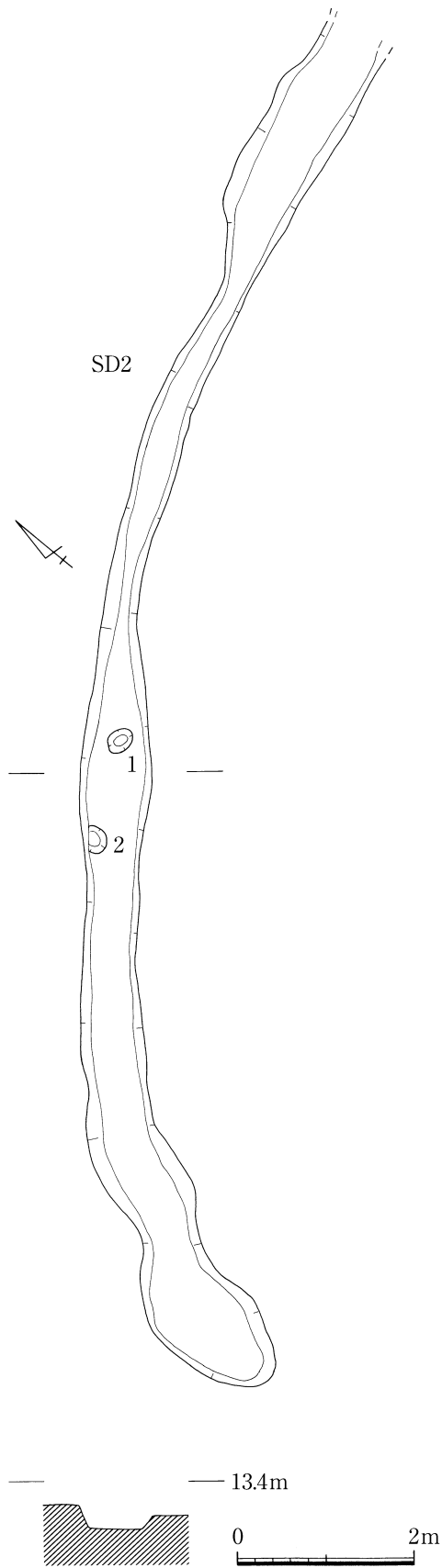


Fig. 20 B区 SD2 遺構平面及びエレベーション図

Fig. 21 B区 SD3 遺構平面及びエレベーション図



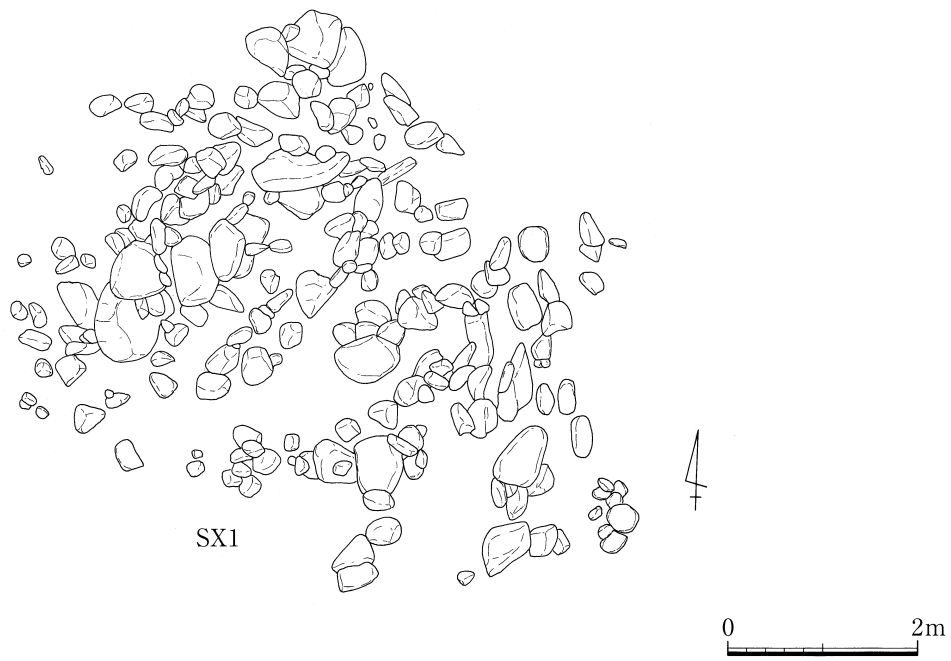


Fig. 22 B区 集石遺構 (SX1) 平面図

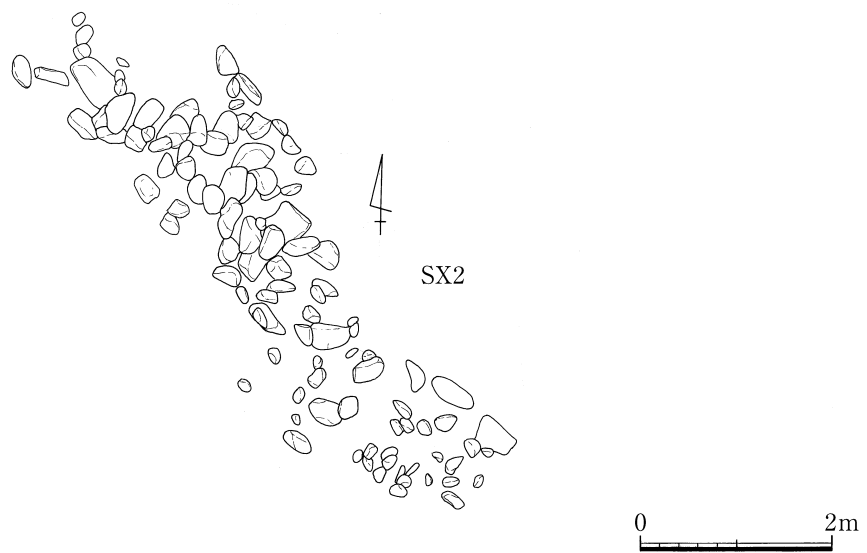


Fig. 23 B区 集石遺構 (SX2) 平面図

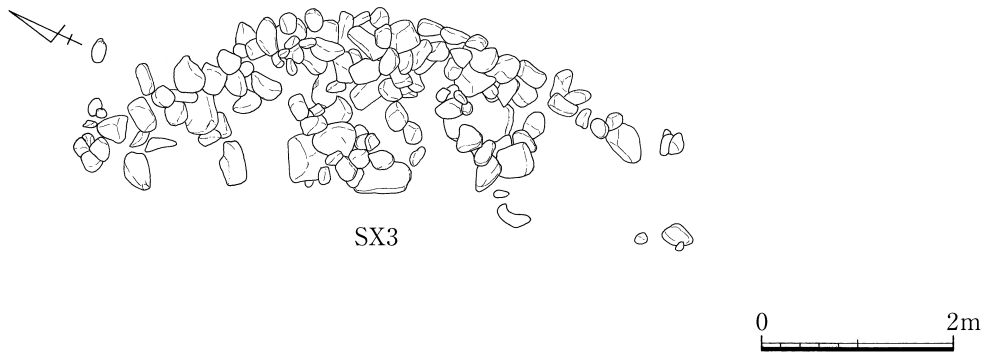


Fig. 24 B区 集石遺構 (SX3) 平面図

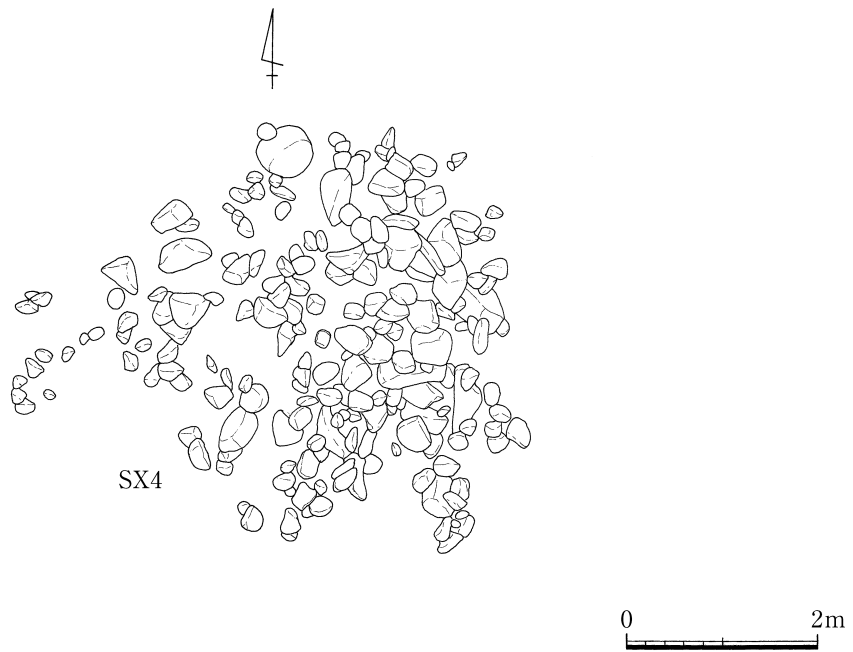


Fig. 25 B区 集石遺構 (SX4) 平面図

## S D 2 (Fig. 20)

B区、S K 1の西側で検出した遺構で南北に延び弓形の溝である。長さ12m、幅20～50cm、深さ10～20cmを測り、断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平底であり溝の中央部分で柱穴2を検出した。P 1は楕円形で深さ12cmを測り、埋土は黒褐色粘質土と褐色の混じりであり遺物は確認できなかった。P 2も楕円形で深さ11.8cmを測り埋土は黒褐色粘質土と褐色の混じりで、遺物は確認できなかった。

## S D 3 (Fig. 21)

B区、S D 3は、S D 2の南側で検出した。南北に細長く延びて3ヶ所突き出た部分があり、2ヶ所は東西に、1ヶ所は南北に突き出た形をした溝である。長さ8.5m、幅15～25cm、深さ7～10cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄橙で遺物は確認できなかった。

## 集石遺構 S X 1 (Fig. 22)

B区、S X 1は、S D 2の東側のⅢ層上面で検出した。規模は南北3.2m、東西2.4mを測り、大小8～40cmの自然礫を方形状に配置し、埋土は黄褐色粘質土を主とする。遺物は実測不能の土師器の細片が数点出土する。

## 集石遺構 S X 2 (Fig. 23)

B区、S X 2は、S D 2の北側Ⅲ層で検出した遺構で規模は東西3.2m、南北0.8mを測り、大小20～35cmの自然礫を方形状に配置し、内部はやや盛り上がり、埋土は淡黄を主とする。遺物は実測不能の土師器の細片が数点出土する。

## 集石遺構 S X 3 (Fig. 24)

B区、S X 3は、S D 2の西側Ⅲ層で検出した遺構で規模は南北2.8m、東西1.2mを測り、大小4～20cmの自然礫を円形状に配置し、内部はやや盛り上がり、埋土は黄褐色粘質土を主とする、遺物は実測不能の土師器の細片が出土する。

## 集石遺構 S X 4 (Fig. 25)

B区、S X 4は、S D 2の南側Ⅲ層で検出した遺構で規模は3.6m、東西3.2mを測り、大小3～16cmの自然礫を楕円形には位置し内部はやや盛り上がり、埋土は褐色粘質土を主とし黒墨が少量混ざり遺物は実測不能土師器の細片が出土する。



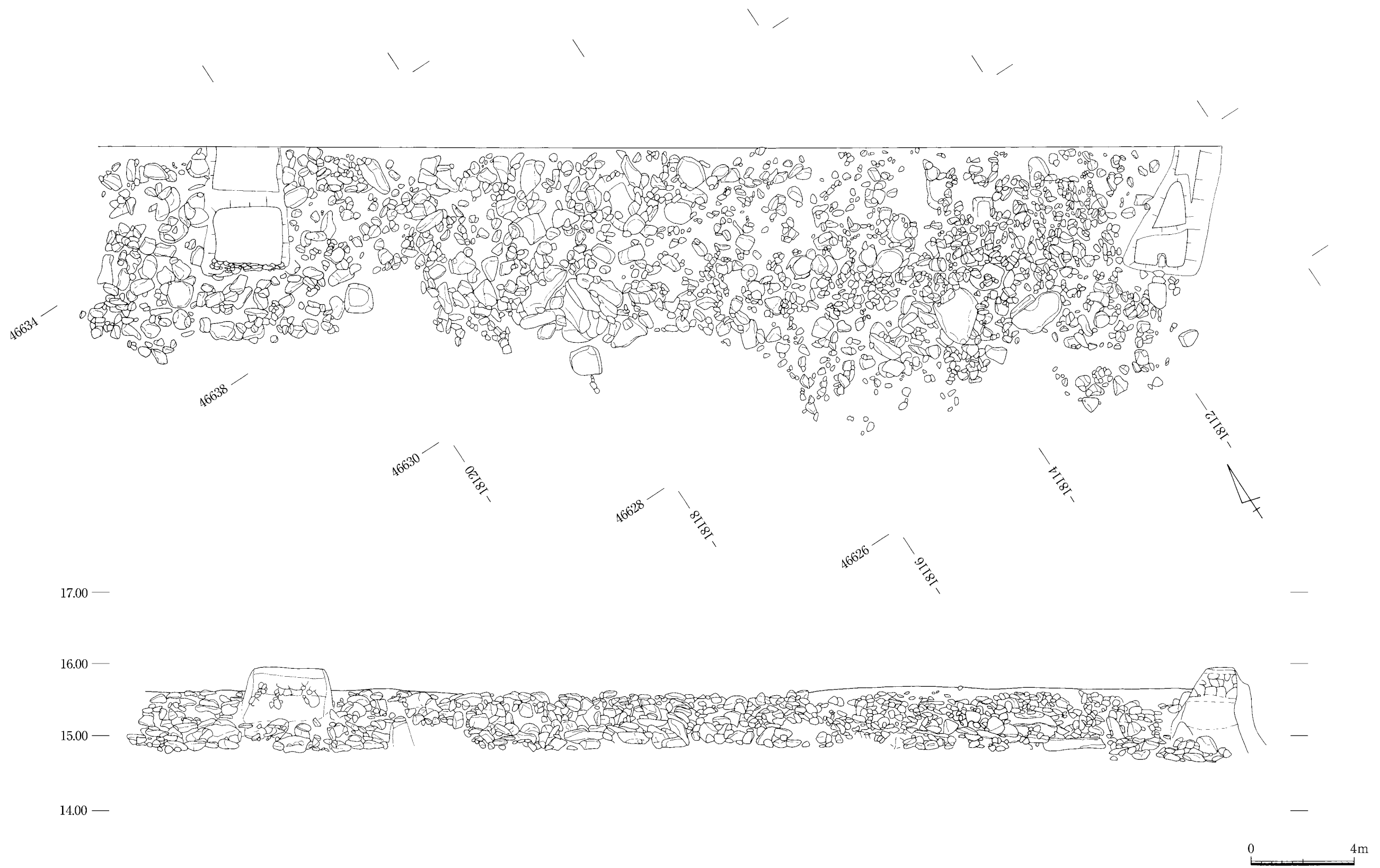


Fig. 26 B区 礫状遺構平面及び側面図



## 礫状遺構 (Fig. 26)

B区、礫状遺構は掘立柱建物址の東側で検出した。規模は長辺（南北）12.5m、現段階では短辺（東西）2.4mを測る。（短辺の東側半分は市道であるため調査はできないが高速用工事と併行して調査を行う予定）。東西ははっきりしない。礫は大小10～40cmの自然礫と河原石を積み重ねて乱石積みにし、礎石と思われる河原石も存在する。埋土は暗灰黄を主とし灰黄も少量含む。

調査の段階で石段状遺構または、基壇状遺構と推察していたが、調査が進むにつれて期待が薄れて性格不明で、礫状遺構とした。前文で述べたが、調査が全て終了したら解明することを期待したい。礫状遺構から多数遺物が出土、遺物は中世が主で土師器（小皿、杯）、瓦器（椀）、古代の土師器（甕）、が出土。復元できた遺物31点あった、実測不能の細片も多数出土した。(1)は土師器の小皿、口縁端部は肥厚しやや外反する。(2)も土師器の小皿、内湾気味に立ち上がる。(3)も土師器の小皿でやや上げ気味の底部、回転台成形、底部糸切り、(4)も土師器の小皿、体部は短くやや内湾気味に立ち上がる。(5)も土師器の小皿で体部は短く直線的に立ち上がる、回転台成形、底部糸切り。(6)も土師器の小皿、体部は直線的に立ち上がる。(7)も土師器の小皿で、やや上げ気味の底部、回転台成形、底部糸切り。(8)も土師器の小皿で体部は短くやや内湾気味に立ち上がる、口縁部ヨコナデ。(9)も土師器の小皿で体部は短くやや内湾気味に立ち上がる。(10)も土師器の小皿で平坦な底部、底部糸切り。(11)も土師器の小皿で口縁でやや内反する、回転台成形、口縁端部ヨコナデ。(12)も土師器の小皿で平坦な底部、口縁部ヨコナデ調整。(13)も土師器の小皿で体部は短く直線的に外上方に立ち上がる、口縁端部ヨコナデ。(14)も土師器の小皿で体部は内湾気味に立ち上がる。(15)も土師器の小皿で体部は短く直線的に外上方に立ち上がる、口縁部ヨコナデ。(16)は土師器の杯で体部は内湾気味に立ち上がる、回転台成形。(17)も土師器の杯で平坦な底部、回転台成形、底部糸切り。(18)も土師器の杯で体部は直線的に立ち上がる、回転台成形。(19)も土師器の杯で体部は直線的に立ち上がる、回転台成形、口縁端部ヨコナデ。(20)も土師器の杯で貼付高台、底部糸切り、ロクロ痕が残る。(21)も土師器の杯で平坦な底部、ロクロ痕が残る。(22)も土師器の杯で口縁端部でやや外反する、ロクロ痕が残る。(23)も土師器の杯で直線的に立ち上がる、回転台成形。(24)も土師器の杯で平坦な底部、ロクロ痕が残る。(25)も土師器の杯でやや内湾気味に立ち上がり底部糸切り、ロクロ痕が残る。(26)は瓦器椀で体部は内湾気味に立ち上がる、指頭圧痕が残る、内外面ヨコナデ調整。(27)も瓦器椀で薄い紐状の貼付高台、指頭圧痕、ヨコナデ調整。(28)も瓦器椀で体部は内湾気味に立ち上がる、指頭圧痕が残る、ヨコナデ調整。(29)も瓦器椀で口縁端部はやや外反する、指頭圧痕、ヨコナデ調整。(30)も瓦器椀で薄い紐状の貼付高台、指頭圧痕が残る、ヨコナデ調整。(31)は土師器の甕（古代）で「く」の字状に屈曲。

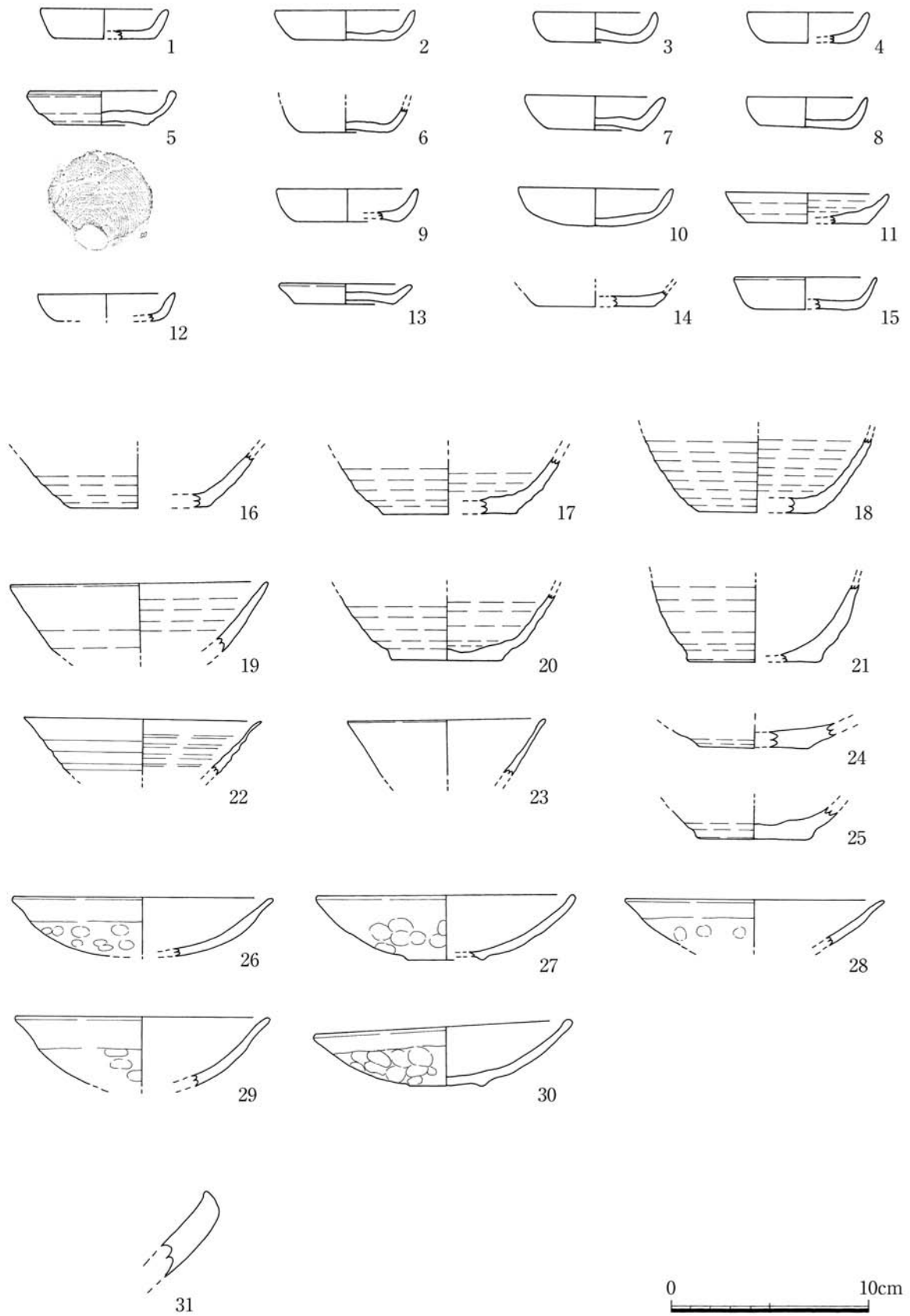


Fig. 27 B区 礫状遺構出土遺物実測図 (1~31)



挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
27-1	IV層	土師器 (小皿)		6.4 1.5 — 5.0	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る、口縁端部は肥厚し、やや外反する	全体的に摩耗が著しく不明	古代（搬入品）
27-2	〃	〃		7.0 1.5 — 5.0	平坦な底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	全体的に摩耗が著しく不明	
27-3	〃	〃		6.1 1.55 — 4.9	やや上げ気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部まで延びる	回転台成形、外面底部糸切り	
27-4	〃	〃		6.1 1.5 — 4.0	平坦な底部から体部は短くやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	全体的に摩耗が著しく不明	
27-5	〃	〃		7.3 1.7 — 4.7	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁部に至る	底部外面糸切り、体部回転台成形	
27-6	〃	〃		— 1.3 — 4.4	平坦な底部から、体部は直線的に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
27-7	〃	〃		6.7 1.7 — 4.6	やや上げ気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	回転台成形、外面底部糸切り	
27-8	〃	〃		6.1 1.6 — 4.5	平坦な底部から体部は短くやや内湾気味に立ち上がる	口縁部ヨコナデ、全体的に摩耗が著しく不明	
27-9	〃	〃		7.1 1.7 — 5.0	平坦な底部から体部は短くやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	全体的に摩耗が著しく不明	
27-10	〃	〃		7.8 1.9 — 5.6	平坦な底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	外面底部糸切り、全体的に摩耗が著しく不明	
27-11	〃	〃		8.2 1.5 — 6.0	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁端部でやや内反する	回転台成形、口縁端部ヨコナデ	
27-12	〃	〃		7.0 (1.3) — (5.5)	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	口縁部ヨコナデ調整 全体的に摩耗が著しく不明	
27-13	〃	〃		6.7 1.0 — 5.0	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	口縁端部ヨコナデ、全体的に摩耗が著しく不明	
27-14	〃	〃		— (0.9) — (6.0)	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
27-15	〃	〃		7.1 1.6 — 5.4	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	口縁部ヨコナデ、全体的に摩耗が著しく不明	
27-16	〃	土師器 (杯)		— (2.9) — 7.0	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる	回転台成形、全体的に摩耗している	
27-17	〃	〃		— 2.9 — 6.8	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる	回転台成形、外面底部糸切り	

表12 B区 礫状遺構遺物観察表 (1)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
27-18	IV層	土師器 (杯)		— (3.8) — 5.9	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる	体部、内外面回転台成形	
27-19	〃	〃		13.0 (3.5) — —	体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面回転台成形、口縁端部ヨコナデ調整	
27-20	〃	〃		— (3.45) — 5.6	やや貼付高台から体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、体部内外面口クロ痕残る	
27-21	〃	〃		— (4.1) — 6.4	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部外面口クロ痕残る、全体的に摩耗が著しく不明	
27-22	〃	〃		12.0 (2.7) — —	直線的に立ち上がり、口縁端部でやや外反する	体部外面口クロ痕が残る	
27-23	〃	〃		10.0 (2.8) — —	直線的に立ち上がり口縁部に至る	回転台成形、全体的に摩耗が著しく不明	
27-24	〃	〃		— (1.3) — 5.5	平坦な底部から直線的に立ち上がる	体部外面口クロ痕が残る、全体的に摩耗が著しく不明	
27-25	〃	〃		— (1.7) — 5.4	平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、内外面口クロ痕残る	
27-26	〃	瓦器(椀)		13.0 (2.9) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	体部内外面指頭圧痕口縁内外面ヨコナデ調整	
27-27	〃	〃		12.9 3.2 — 3.8	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
27-28	〃	〃		13.0 (2.3) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
27-29	〃	〃		12.8 (3.4) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、口縁端部はやや外反する	体部内外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
27-30	〃	〃		12.8 3.0 — 3.7	薄い紐状の貼付高台から内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る、端部は丸くおさめる	体部内外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
27-31	〃	土師器 (甕)		— — — —	「く」の字状に屈曲して外反する	胎土に雲母が混入	古代(搬入品)

表13 B区 礫状遺構遺物観察表(2)

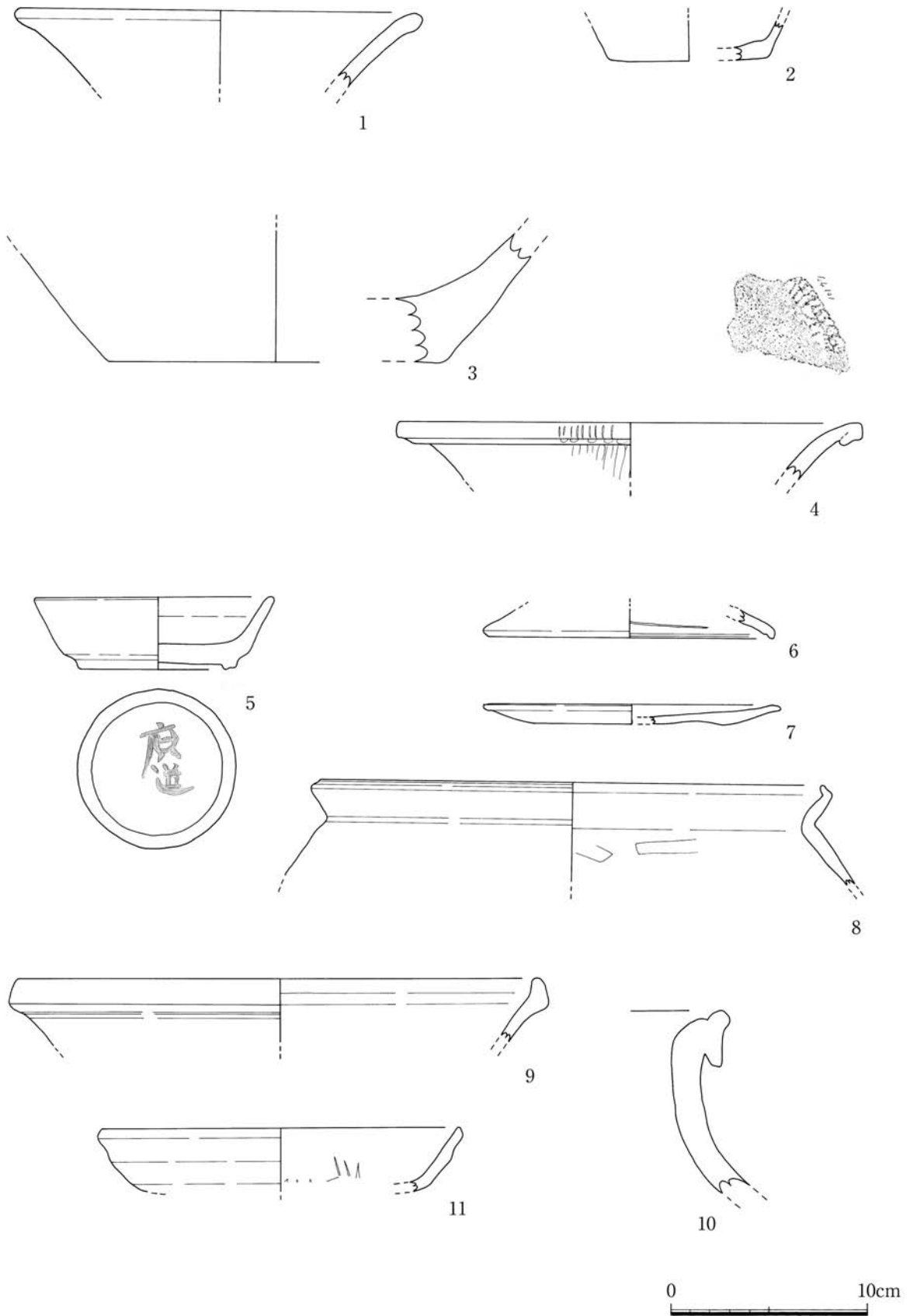


Fig. 28 B区 遺構外出土遺物実測図 (1~11)

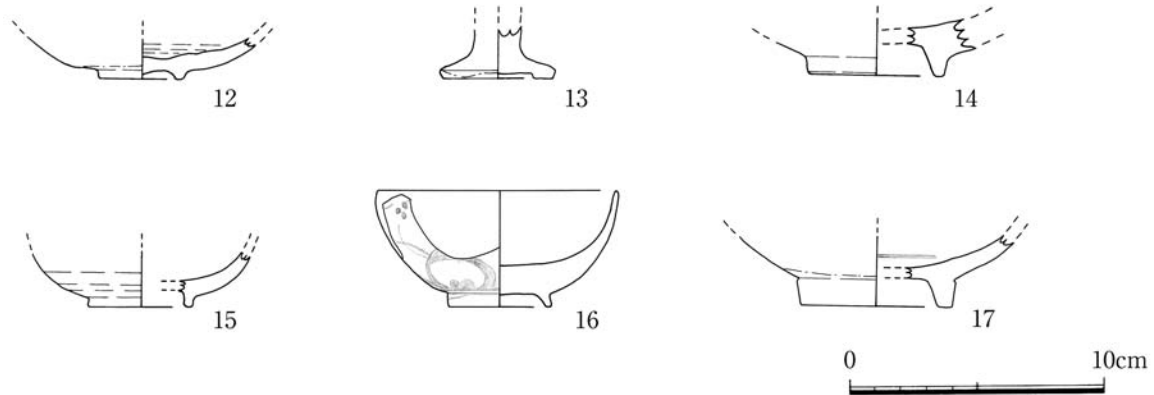


Fig. 29 遺構外出土遺物実測図 (12~17)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
28-1	Ⅲ層	弥生 (甕)		20.0 (3.8) — —	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反せる	全体的にに摩耗が著しく不明	
28-2	〃	弥生(中期) (壺)		— (2.1) — 8.1	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がる	全端的に摩耗して不明	神西式
28-3	〃	弥生(中期) (壺)		— (6.2) — 16.0	器壁の厚い底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
28-4	〃	弥生(中期) (壺)		23.2 (2.9) — —	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する	貼付口縁、刷毛目調整、口縁外面指頭圧痕	
28-5	〃	須恵器 (碗)		12.0 3.7 — 7.8	貼付高台で、内湾気味に外上方に立ち上がる底部外面墨書(2文字)	回転ナデ調整、マキアゲ、ミズビキ形成、底部ヘラ切り	在地産 (8中～9前) 墨書土器(口道)
28-6	〃	須恵器 (杯蓋)		— (1.4) — 14.4	天井部にやや丸味を持つ、内反して緩に向かう、	マキアゲ、ミズビキ成形、回転ナデ調整	
28-7	〃	須恵器 (皿)		15.0 1.0 — —	平坦な底部から体部は短く、直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る、端部は丸くおさめる	回転ナデ調整、全体的に摩耗が著しく不明	古代
28-8	〃	土師器 (甕)		25.4 (4.9) — —	頸部の下部がふくれる口縁部は「く」の字状に外反する	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面に二条の沈線が入る	〃
28-9	〃	東播系須恵器 (捏鉢)		25.8 (3.5) — —	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚し口縁端部は内反する	回転ナデ調整、口縁外面自然釉がかかる	
28-10	〃	常滑焼 (甕)		— — — —	「N」字状口縁を呈する	内面は刷毛目調整	
28-11	〃	瀬戸、美濃系 (おろし皿)		18.0 (3.2) — —	内湾して外上方まで立ち上がる	口縁部は内外面まで施釉される	陶磁器
29-12	Ⅱ層	肥前産 (皿)		— (1.7) — 3.3	高台の底部から、体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる、体部は内外面施釉、畳付け底部外面露胎	内面ロクロ痕残る	17世紀頃
29-13	Ⅲ層	肥前系 (仏飯器)		— (2.1) — 4.25	蛇の目状の接地目を持つ、脚部の底面が円形	胎土はやや灰色	磁器 17世紀後半
29-14	〃	肥前系 (碗)		— (2.3) — 5.2	輪高台から体部は内湾ぎみに立ち上がる	全面施釉される	
29-15	〃	〃		— (2.3) — 4.1	底部は輪高台で、体部は内湾気味に立ち上がる	体部は内外面施釉、外面底部は露胎	磁器 18世紀後半
29-16	〃	波佐見産 (染付け碗)		4.5 4.6 — 4.0	高台の底部から、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	内外面施釉、畳付け露胎	雪輪草花文
29-17	〃	在地産 (皿)		— (3.0) — 5.0	蛇の目高台の底部から体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる	見込みは蛇の目状釉剥ぎ、外面底部露胎	能茶山 19C～

表14 B区 遺構外遺物観察表(弥生～近世)

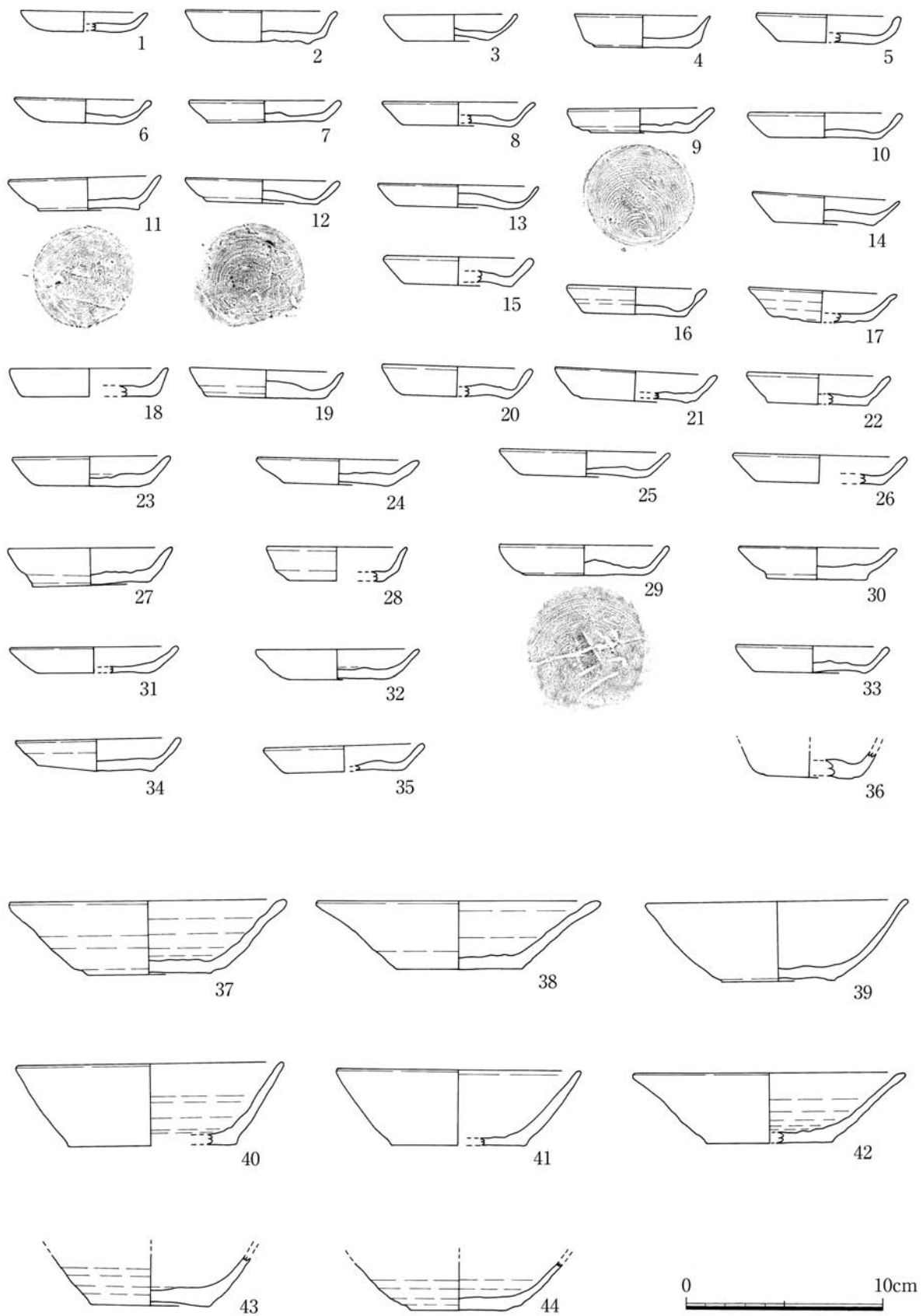


Fig. 30 B区 遺構外出土遺物実測図 (1~44)

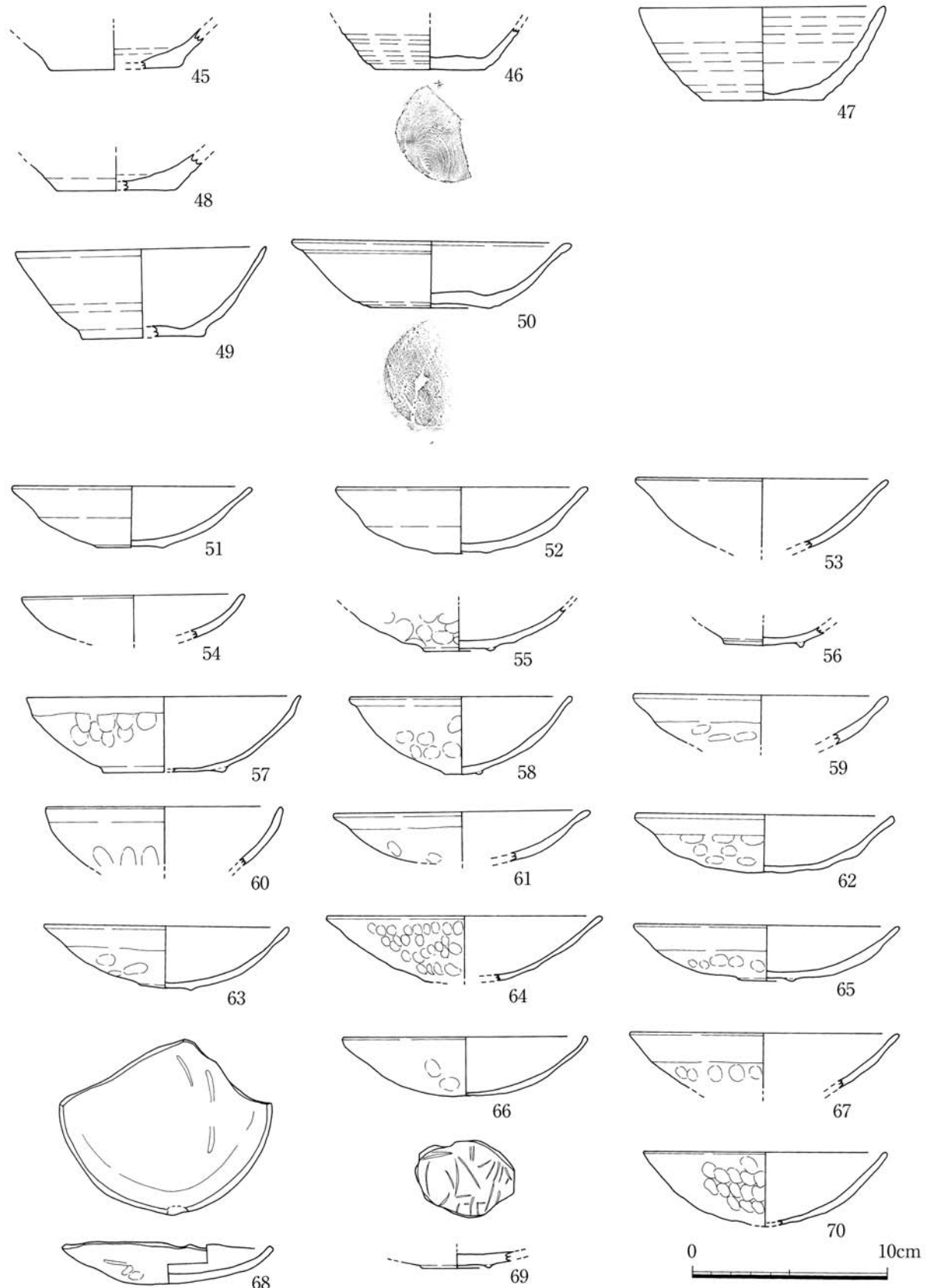


Fig. 31 B区 遺構外出土遺物実測図 (45~70)

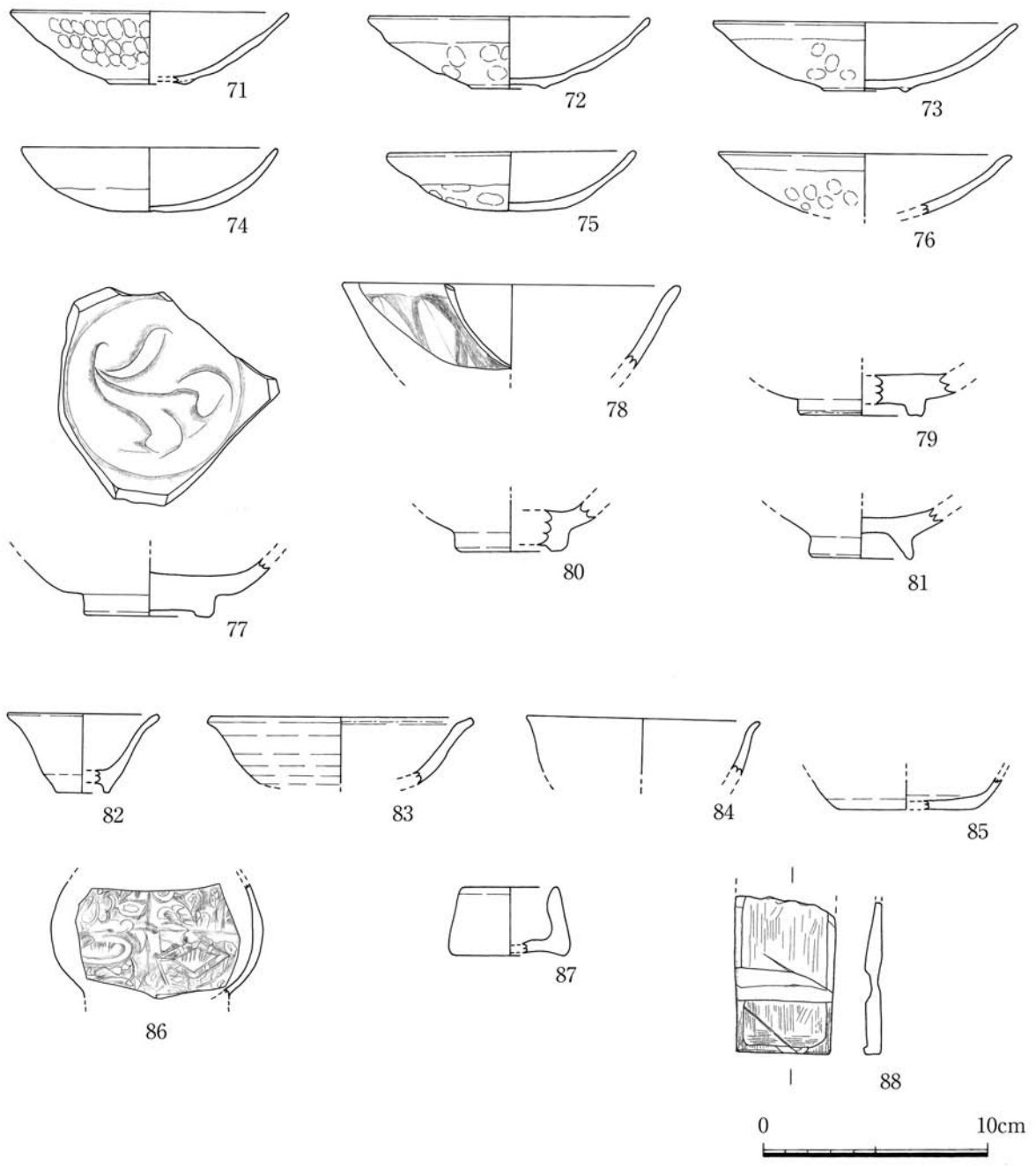


Fig. 32 B区 遺構外出土遺物実測図 (71~88)



挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
30-1	Ⅲ層	土師器 (小皿)		6.4 (1.4) — 5.0	平坦な底部から、体部は短く直線的に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
30-2	〃	〃		7.6 1.6 — 5.0	平坦な底部から、体部は短く口縁部に至り端部でやや外反する	底部糸切り、内面口クロ痕残る	
30-3	〃	〃		6.4 1.3 — 4.0	やや上げ底から体部は短く直線的に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、口縁内外面ヨコナデ	
30-4	〃	〃		6.8 1.65 — 4.8	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる	回転台成形、外部口縁ヨコナデ、底部平行圧痕2本残る	
30-5	〃	〃		7.2 1.4 — 5.0	平坦な底部から、体部は直線的に短く立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
30-6	〃	〃		6.8 1.2 — 4.0	平坦な底部から、体部は短く直線的に立ち上がり口縁部に至る	底部外面糸切り、他は摩耗が著しい	
30-7	〃	〃		7.5 1.1 — 5.9	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	回転糸切り、内外面ヨコナデ、	
30-8	〃	〃		7.7 1.2 — 5.6	やや上げ底の底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる	底部糸切り、回転台成形	
30-9	〃	〃		7.1 1.2 — 5.1	高台状の底部、体部は内湾気味に立ち上がる	回転糸切り、口クロ形成、外部口縁ヨコナデ、	
30-10	〃	〃		7.6 1.3 — 5.6	平坦な底部から、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる	回転台成形、内外面口縁ヨコナデ	
30-11	〃	〃		7.0 1.6 — 5.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端は丸くおさめる	底部糸切り、内外面口クロ目、平行圧痕の跡が残る	
30-12	〃	〃		7.7 1.15 — 5.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部は丸くおさめる	回転台成形、外面底部は回転糸切り痕が残る	
30-13	〃	〃		7.9 1.1 — 6.2	やや上げ気味の底部から、体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る	回転台成形、底部糸切り	
30-14	〃	〃		7.4 1.35 — 5.0	平坦な底部から、体部は短く、直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面口クロ痕が残る	
30-15	〃	〃		7.2 1.4 — 5.4	やや上げ底から直線的に立ち上がり体部は短く口縁部に至る	底部糸切り、口縁端部ヨコナデ	
30-16	〃	〃		7.2 1.4 — 6.1	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	外部回転台成形、口縁内外面ヨコナデ調整	
30-17	〃	〃		7.5 1.55 — 4.9	平坦な底部から、体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部でやや外反する	口縁端部ヨコナデ調整、外面回転台成形	

表15 B区 遺構外遺物観察表 (1)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
30-18	Ⅲ層	土師器 (小皿)		8.0 1.4 — 6.6	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る	外面底部糸切り	
30-19	〃	〃		7.8 1.4 — 6.2	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部外面糸切り、体部外面回転台成形	
30-20	〃	〃		7.5 1.5 — 5.2	やや上げ底から体部は直線的に立ち上がり口縁端部でやや外反する	口縁端部ヨコナデ調整	
30-21	〃	〃		7.9 1.5 — 5.2	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	回転台成形、口縁端部ヨコナデ	
30-22	〃	〃		7.2 1.5 — 5.0	平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸みを帯びる	口縁端部はヨコナデ調整	
30-23	〃	〃		8.0 1.5 — 5.5	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	底部糸切り、内面口クロ痕残る	
30-24	〃	〃		8.2 1.3 — 5.3	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	全体的に摩耗が著しく不明	
30-25	〃	〃		8.5 1.3 — 5.7	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	口縁端部ヨコナデ調整	
30-26	〃	〃		8.6 1.4 — 6.4	やや上げ底の底部から体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る	回転台成形	
30-27	〃	〃		8.1 1.9 — 5.9	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	内外面ヨコナデ	
30-28	〃	〃		7.1 1.7 — 4.8	平坦な底部から体部は短くやや内湾気味に立ち上がり口縁端部でやや外反する	口縁ヨコナデ調整	
30-29	〃	〃		8.4 1.5 — 6.2	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、回転台成形、内外面口縁ヨコナデ	
30-30	〃	〃		7.8 1.6 — 5.0	器壁の厚い底部から内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる	全体的に摩耗が著しく不明	
30-31	〃	〃		8.45 1.3 — 5.8	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	外面底部糸切り、口縁内外面ヨコナデ調整	
30-32	〃	〃		8.25 1.5 — 4.9	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	内面回転台成形、口縁内外面ヨコナデ調整	
30-33	〃	〃		7.6 1.3 — 5.6	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	底部糸切り、口縁端部内外面ヨコナデ調整	
30-34	〃	〃		8.3 1.6 — 5.8	平坦な底部から体部は短く直線的に立ち上がり口縁端部に至る	底部糸切り、回転台成形、体部内面口クロ痕残る	
30-35				8.0 1.3 — 6.0	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	回転台成形、底部糸切り、内外面口縁端部ヨコナデ調整	

表16 B区 遺構外遺物観察表 (2)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
30-36	Ⅲ層	在地産 (皿)		(6.5) (1.5) - 4.3	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	全体的に摩耗が著しく不明	
30-37	〃	土師器 (杯)		13.6 3.7 - 6.2	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部で外反する	底部糸切り、内外面口縁ヨコナデ調整、内外面ロクロ痕残る	
31-38	〃	〃		14.2 3.5 - 6.4	平坦に近い底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	内外面ロクロ痕が残る	
31-39	〃	〃		13.3 4.0 - 5.6	平坦な底部から直線的に立ち上がり口縁部はやや外反する	口縁内外面ヨコナデ調整	
30-40	〃	〃		13.4 4.1 - 8.4	平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面ロクロ痕が残る	
30-41	〃	〃		12.2 3.8 6.8 -	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、回転台成形、内外口縁端部ヨコナデ調整	
30-42	〃	〃		13.6 3.6 - 6.4	平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部でやや外反する	口縁端部ヨコナデ、内面ロクロ痕が残る	
30-43	〃	〃		- (2.6) - 6.0	平坦な底部からやや直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面ロクロ痕が残る、底部摩耗が著しく不明	
30-44	〃	〃		- (2.5) - 4.8	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	体部内外面回転台成形	
31-45	〃	〃		- (2.0) - 6.8	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる	内面回転台成形、外面摩耗が著しい	
31-46	〃	〃		- (2.2) - 5.6	平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内外面ロクロ痕が残る	
31-47	〃	〃		12.4 4.7 - 6.1	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、内外面ロクロ痕残る	
31-48	〃	〃		- (1.9) - 6.0	平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がる	内外面回転台成形	
31-49	〃	〃		12.8 4.5 - 6.2	円盤状高台を有し、直線的に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面回転台成形、口縁内外面ヨコナデ調整	
31-50	〃	〃		14.0 3.4 - 6.0	円盤状高台を有し、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部はやや外反する	底部回転糸切り、口縁部内外面ヨコナデ調整、口縁部に1本の沈線	
31-51	〃	瓦器(椀)		12.0 3.1 - 3.4	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する、外面口縁部分に炭素吸着	体部内外面口縁ヨコナデ調整	胎土に砂粒を含む
31-52	〃	〃		12.6 3.4 - 2.8	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る内外面炭素吸着	〃	〃
31-53	〃	〃		12.8 (3.5) - -	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至り端部は丸くおさめる	〃	〃

表17 B区 遺構外遺物観察表 (3)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
31-54	Ⅲ層	土師器 (小皿)		11.3 (2.2) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面口縁ヨコナデ調整、平行圧痕が残る	
31-55	〃	〃		— (2.3) — 3.1	薄い紐状の貼付高台から内湾気味に立ち上がる	体部内外面指頭圧痕	
31-56	〃	〃		— (1.1) — 3.9	薄い紐状の貼付高台	全体的に摩耗が著しく不明	
31-57	〃	〃		14.0 3.85 — 6.2	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はヨコナデで若干外反する	体部外面指頭圧痕の跡が残る	
31-58	〃	〃		11.3 3.9 — 1.9	紐状の貼付高台から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	体部外面指頭圧痕が残る、口縁部ヨコナデ調整	
31-59	〃	〃		13.0 (2.4) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	体部外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
31-60	〃	〃		12.0 3.0 — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	体部外面指頭圧痕、口縁外面ヨコナデ調整	
31-61	〃	〃		13.0 (2.5) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	〃	
31-62	〃	〃		13.0 2.9 — —	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る	〃	
31-63	〃	瓦器(皿)		6.4 1.2 — 2.5	紐状の貼付高台から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	体部外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
31-64	〃	瓦器(椀)		14.0 (3.3) — —	体部はゆるやかに内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部外面指頭圧痕、口縁外面ヨコナデ調整	
31-65	〃	〃		13.4 2.8 — 2.8	紐状の貼付高台から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	〃	
31-66	〃	〃		12.4 (4.0) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる	体部外面指頭圧痕、口縁部内外面ヨコナデ調整	
31-67	〃	〃		13.6 (2.8) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	〃	
31-68	〃	瓦器(皿)		10.5 2.1 — —	平坦な底部から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る	〃	
31-69	〃	瓦器(椀)		— (0.8) — 3.4	薄い紐状の貼付高台	内面ヘラ磨き	細砂粒を含む
31-70	〃	〃		12.4 (3.7) — —	薄い紐状の貼付高台から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	体部外面指頭圧痕が残る、口縁外面ヨコナデ調整	
32-71	〃	〃		12.4 3.2 — 3.4	薄い紐状の貼付高台から直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至り丸みを帯びる	体部外面指頭圧痕、口縁外面ヨコナデ調整	

表18 B区 遺構外遺物観察表 (4)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
32-72	Ⅲ層	瓦器(碗)		12.5 3.2 — 3.1	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	全体に磨耗が著しく体部外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整、口縁外面強いナデのため段状になる	
32-73	〃	〃		13.6 3.0 — 3.6	薄い紐状の貼付高台から体部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる	体部外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
32-74	〃	〃		11.3 2.8 — —	平坦な底部から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	口縁内外面ヨコナデの跡が残る	
32-75	〃	〃		10.9 2.6 — —	平坦な底部から体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	体部外面指頭圧痕、口縁内外面ヨコナデ調整	
32-76	〃	〃		13.0 (2.6) — —	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、端部は丸くおさめる	〃	
32-77	〃	青磁(碗)		— (2.7) — 5.5	底部は輪高台から内湾気味に立ち上がる、見込みには印花文がスタンプされる	底部外面露胎(それ以外は施釉)	龍泉窯
32-78	〃	〃		15.0 (3.8) — —	口縁部はやや外反する体部外面に鎬蓮弁文が施される	体部内外面施釉	〃
32-79	〃	〃		— (2.0) — 5.3	器壁の厚い高台から、体部は内湾気味に立ち上がる	高台外面まで施釉され、外底畳み付けは露胎	〃
32-80	〃	〃		— (2.3) — 4.4	器壁の厚い高台	体部内外面施釉、外底は露胎	龍泉窯
32-81	〃	〃		— (2.3) — 4.4	体部内外面施釉、高台状の底部	畳み付け露胎、底部施釉	〃
32-82	〃	白磁 (さかざき)		6.6 3.5 — 2.3	高台な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する	全面施釉、体部内外面ロクロ痕が残る	〃
32-83	〃	白磁(碗)		11.5 (3.0) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部はやや外反する	体部外面ロクロ痕が残る、口縁端部は口禿である、体部内外面施釉	〃
32-84	〃	白磁(小碗)		10.2 (2.4) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり端部は外反する	体部内外面施釉	〃
32-85	〃	白磁(皿)		— (1.5) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	内面施釉、外底露胎外底わずかにロクロ痕が残る	〃
32-86	〃	白磁		— (5.2) — —	体部外面文様(菱形、花文様)、内面文様なし	体部施釉	中国産
32-87	〃	土師器		4.0 3.05 — 5.2	平坦な底部から内傾的に立ち上がり、口縁端部で外反する	口縁端部内外面ヨコナデ調整	用途不明
32-88	〃	硯	全長 全幅 全厚 重量	(7.0) 4.5 0.7 207g		全面に研磨時に生じた擦痕が残る、表面には使用痕と考えられる擦痕が残る	粘板岩

表19 B区 遺構外遺物観察表(5)

### 第3節 C区

#### 調査区の概要と層序

##### 調査区の概要

C区の調査区は、B区の西側に位置し、現在水田面である。調査の結果、遺構は土杭8基（SK2～SK9）、溝状遺構1条、集石遺構2基（SX5、SX6）石垣2基を確認する。異物は土師器を中心に貿易陶磁（青磁）、瓦器を確認する。

##### 層序

南壁セクションを観察する。I層は表土（黄灰）、II層は暗灰黄褐（遺物を含む）、III層は暗灰黄（遺物を含む）、IV層はオリーブ黄（小礫を含む）である。

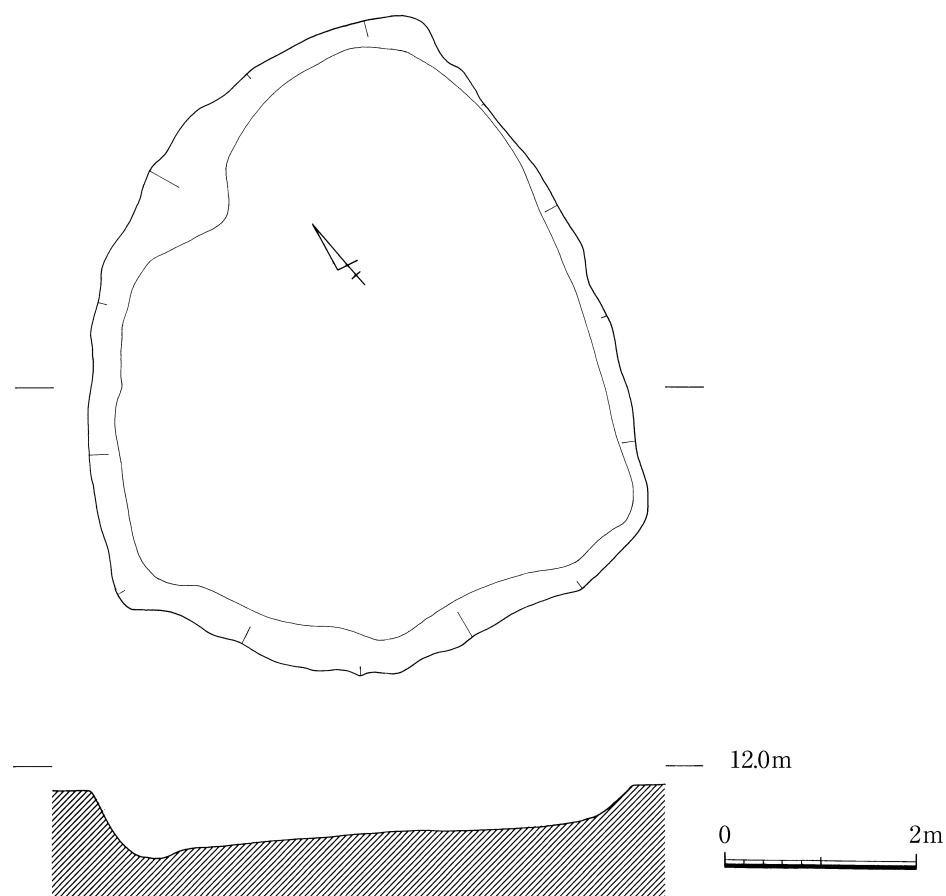


Fig. 33 C区 SK2 遺構平面及びエレベーション図

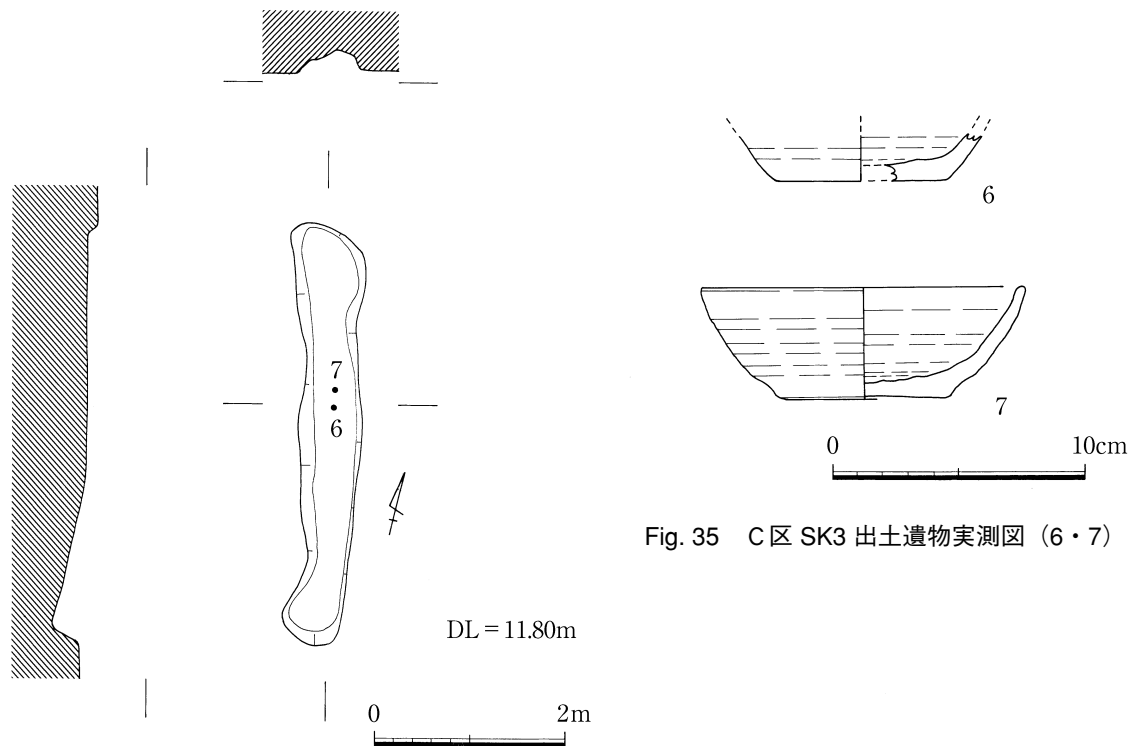


Fig. 35 C区 SK3 出土遺物実測図(6・7)

Fig. 34 C区 SK3 遺構平面及びエレベーション図

S K 2 (Fig. 33)

S K 2は調査区のほぼ中央部分で検出した。長辺7.2m、短辺5.6m、深さ40~80cmを測り楕円形を呈した土坑であり、埋土は褐色粘質土を主とし淡黄色が少量で礫を含む。遺物は土師器の細片を数点確認し復元できる遺物はなかった。淡黄色層に自然礫が含まれていた。

S K 3 (Fig. 34・35)

S K 3は、S K 2の北西の位置で検出した不整長方形の土坑で、長辺4.4m、短辺75cm、深さ20~40cmを測り、埋土は褐色粘質土である。遺物は土坑の中心部で復元できる遺物を確認する。(6)は土師器小皿で底部糸切り、内面にロクロ痕が残る。(7)は土師器の杯で底部糸切り、ロクロ痕が残る。他にも遺物が出土するが実測不能の土師器の細片であった。

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
35-6	SK 3	土師器 (小皿)		- (1.9) - 6.6	平坦な底部から体部は張区千滴に立ち上がり外上方に立ち上がる	底部糸切り、内底ロクロ痕が残る	
35-7	〃	土師器 (杯)		12.7 4.4 - 6.8	平底から屈曲し体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、ロクロ痕残る	

表20 C区 SK3 遺物観察表

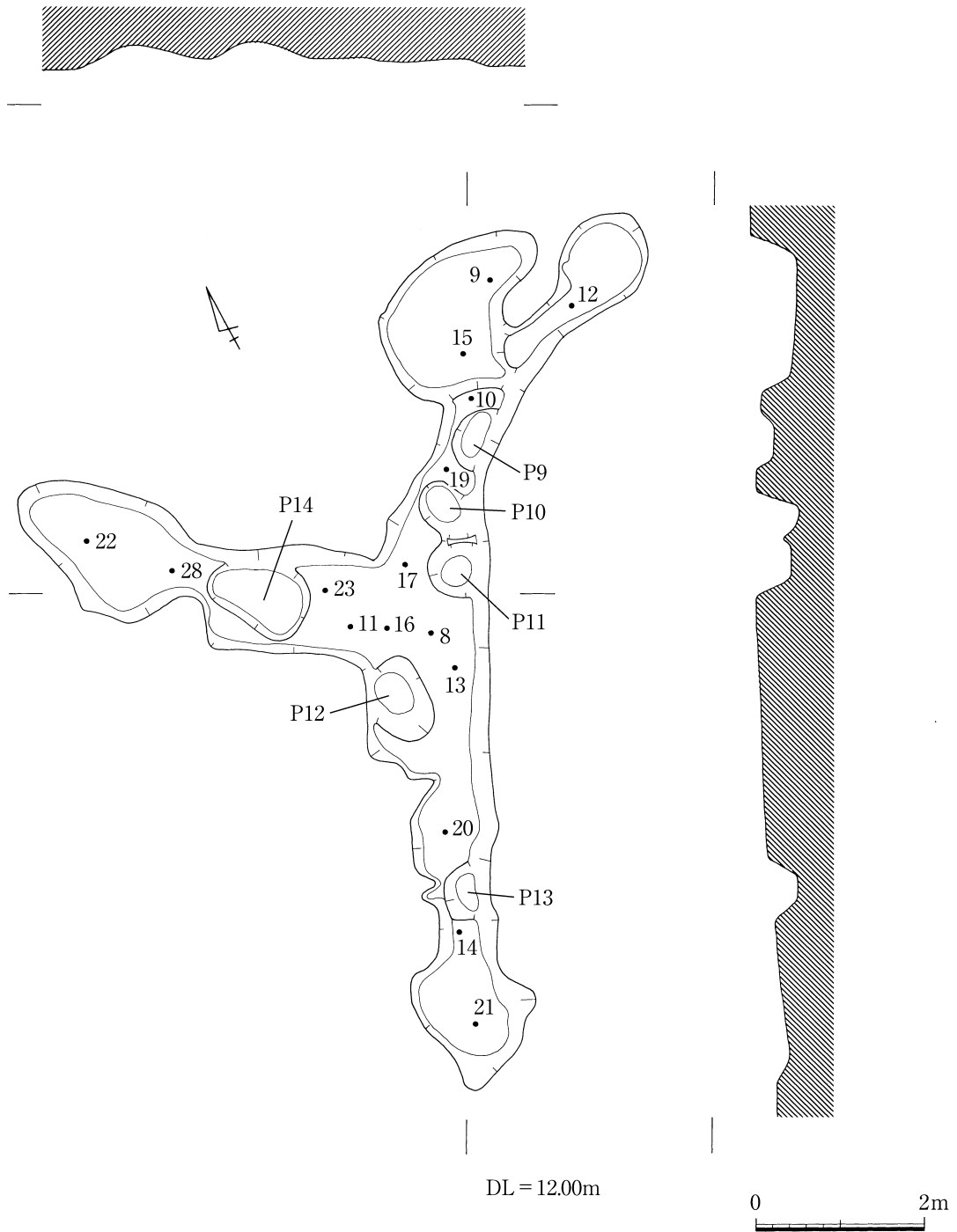


Fig. 36 C区 SK4 遺構平面及びエレベーション図



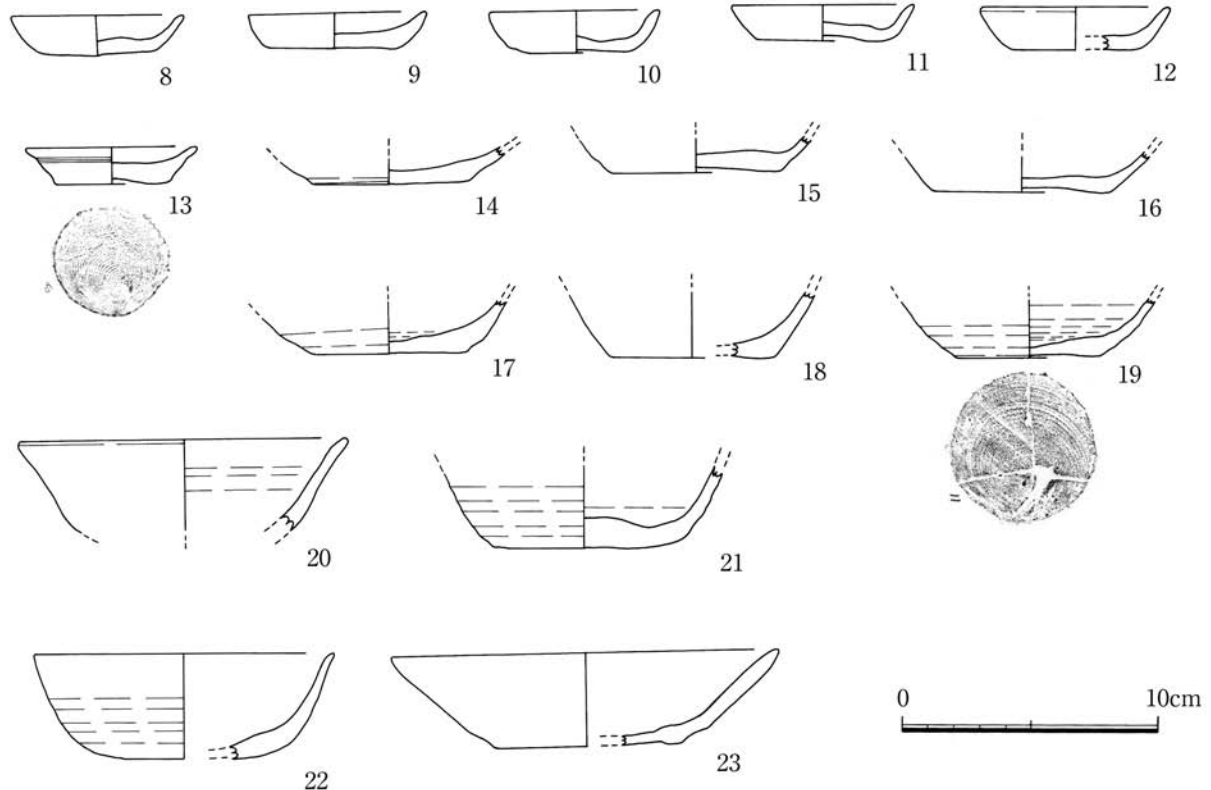


Fig. 37 C区 SK4 遺構出土遺物実測図 (8~23)

S K 4 (Fig. 36・37)

S K 4 は、S K 3 の北西の位置で検出した不整形土坑で柱穴、集石を伴うものである。長辺12m、短辺5.5m、深さ4~80cmを測り、埋土は灰褐色粘質土を主に黒褐色粘質土を少量含む。遺物の出土地点、(8)は土師器の小皿で底部糸切り、口縁ヨコナデ調整。(9)も土師器の小皿で底部糸切り、回転台成形、口縁ヨコナデ調整、口縁端部は丸い。(10)も土師器の小皿で底部糸切り、口縁内外面ヨコナデ。(11)も土師器の小皿で底部糸切り、内面底部回転台成形、口縁部ヨコナデ調整。(12)も土師器の小皿で口縁ヨコナデであるが他は摩耗が著しい。(13)も土師器の小皿でやや上げ気味の底部、底部糸切り、体部外面ヘラ切り。(14)は土師器の杯で底部糸切り、内面底部ロクロ痕が残る。(15)も土師器の杯で底部糸切り、やや上げ底の底部。(16)も土師器の杯で底部糸切り、内面底部回転台成形。(17)も土師器の杯で底部糸切り、体部ロクロ痕が残る。(18)も土師器の杯で平坦な底部、全体的に摩耗が著しい。(19)は土師器の小皿で底部糸切り、内外面ロクロ痕が残る。(20)は土師器の杯で内面ロクロ痕が残る。(21)も土師器の杯でやや上げ底の底部、底部は糸切り。(22)も土師器の杯で底部糸切り、体部外面ロクロ痕が残る。(23)も土師器の杯で体部外面ロクロ痕が残る。以上復元できた。他にも土師器の細片が多数出土したが復元できるものはなかった。土坑に柱穴を確認、P 9は径58cm、深さ20cm、埋土は黒褐色粘質土である、楕円形で遺物なし。P 10は径48cm、深さ24cm、埋土は黒褐色粘質土である、円形で遺物なし。P 11は径48cm、深さ44cm、埋土は黒褐色粘質土である、円形で遺物は土師器の小皿。P 12は径68cm、深さ40cm、埋土は黒褐色粘質土である、楕円形で遺物は土師器の小皿(2コ) P 13は径32cm、深さ16cm、楕円形で遺物は土師器の小皿埋土は黒褐色粘質土である、P 14は径88cm、深さ36cm、楕円形で土師器の小皿が2点出土する、埋土は黒褐色粘質土である。

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
37-8	SK 4	土師器 (小皿)		6.7 1.6 — 4.5	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、口縁ヨコナデ調整	
37-9	〃	〃		7.0 1.4 — 5.2	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる、口縁端部は丸くおさめる	外面底部糸切り、内面底部回転台成形、口縁部ヨコナデ調整	
37-10	〃	〃		6.7 1.7 — 4.9	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、口縁内外面ヨコナデ調整	
37-11	〃	〃		7.2 1.4 — 5.5	やや上げ底の底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、内面底部回転台成形、口縁部ヨコナデ調整	
37-12	〃	〃		7.4 1.65 — 5.4	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る	口縁部ヨコナデ調整 底部は摩耗が著しく不明	
37-13	〃	〃		6.75 1.4 — 4.65	やや上げ底気味の底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、体部外面ヘラ切り、口縁部ヨコナデ調整	
37-14	〃	土師器 (杯)		— (1.5) — 6.2	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底部ロクロ痕が残る	
37-15	〃	〃		— (1.45) — 6.4	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底部ロクロ痕が残る	
37-16	〃	〃		— (1.65) — 7.0	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底部回転台成形	
37-17	〃	〃		— (2.05) — 6.0	平坦な底部は屈折し体部は内湾気味に立ち上がる	底部糸切り、体部ロクロ痕が残る	
37-18	〃	〃		— (2.6) — 6.4	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
37-19	〃	土師器 (小皿)		— (2.35) — 5.6	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内外面ロクロ痕が残る	
37-20	〃	土師器 (杯)		12.8 (3.6) — —	体部は直線的に立ち上がり口縁近くで外反し口縁部に至る	体部内面ロクロ痕が残る	
37-21	〃	〃		— (3.3) — 7.1	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、体部ロクロ痕が残る	
37-22	〃	〃		11.8 4.1 — 6.8	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、体部外面ロクロ痕が残る	
37-23	〃	〃		15.2 3.65 — 7.6	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部外面、ロクロ痕が残る、底部摩耗が著しく不明	

表21 C区 SK4 遺物観察表

SK 5 (Fig. 38)

SK 5はSK 4の南側で検出した不整長方形を呈する土坑で長辺1.2m、短辺50cm、深さ40cmを測り、埋土は灰褐色粘質土で、遺物は(24)は土師器の杯で底部糸切り、(25)も土師器の杯で底部糸切り、内面底部回転台成形、(26)も土師器の杯で内面底部回転台成形。

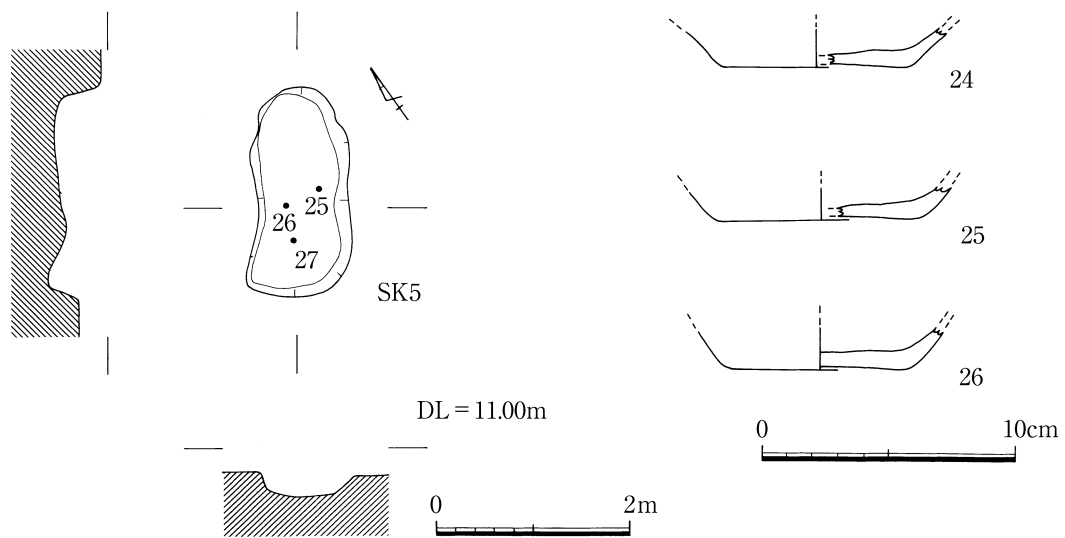


Fig. 38 C区 SK5 遺構平面及びエレベーション図      Fig. 39 C区 SK5 遺構出土遺物実測図 (24~26)

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
39-24	SK 5	土師器 (杯)	-	(1.55) - 7.4	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切り、体部は 摩耗が著しく不明	
39-25	〃	〃	-	(1.3) - 7.8	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底 部回転台成形	
39-26	〃	〃	-	(1.65) - 7.0	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	内面底部回転台成 形、外面底部摩耗が 著しく不明	

表22 C区 SK5 遺物観察表

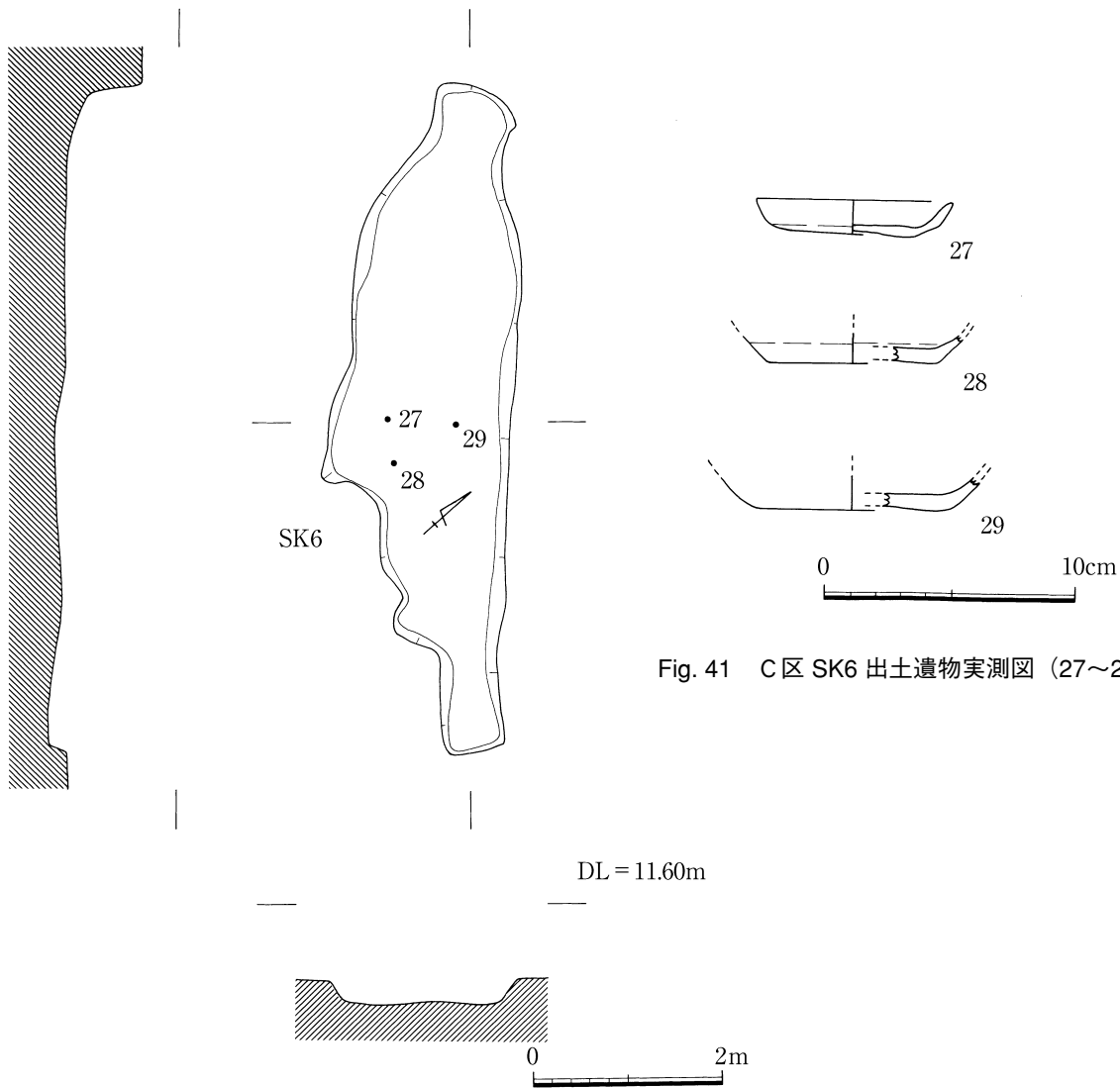


Fig. 41 C区 SK6 出土遺物実測図 (27~29)

S K 6 (Fig. 40)

S K 6 は S K 5 の南西側で検出した土坑で不整長方形を呈して礫を含む土坑で長辺3.6m、短辺95cm、深さ45cmを測り、埋土はオリーブ灰を主として灰色を少量含む、遺物は (27) は土師器の小皿でやや上げ底の底部、口縁部はヨコナデ調整、(28) も土師器の小皿で底部糸切り、(29) も土師器の小皿で平坦な底部、他にも実測不能の土師器の細片が数点出土する。

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
41-27	SK6	土師器 (小皿)		7.8 (1.35) - 4.7	やや上げ底の底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	口縁部ヨコナデ調整、底部は摩耗が著しく不明	
41-28	〃	〃		- (1.2) - 6.7	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、他は摩耗が著しく不明	
41-29	〃	〃		- (1.3) - 7.7	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	

表23 C区 SK6 遺物観察表

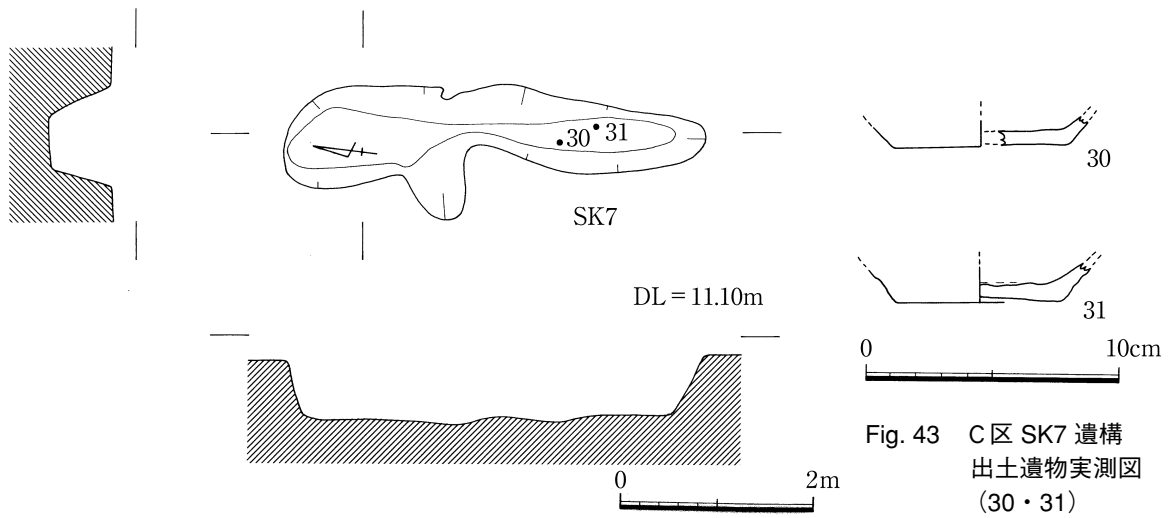


Fig. 42 C区 SK7 遺構平面及びエレベーション図

S K 7 (Fig. 42)

S K 7 は S K 6 の北西側で検出した不整長方形を呈する土坑で長辺4.4m、短辺1.4m、深さ80cmを測り、埋土はオリブ灰で、(30) は土師器の小皿で平坦な底部、(31) は土師器の杯で底部糸切り、底部に平行圧痕が認められる。

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
43-30	SK 7	土師器 (小皿)	-	(1.1) - 6.8	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく 不明	
43-31	〃	土師器 (杯)	-	(1.5) - 6.5	やや上げ底の底部から体部は直 線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、底部に 平行圧痕が認められ る、回転台成形	

表24 C区 SK7 遺物観察表

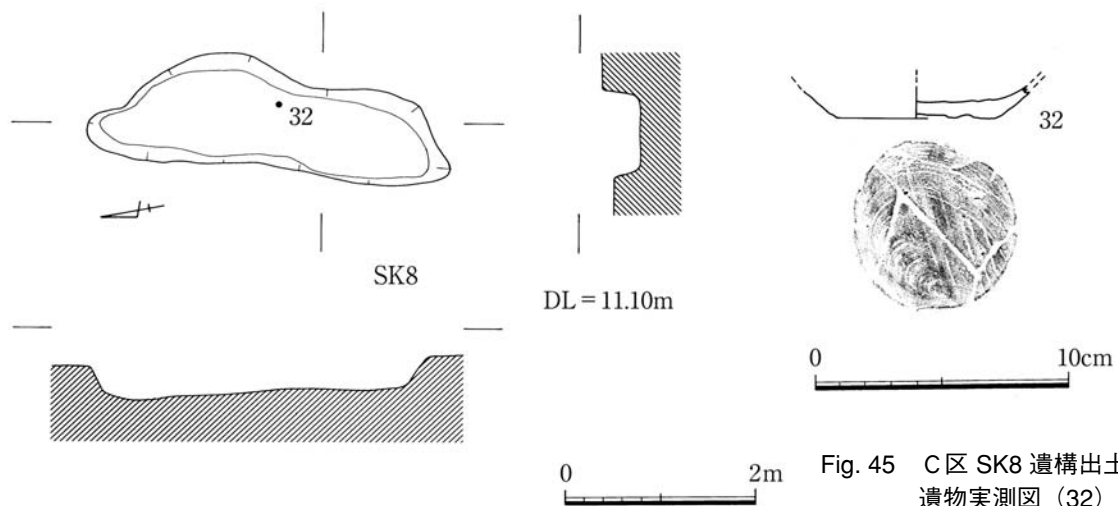


Fig. 44 C区 SK8 遺構平面及びエレベーション図

S K 8 (Fig. 44)

S K 8 は S K 7 の北側で検出した不整長方形を呈して中礫を含む土坑で、規模は長辺1.8m、短辺50cm、深さ40～50cmを測り、埋土はオリーブ灰を主としてオリーブ黄を少量含む、遺物は土師器の皿で、(32)は底部糸切り、回転台成形、底部平行圧痕の跡が認められる、実測不能の土師器の細片が出土。

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
45-32	SK 8	土師器 (皿)		- (1.4) -	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	回転台成形、外面底部 糸切り、底部平行 圧痕の跡が認められ る	

表25 C区 SK8 遺物観察表

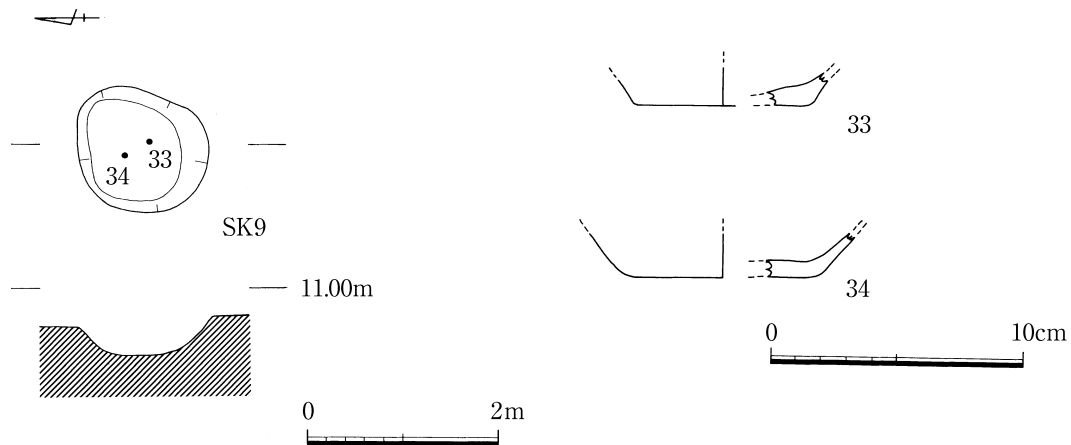


Fig. 46 C区 SK9 遺構平面及びエレベーション図 Fig. 47 C区 SK9 遺構出土遺物実測図 (33・34)

S K 9 (Fig. 46)

S K 9 は S K 8 の西側で検出した土坑で、円形を呈し中礫を含む遺構で、規模は径50cm、深さ45~55cmを測り、埋土はオリブ灰を主としてオリブ黄を少量含み、遺物は土師器の小皿2点が復元できた、(33)は底部糸切り、(34)は全体的に摩耗が著しく不明、他にも実測不能の土師器の細片が出土。

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
47-33	SK 9	土師器 (小皿)	-	(1.3) - 7.0	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切り、全体的 に摩耗が著しく不明	
47-34	〃	〃	-	(1.85) - 8.0	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著し く不明	

表26 C区 SK9 遺物観察表

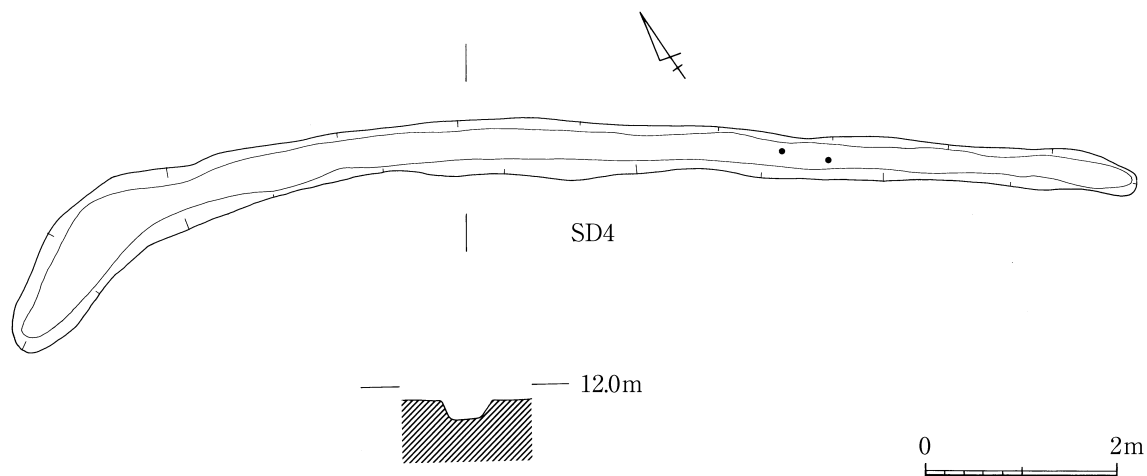


Fig. 48 C区 SD4 遺構平面及びエレベーション図

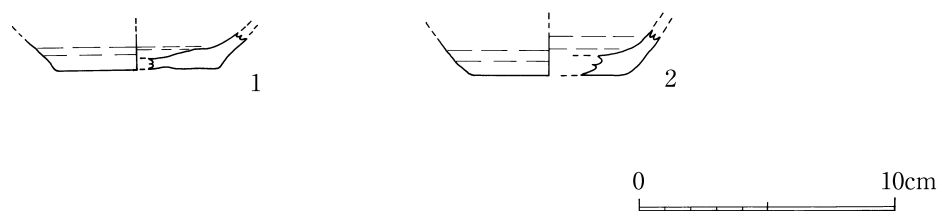


Fig. 49 C区 SD4 遺構出土遺物実測図 (1・2)

#### SD4 (Fig. 48)

SD4は、SK4の北側で検出した南北に細長い形を呈した溝で、幅40～50cm、深さ25cm、長さ約12mを測り、埋土は淡黄色を主とし浅黄を少量含み、遺物は復元できた土師器の小皿2点を溝の中心部よりやや南側で確認し、他にも実測不能の土師器の細片が数点出土する。

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
49-33	SD4	土師器 (小皿)		— (1.5) — 6.2	平坦な底部から屈曲し、体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切りの跡平行圧痕が残る	
49-34	〃	〃		— (1.9) — 6.0	器壁の厚い底部は屈曲し、体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、体部口クロ痕が残る	

表27 C区SD4 遺物観察表



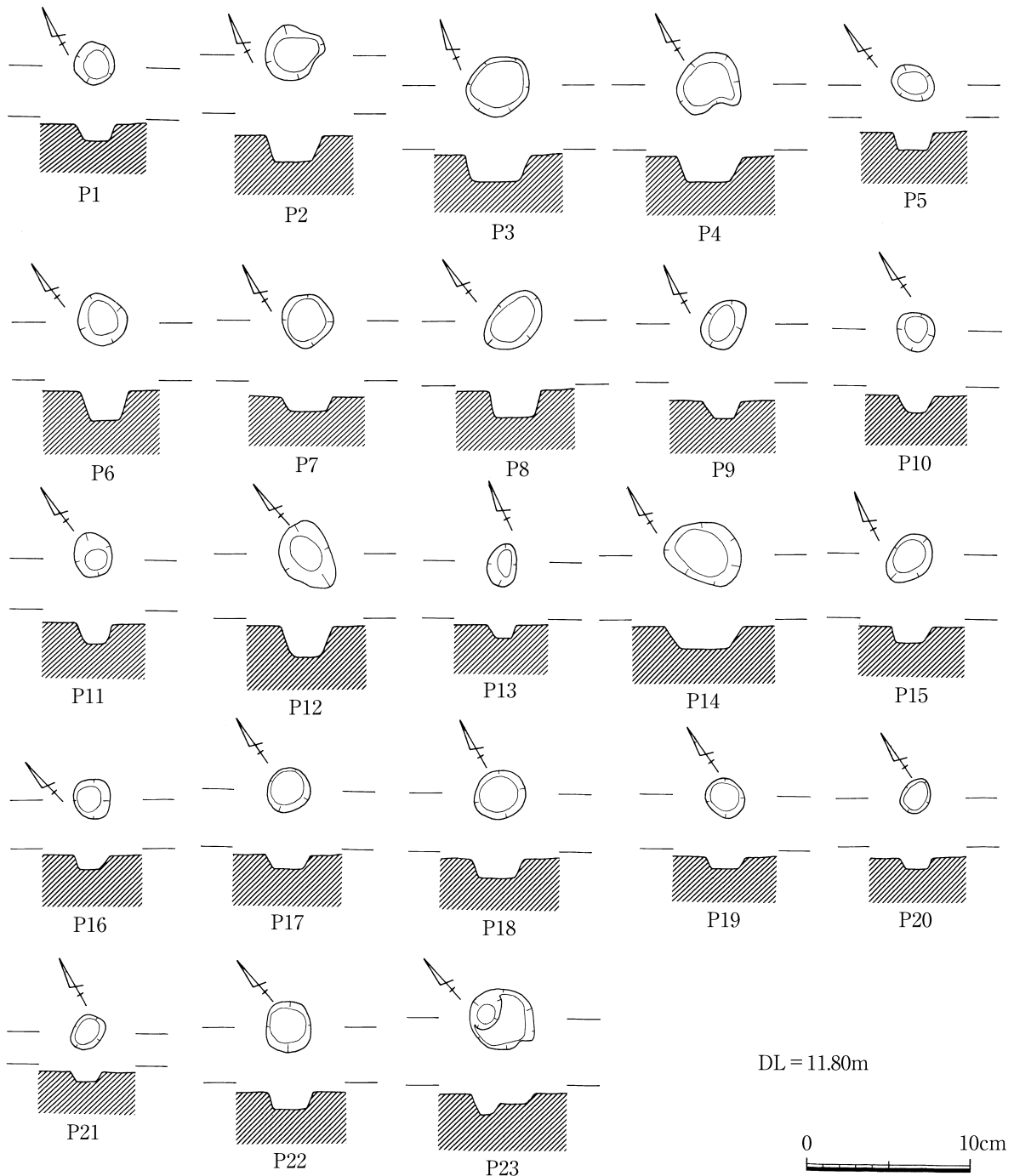


Fig. 50 C区遺構（ピット）平面及びエレベーション図

C区、遺構（柱穴）(Fig. 50)

P 1はP 2の東側で検出した柱穴で規模は、径52cm、深さ20cm、円形で埋土はにぶい褐色粘質土で、遺物は土師器の小皿1点が復元できた、他にも土師器の細片が出土。P 2はP 1の西側で検出した柱穴で規模は径78cm、深さ32cm、楕円形で埋土はにぶい褐色粘質土で遺物は土師器の小皿、杯2点が復元でき、他にも実測不能の土師器、瓦器の細片が出土する。P 3はS K 3の北西で検出した柱穴で規模は、径80cm深さ36cm、円形で埋土はにぶい褐色粘質土、遺物は土師器の杯1点が

復元できた、他にも実測不能の土師器、青磁の細片が出土する。P 4はP 3の南東で検出した柱穴で規模は径80cm、深さ40cm、楕円形で埋土はにぶい褐色粘質土を主とし、オリーブ黄粘質土を少量含み、遺物は土師器の杯2点が復元でき、実測不能の土師器、瓦器の細片が出土する。P 5はP 4の南側で検出した柱穴で規模は径50cm、深さ36cm、楕円形で埋土はにぶい褐色粘質土で遺物は土師器の小皿1点が復元できた。P 6はP 5の西側で検出した柱穴で規模は径60cm、深さ40cm、円形で埋土は灰褐色粘質土で遺物は復元できるものはなかったが、土師器の細片が出土する。P 7はP 6の南側で検出した柱穴で、規模は径60cm、深さ20cm、円形で埋土は灰褐色粘質土で遺物は土師器の小皿1点が復元できた。P 8はP 7の南側で検出した柱穴で規模は径68cm、深さ32cm、楕円形で埋土は灰褐色粘質土で遺物は土師器の小皿、杯2点が復元できた。P 9はS K 4の中で検出した柱穴で規模は径52cm、深さ20cm、楕円形で埋土は褐灰粘質土で復元できる遺物はなかった、実測不能の土師器の細片が出土する。P 10もS K 4の中のP 9の西側で検出した柱穴で規模は径48cm、深さ24cm、円形で埋土は褐灰粘質土で復元できる遺物はなかった、実測不能の土師器の細片が出土する。P 11もS K 4の中のP 10の西側で検出した柱穴で規模は径48cm、深さ44cm、円形で埋土は褐灰粘質土で、遺物は土師器の小皿1点が復元できた。P 12もS K 4の中のP 11の西側で検出した柱穴で規模は径68cm、深さ40cm、楕円形で埋土は褐灰粘質土で遺物は土師器の小皿2点が復元できた。P 13もS K 4の中のP 12の西側で検出した柱穴で規模は32cm、深さ16cm、楕円形で埋土は褐色灰粘質土で遺物は土師器の小皿1点が復元できた、他にも実測不能の土師器の細片が出土する。P 14もS K 4の中のP 13の北東で検出した柱穴で規模は径88cm、深さ36cm、楕円形で埋土は灰褐色粘質土で、遺物は土師器の小皿2点が復元できた。P 15はP 16の南側で検出した柱穴で規模は52cm、深さ20cm、楕円形で埋土は褐色灰で、遺物は土師器の小皿2点が復元できた。P 16はP 15の北側で検出した柱穴で規模は44cm、深さ20cm、楕円形で埋土は褐色灰で、遺物は土師器の杯2点が復元できた、他にも実測不能の土師器の細片が数点出土する。P 17はP 16の南西で検出した柱穴で規模は径52cm、深さ16cm、円形で埋土は褐色灰粘質土で復元できる遺物はなかった、実測不能の土師器の細片が出土する。P 18はP 17の南西で検出した柱穴で規模は径56cm、深さ24cm、円形で埋土は褐色灰粘質土で土師器の小皿2点復元できた。P 19はS D 4の西側で検出した柱穴で、規模は径48cm、深さ36cm、円形で埋土はにぶい黄橙粘質土で遺物は土師器の小皿1点が復元できた。P 20はP 19の北側で検出した柱穴で規模は径40cm、深さ13cm、楕円形で埋土はにぶい黄橙粘質土で復元できる遺物はなかった、実測不能の土師器の細片が出土する。P 21はP 20の北西で検出した柱穴で規模は径40cm、深さ12cm、楕円形で埋土はにぶい黄橙粘質土で復元できる遺物はなかった。P 22はP 21の北西で検出した柱穴で規模は径56cm、深さ20cm、埋土はにぶい黄褐色粘質土で遺物は土師器の小皿が1点復元できた。P 23はP 22の北側で検出した柱穴で、柱痕も確認でき、規模は80cm、深さ40cm、円形で埋土はにぶい黄褐色粘質土で土師器の杯3点が復元できた。

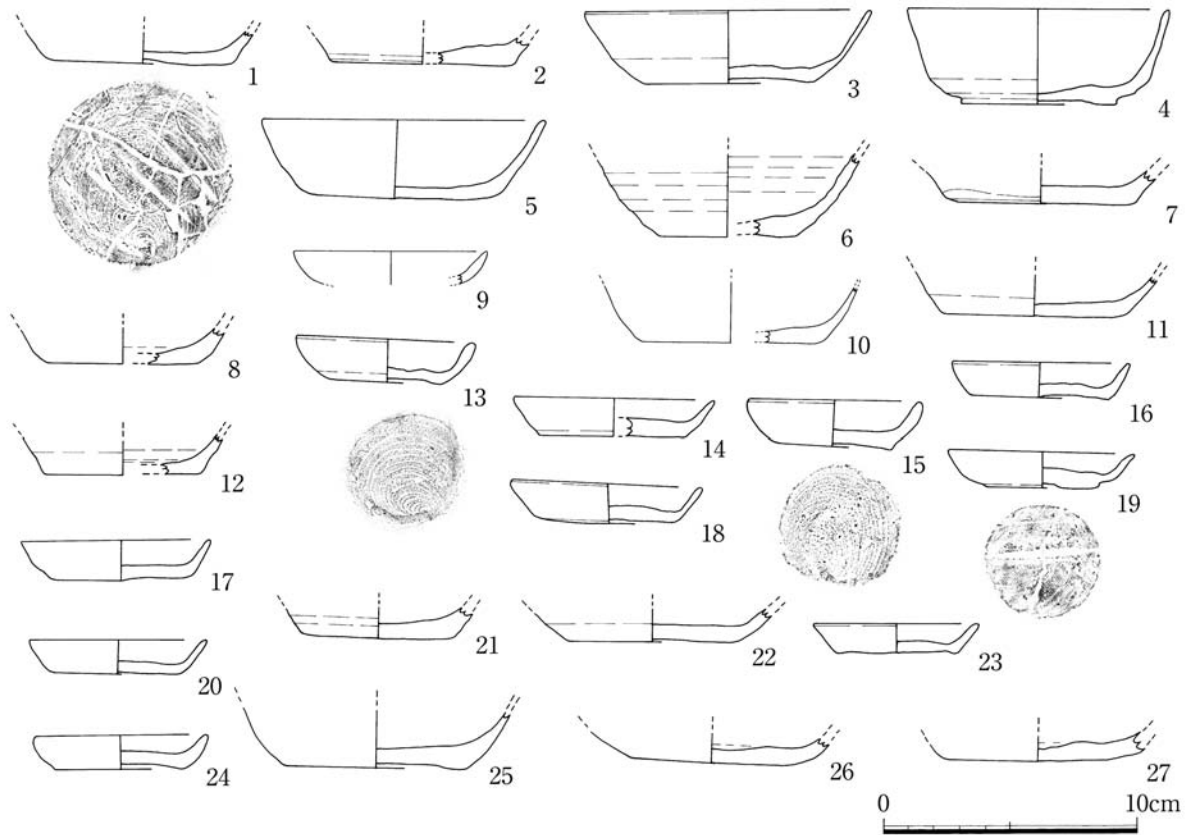


Fig. 51 C区遺構（ピット）出土遺物実測図（1～27）

ピット番号	平面規模(cm)	深さ(cm)	形態	遺物	ピット番号	平面規模(cm)	深さ(cm)	形態	遺物
P 1	径 52	20	円形	土師器 小皿	P 13	径 32	16	楕円形	土師器 小皿
P 2	径 78	32	楕円形	土師器 小皿、杯	P 14	径 88	36	楕円形	土師器 小皿(2)
P 3	径 80	36	円形	土師器 杯	P 15	径 52	20	楕円形	土師器 小皿(2)
P 4	径 80	40	楕円形	土師器 杯(2)	P 16	径 44	20	楕円形	土師器 杯(2)
P 5	径 50	36	楕円形	土師器 小皿	P 17	径 52	16	円形	
P 6	径 60	40	円形		P 18	径 56	24	円形	土師器 小皿、杯(2)
P 7	径 60	20	円形	土師器 小皿	P 19	径 48	36	円形	土師器 小皿
P 8	径 68	32	楕円形	土師器 小皿、杯	P 20	径 40	13	楕円形	
P 9	径 52	20	楕円形		P 21	径 40	12	楕円形	
P 10	径 48	24	円形		P 22	径 56	20	円形	土師器 小皿
P 11	径 48	44	円形	土師器 小皿	P 23	径 80	40	円形	土師器 杯(3)
P 12	径 68	40	楕円形	土師器 小皿(2)					

表28 C区遺構（ピット）計測表（1～23）

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
51-1	P1	土師器 (小皿)		— (1.4) — 7.0	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、平行圧痕の跡が認められる	
51-2	P2	〃		— (1.1) — 7.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がる	回転台成形、底部は摩耗が著しく不明	
51-3	〃	土師器 (杯)		11.2 2.85 — 5.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、ロクロ痕残る、口縁ヨコナデ調整	
51-4	P3	〃		10.3 3.7 — 6.1	円盤状高台を有し体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、回転台成形、口縁部ヨコナデ調整	
51-5	P4	〃		11.1 3.05 — 7.5	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる	底部糸切り、平行圧根が認められる、回転台成形、口縁部ヨコナデ調整	
51-6	〃	土師器 (小皿)		— (3.3) — 5.4	平坦な底部から体部は内湾気味に外上方に立ち上がる	底部糸切り、体部内外面ロクロ痕が認められる	
51-7	P5	〃		— (1.45) — 7.5	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる	底部糸切り、体部は全体的に摩耗が著しく不明	
51-8	P7	土師器 (杯)		8.0 1.5 — 5.6	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる、口縁端部は丸く収める	底部糸切り、ロクロ痕が残る	
51-9	P8	土師器 (小皿)		— (2.25) — 7.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
51-10	〃	〃		7.6 (1.3) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる	口縁ヨコナデ調整	
51-11	P11	〃		— (1.8) — 7.1	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内外面ロクロ痕が残る	
51-12	P12	〃		— (1.6) — 6.1	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	体部ロクロ痕が認められる、底部は摩耗が著しく不明	
51-13	〃	〃		6.9 1.65 — 4.3	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、内面底部回転台成形、口縁ヨコナデ調整	
51-14	P13	〃		7.8 1.5 — 5.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる	口縁部ヨコナデ調整、全体的に摩耗が著しく不明	
51-15	P14	〃		6.7 1.8 — 4.8	やや上げ底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は丸くおさめる	底部糸切り、内面底部回転台成形、口縁部ヨコナデ調整	
51-16	〃	〃		6.9 (1.4) — 5.5	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、回転台成形、口縁部ヨコナデ調整	

表29 C区遺構（ピット）遺物観察表（1）

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
51-17	P15	土師器 (小皿)		7.5 1.6 — 5.6	平坦な底部から、体部は短く直線的に立ち上がる	底部糸切り、口縁ヨコナデ調整	
51-18	〃	〃		7.5 1.6 — 5.5	平坦安定部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	底部糸切り、口縁内外面ヨコナデ調整	
51-19	P17	〃		7.4 1.4 — 4.45	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	口縁内外面ヨコナデ調整、底部糸切り	
51-20	P18	〃		6.95 1.35 — 5.2	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、口縁ヨコナデ調整	
52-21	〃	土師器 (杯)		— (1.3) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	体部ロクロ痕が認められる、底部摩耗が著しく不明	
51-22	〃	〃		— (1.3) — 6.1	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、全体的に摩耗が著しく不明	
51-23	P19	土師器 (小皿)		6.4 1.2 — 4.6	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる、口縁端は丸くおさめる	口縁部ヨコナデ調整、底部平行圧痕が認められる	
51-24	P22	〃		6.3 1.3 — 5.0	やや上げ底の底部から体部は若干内湾気味に立ち上がる、口縁端部は丸くおさめる	全体的に摩耗が著しく不明	
51-25	P23	土師器 (杯)		— (2.3) — 7.0	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
51-26	〃	〃		— (1.2) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底部回転台成形	
51-27	〃	〃		— (1.3) — 6.1	平坦な底部	底部糸切り、内面底部回転台成形	

表30 C区 遺構（ピット）遺物観察表（2）

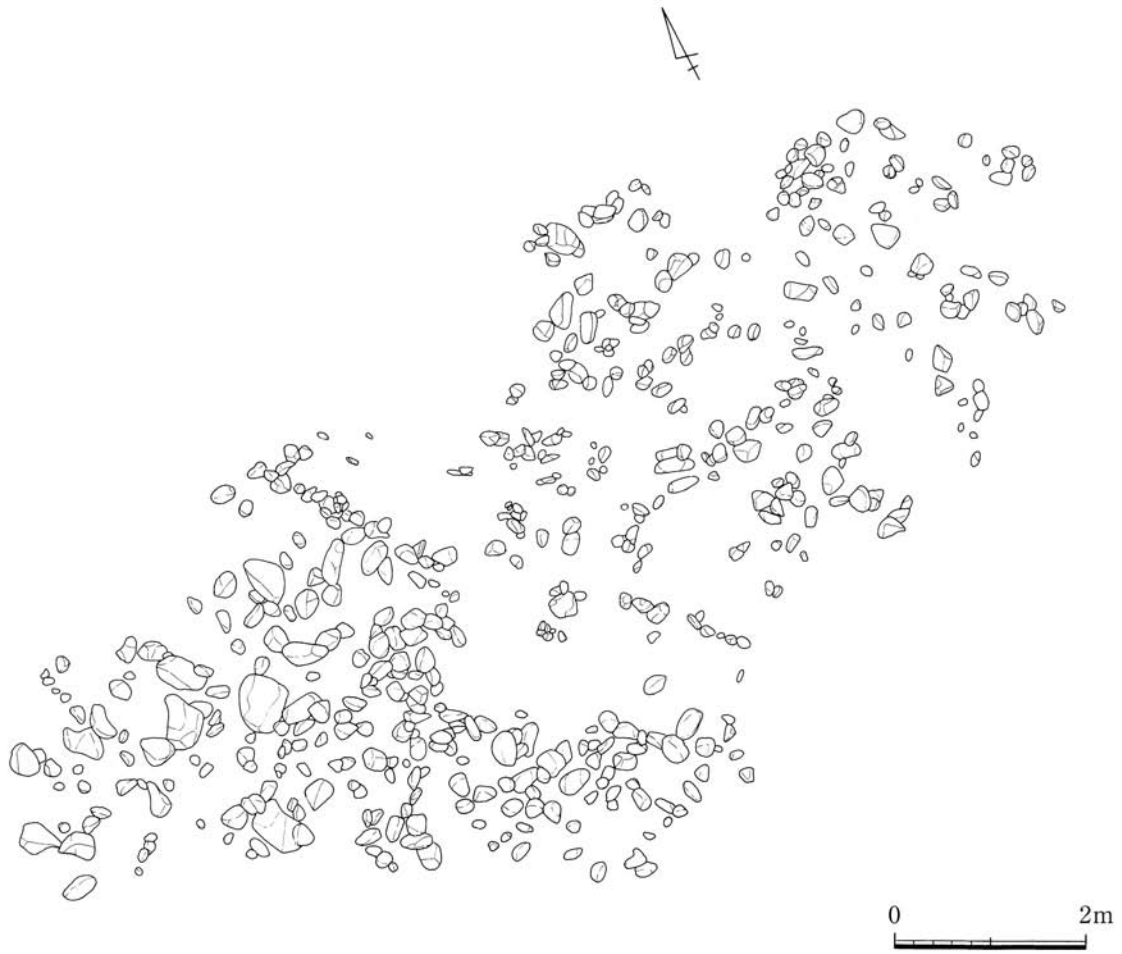


Fig. 52 C区集石遺構 (SX5) 平面図

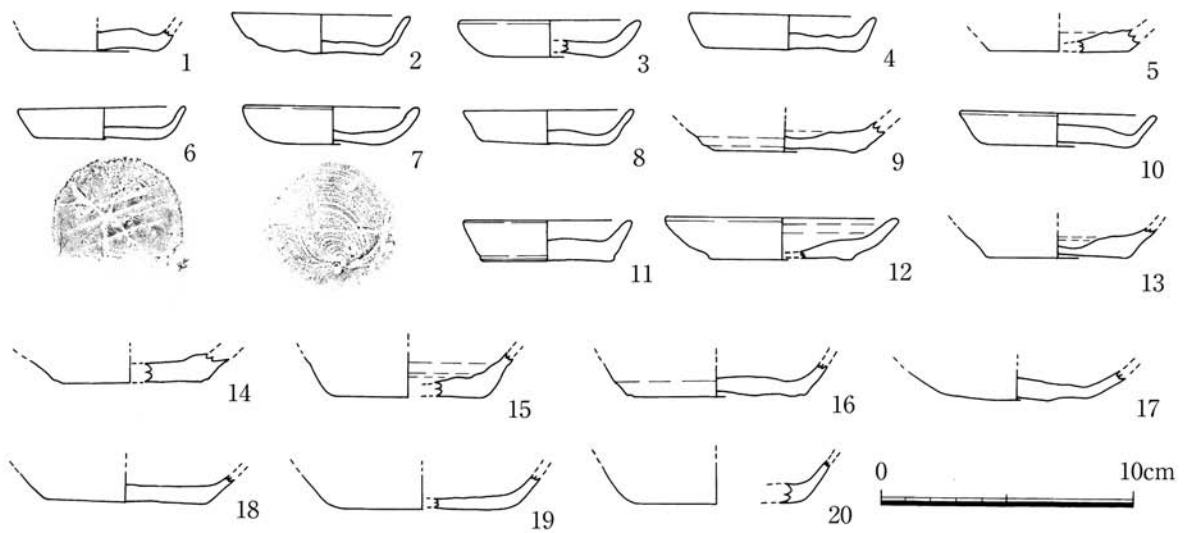


Fig. 53 C区集石遺構出土遺物実測図 SX5 (1~20)

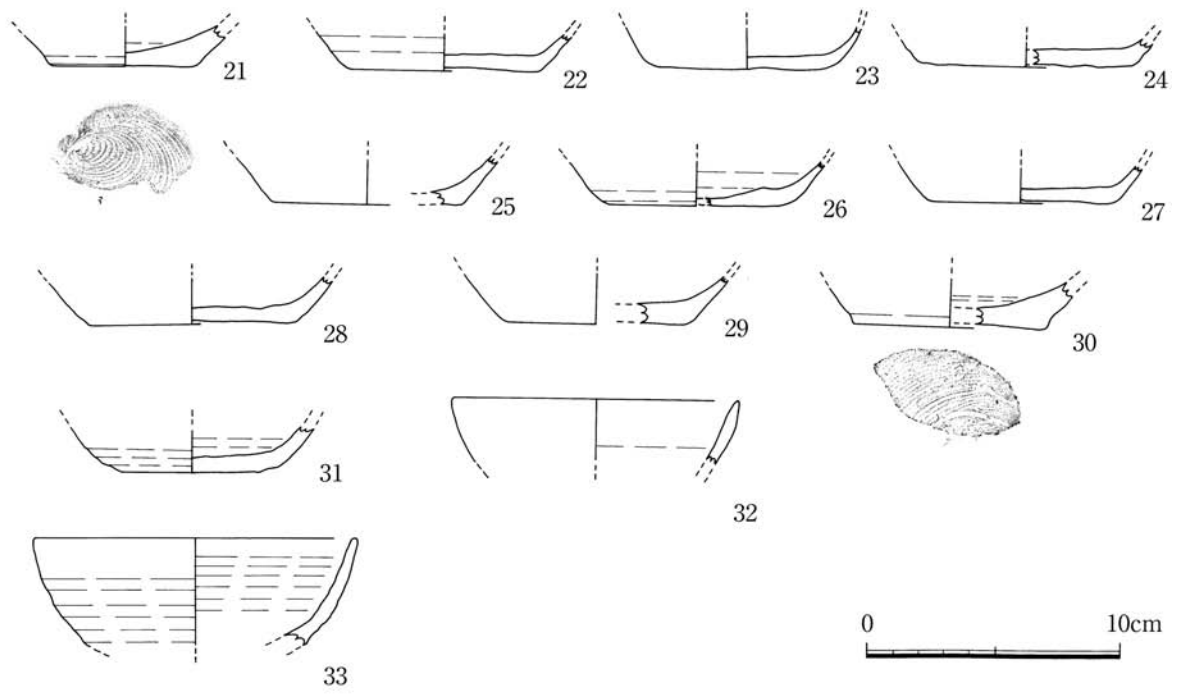


Fig. 54 C区 集石遺構出土遺物実測図 SX5 (21~33)

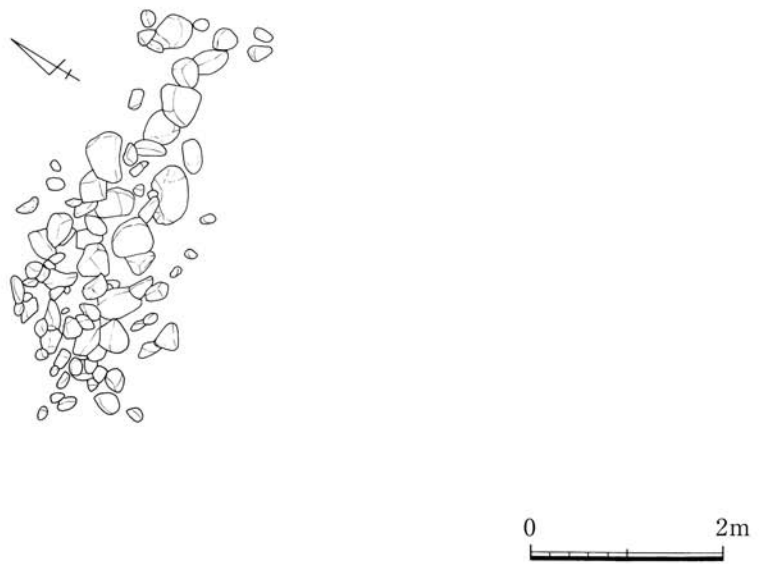


Fig. 55 C区 集石遺構 SX6 平面図

#### C区 集石遺構、S X 5 (Fig. 52)

S X 5 は、S D 4 の南側のⅢ層で検出した集石で規模は幅6.2m、長さ9.5mを測り、3～35cmの大小の自然礫を呈し、不整楕円形で、集石内の掘り込みは認められないが、多数遺物が出土する、復元できた遺物は土師器の小皿、皿、杯など31点、小皿1～25、杯26～33である。実測不能の土師器、瓦器、青磁の細片も多数出土する。

#### C区 集石遺構、S X 6 (Fig. 55)

S X 6 はS X 5 の南側で検出した集石で規模は幅1.8m、長さ5.4mを測り、3～30cmの大小の自然礫を呈し、不整形で、集石内の掘り込みが認められず、出土遺物も確認できなかった、S X 5 と比べれば、礫の大きさは変わらないが規模が非常に小さい。



挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
53-1	SX 5	土師器 (小皿)		(0.9) — 5.35	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく 不明	
53-2	〃	〃		7.1 1.5 — 5.0	平坦な底部から体部は短く直線的 に外上方に立ち上がり口縁部 に至る	外面底部平行圧痕が 認められる、口縁部 ヨコナデ調整	
53-3	〃	〃		7.0 1.4 — 4.6	やや上げ底の底部から体部は短く 内湾気味に立ち上がる、口縁 部は丸くおさめる	全体的に摩耗が著しく 不明	
53-4	〃	〃		— (1.3) — 6.1	平坦な底部から体部は短く直線的 に外上方に立ち上がり口縁部 に至る	回転台成形である が、底部は摩耗が著 しく不明	
53-5	〃	〃		— (0.9) — 5.5	平坦な底部	底部糸切り、内面底 部ロクロ痕残る	
53-6	〃	〃		6.6 1.2 — 5.0	辺居た菜底部から体部は短く直 線的に外上方に立ち上がる	底部糸切りあと平行 圧痕が残る、口縁ヨ コナデ調整	
53-7	〃	〃		6.9 1.5 — 4.0	平坦な底部から体部は短く外上 方に立ち上がる、口縁端部は丸 くおさめる	底部糸切り、口縁部 ヨコナデ調整、回転 台成形	
53-8	〃	〃		6.7 1.3 — 5.3	平坦な底部から体部は短く外上 方に立ち上がる、口縁端部は丸 くおさめる	底部糸切り、口縁部 ヨコナデ調整	
53-9	〃	〃		— (1.2) — 5.6	平坦な底部から体部は内湾気味 に立ち上がる	底部糸切り、回転台 成形	
53-10	〃	〃		7.5 1.3 — 6.2	やや上げ底から体部は短く直線的 に外上方に立ち上がり口縁部 に至る	口縁ヨコナデ調整 体部、底部は摩耗が著 しく不明	
53-11	〃	〃		6.6 1.6 — 5.0	平坦な底部から体部は短く直線的 に外上方に立ち上がり口縁部 に至る	底部平行圧痕が認め られるが全体的に摩 耗が著しく不明	
53-12	〃	〃		9.0 1.05 — 5.6	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がり口縁部に至 る	底部糸切り、口縁内 外面ヨコナデ調整	
53-13	〃	〃		— (1.2) — 5.6	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	体部内外面ロクロ痕 が残る	
53-14	〃	〃		— (1.1) — 6.2	器壁が厚く、平坦な底部から屈 曲し、体部は直線的に上方に立 ち上がる	全体的に摩耗が著しく 不明	
53-15	〃	〃		— (1.85) — 6.2	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	内面ロクロ痕が残 る、全体的に摩耗が 著しく不明	
53-16	〃	〃		— (1.35) — 7.0	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	体部ロクロ痕のあと が認められる、底部 摩耗が著しく不明	
53-17	〃	〃		— (1.25) — 5.5	平坦な底部から体部は内湾気味 に外上方に立ち上がる	回転台成形、体部、 底部摩耗が著しく不 明	

表31 C区遺構(SX5)遺物観察表(1)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
53-18	SX 5	土師器 (小皿)		— (1.15) — 6.4	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	内面底部ロクロ痕が残る、他は摩耗が著しく不明	
53-19	〃	〃		— (1.4) — 7.4	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	回転台成形、底部糸切りのあと平行圧痕が認められる	
53-20	〃	〃		— (1.7) — 6.8	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
54-21	〃	〃		— (1.7) — 5.5	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、ロクロ痕がのこる	
54-22	〃	〃		— (1.55) — 7.4	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内外面ロクロ痕残る	
54-23	〃	〃		— (1.8) — 7.0	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
54-24	〃	〃		— (1.15) — 8.4	平坦な底部から体部はやや内湾気味に立ち上がる	回転台成形、底部糸切りのあと、平行圧痕が認められる	
54-25	〃	〃		— (2.0) — 7.6	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
54-26	〃	土師器 (皿)		— (1.8) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、ロクロ痕が残る	
54-27	〃	〃		— (1.7) — 7.3	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	回転台成形、底部摩耗が著しく不明	
54-28	〃	土師器 (杯)		— (1.85) — 8.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	ロクロ痕が残る、摩耗が著しく不明	
54-29	〃	〃		— (2.0) — 7.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
54-30	〃	〃		— (1.85) — 7.6	円盤状の高台から体部は直線的に立ち上がる	底部糸切り、内外面ロクロ痕が残る	
54-31	〃	〃		— (1.8) — 5.4	平坦な底部から体部は外上方に立ち上がる	底部糸切りのあと平行圧痕が認められる、体部内外面ロクロ痕が残る	
54-32	〃	〃		11.2 (2.6) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る	口縁部ヨコナデ調整	
54-33	〃	〃		12.6 (4.2) — —	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る	体部内外面ロクロ痕残る	

表32 C区遺構(SX5)遺物観察表(2)

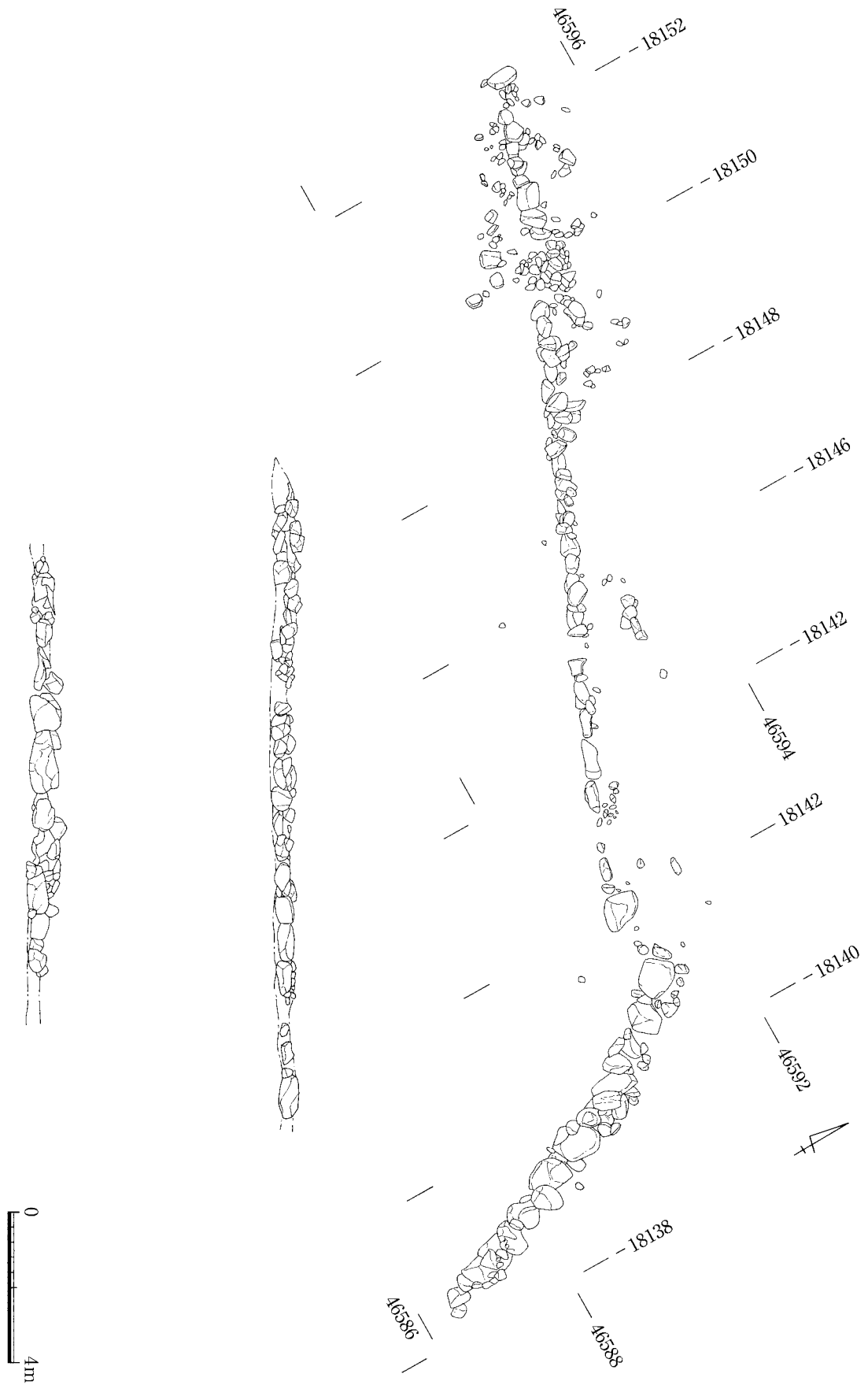


Fig. 56 C区 石垣状遺構平面及び側面図

### C区 石垣状遺構 (Fig. 56)

石垣状遺構は調査区の西側で検出した遺構で、遺物は、遺構内ではほとんど認められず、外周域で認められたが片寄りが有り、東側で遺物が多数出土するが、西側はほとんど確認出来なかった。東部出土遺物は流入したものと考えられよう、遺物の種類は土師器が多く、他に瓦器、青磁、東播系須恵器、備前系の細片も少量出土する、復元できる遺物は少なく土師器の小皿、杯が数点できた、実測不能の遺物がほとんどであった。規模は南北に延び歪みを生じ細長く、全長は13.5mを測る、形態は「へ」の字を逆にした形をとり、長い方は20～35cm（磔は小さい）、短い方は30～50cm（磔が大きい）を呈し、自然磔と河原石を配置する。

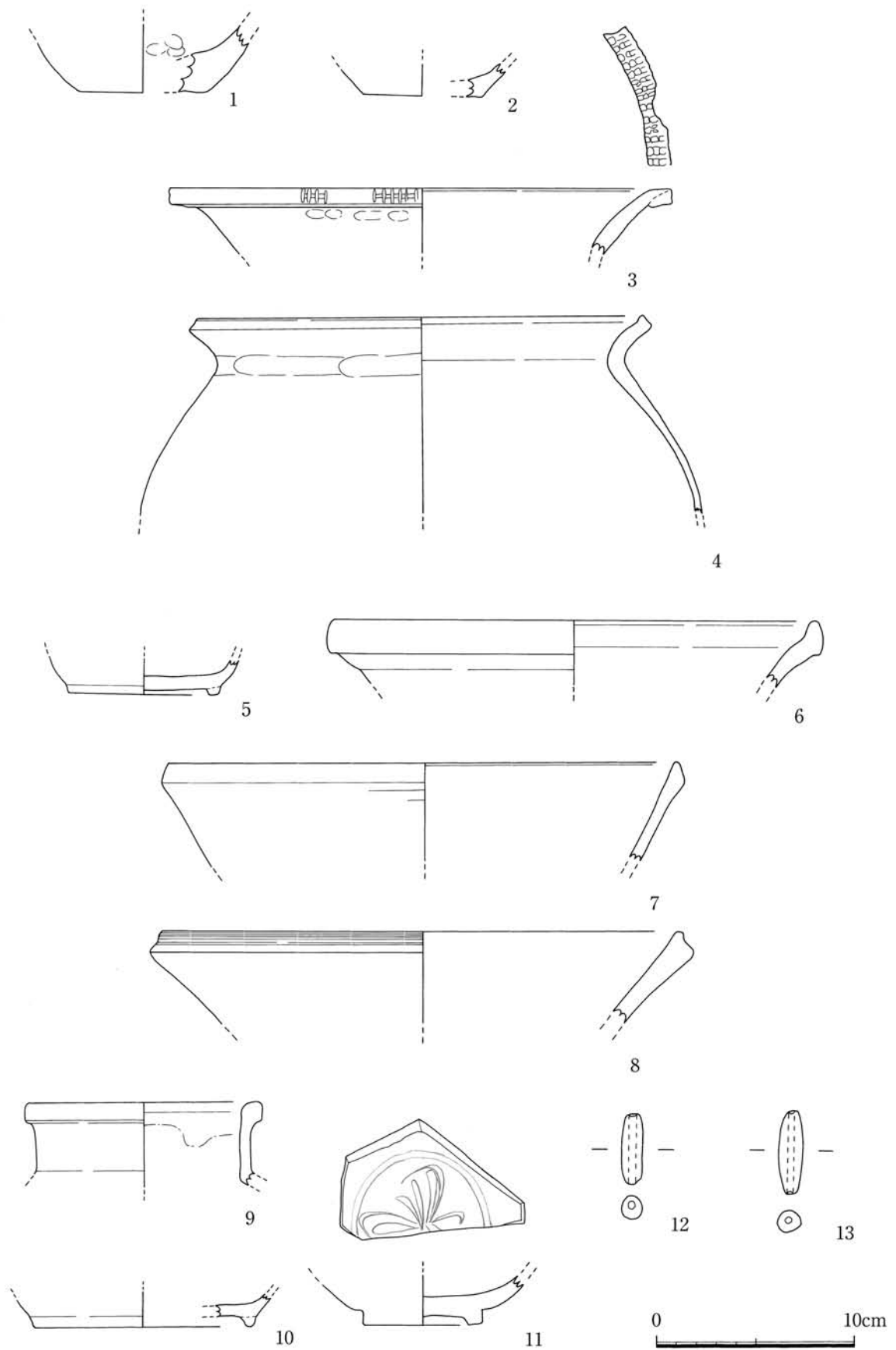


Fig. 57 C区 遺構外（石垣周辺）出土遺物実測図（1～13）

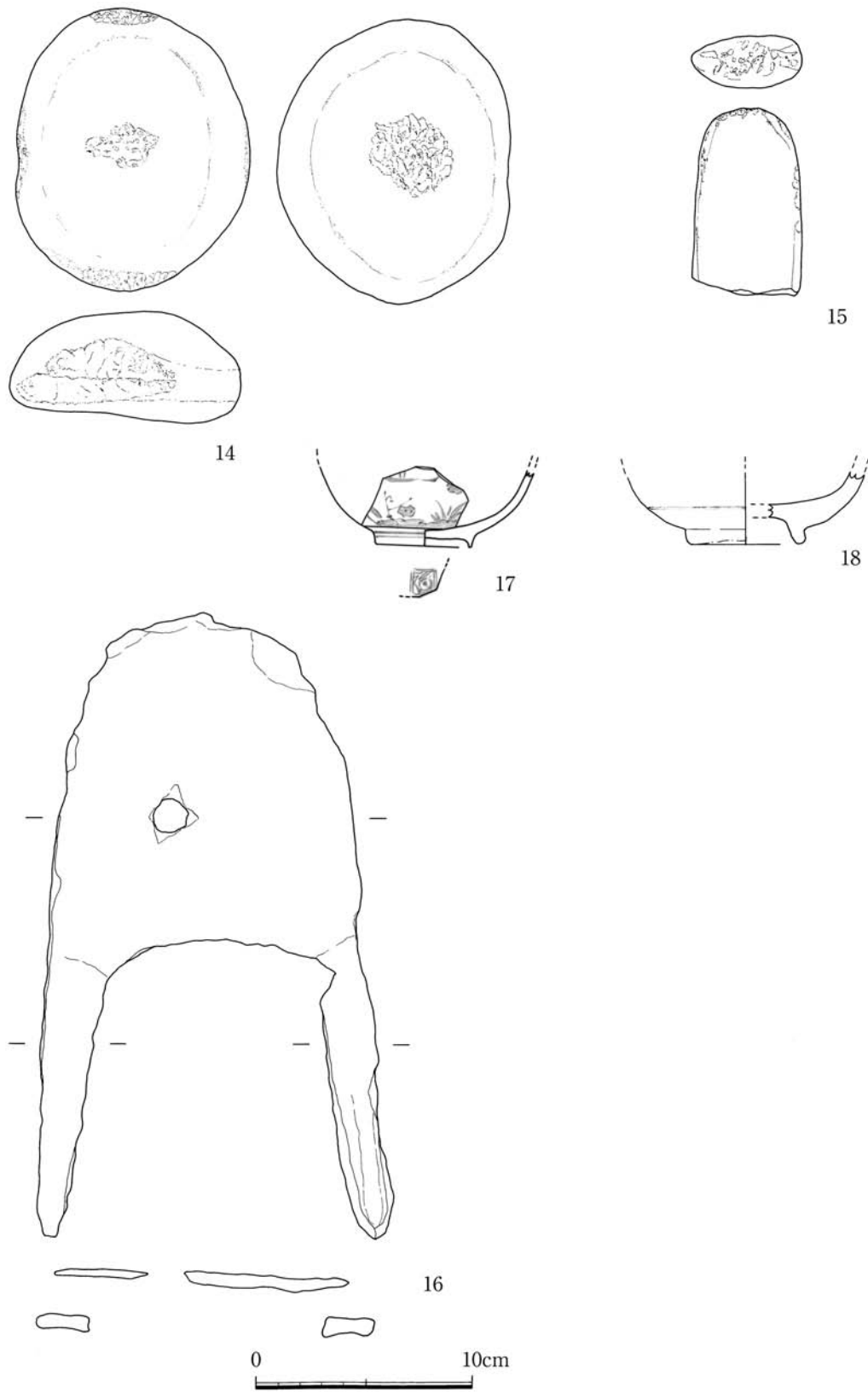


Fig. 58 C区 遺構外（石垣周辺）出土遺物実測図（14~18）

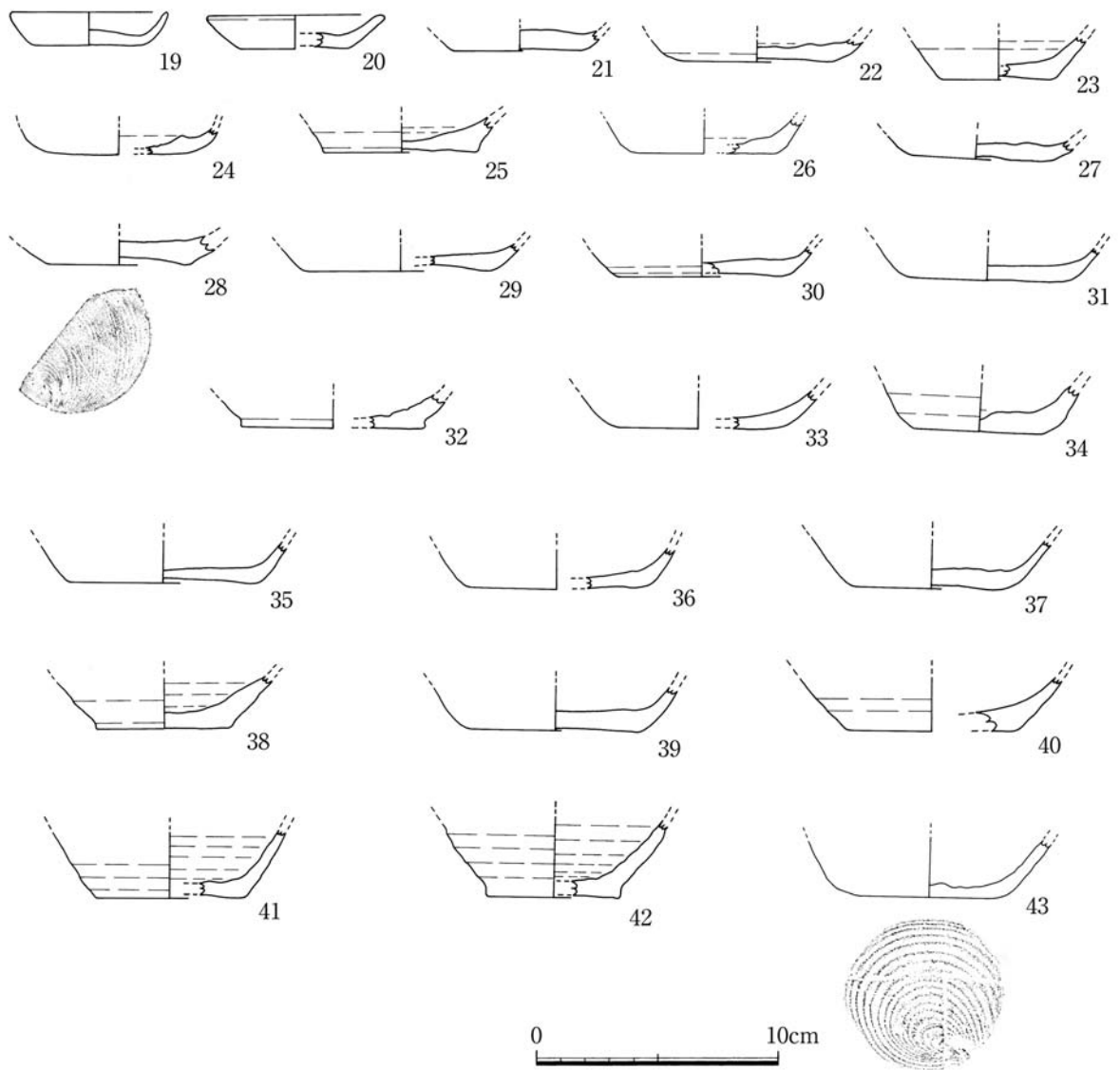


Fig. 59 C区 遺構外（石垣周辺）出土遺物実測図（19～43）

挿図番号	遺構番号 層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態、文様	手法	備考
57-1	Ⅳ層	弥生土器 (壺)	-	(3.4) - 6.2	平底の底部で器壁が厚く体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明、胎土に砂粒を含む	中期
57-2	〃	弥生土器	-	(1.7) - 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	中期末 (神西式)
57-3	〃	弥生土器 (壺)	25.2 (3.3) - -	-	口縁部は大きく外反し貼付口縁、口唇部刻目文	口縁部外面貼付の跡指頭圧痕、体部外面刷毛目調整	中期、前半
57-4	〃	土師器 (甕)	22.4 10.0 - -	-	口縁部は「く」の字状に外反し端部は凹む	口縁部内外面ヨコナデ調整	古代
57-5	〃	須恵器 (椀)	-	(1.9) - 7.6	底部は輪高台から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる、底部外面ナデ調整	回転台成形	古代末
57-6	〃	須恵器 (捏鉢)	24.4 (3.3) - -	-	体部は直線的に外上方に立ち上がる、口縁部は肥厚する	全体的に摩耗が著しく不明	中世
57-7	〃	須恵器 (鉢類)	25.8 (5.3) - -	-	体部は直線的に外上方に立ち上がる、口縁部は肥厚する	回転ナデ調整	〃
57-8	〃	備前焼 (鉢類)	26.0 (4.7) - -	-	体部は直線的に外上方に立ち上がる、口唇部は凹む	口縁端部に5本の条線が入る、全体的に摩耗が著しく不明	13世紀頃
57-9	〃	備前焼 (壺)	11.6 (4.25) - -	-	頸部は直立して上方に立ち上がり端部はやや肥厚し玉縁状を呈する	摩耗が著しく不明	中世
57-10	〃	土師器 (椀)	-	(1.7) - 11.0	貼付の輪高台から体部はやや内湾気味に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	古代
57-11	〃	青磁 (碗)	-	(2.6) - 6.0	輪高台から体部は内湾気味に立ち上がる	外底と畳付け部分は露胎、内外面施釉	龍泉窯
57-12	〃	土錘	全長 3.5 全幅 1.2 孔径 0.4 重量 3.28g	-	-	-	土師器
57-13	〃	〃	全長 4.25 全幅 1.25 孔径 0.35 重量 4.0g	-	-	小型の製品	土師器
58-14	Ⅲ層	叩石	全長 12.8 全幅 10.5 孔径 4.8 重量 1000g	-	楕円形の砂岩製、表裏面共中心部及び側縁全体に打痕が認められる	-	-
58-15	〃	〃	全長 (8.7) 全幅 (5.2) 孔径 2.4 重量 176g	-	長方形の砂岩製で中心部から破損、表裏面共中心部及び側縁に打痕が認められる	-	-
58-16	Ⅳ層	鋤先	全長 29.0 全幅 - 孔径 - 重量 429g	-	中央部分が開孔するU字形鋤先、木製の風呂部に固定される返りは明瞭に残存している	-	風呂鋤 (中世)

表33 C区 遺構外遺物観察表 (1)



挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
58-17	Ⅲ層	伊万里焼 (碗)		— (3.65) — 4.4	逆三角形の削り出し高台から体部は内湾気味に外上方に立ち上がる外面に草花文外底に渦巻文が染めつけられる	全面に施釉される	近世
58-18	〃	肥前産 (碗)		— (3.4) — 5.0	高台付で体部は内湾気味に立ち上がる、外面に文様	畳付けは露胎、他は施釉	陶胎染付 (近世)
59-19	Ⅳ層	土師器 (小皿)		(6.4) 1.4 — (4.5)	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる、口縁端部は丸くおさめる	全体的に摩耗が著しく不明	
59-20	〃	〃		7.1 (1.35) — 4.4	平坦な底部から体部は短く直線的に外上方に立ち上がる、口縁端部は丸くおさめる	口縁部ヨコナデ調整 底部、体部は摩耗が著しく不明	
59-21	〃	〃		— (0.9) — 5.5	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく不明	
59-22	〃	〃		— (0.95) — 6.2	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底部 ロクロ痕残る	
59-23	〃	〃		— (1.8) — 4.8	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	内外面ロクロ痕残る 底部は摩耗が著しく不明	
59-24	〃	〃		— (1.5) — 6.2	平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる	底部糸切り、回転台 成形	
59-25	〃	〃		— (1.45) — 6.4	やや器壁の厚い底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	内外面ロクロ痕残る 外底糸切りの跡平行 圧痕が残る	
59-26	〃	〃		— (1.45) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	回転台成形、底部は 摩耗が著しく不明	
59-27	〃	〃		— (1.05) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部摩耗が著しく不明	
59-28	〃	〃		— (1.2) — 6.0	やや上げ底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内底 ロクロ痕が残る	
59-29	〃	〃		— (1.2) — 7.8	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切りの跡、平 行圧痕が認められる、 内面底部ロクロ 痕が残る	
59-30	〃	〃		— (1.3) — 7.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内底 ロクロ痕が残る	
59-31	〃	〃		— (1.5) — 7.0	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部平行圧痕が認め られる、回転台成形	
59-32	〃	〃		— (1.4) — 7.6	円盤状高台から体部は直線的に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面 ロクロ痕が残る	

表34 C区 遺構外遺物観察表 (2)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
59-33	IV層	土師器 (小皿)		— (1.7) — 7.2	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	全体的に摩耗が著しく 不明	
59-34	〃	〃		— (2.1) — 5.4	器壁の厚い底部から体部は直線的 に外上方に立ち上がる	底部糸切り、内外面 ロクロ痕が残る	
59-35	〃	〃		— (1.8) — 7.7	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切り、内面底 部ロクロ痕が残る	
59-36	〃	〃		— (1.7) — 7.5	平坦な底部から体部は内湾気味 に外上方に立ち上がる	底部糸切りの跡平行 圧痕の跡が認められ る	
59-37	〃	〃		— (2.05) — 6.2	弊店な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切りの跡平行 圧痕が残る	
59-38	〃	土師器 (杯)		— (1.9) — 5.6	円盤状高台から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	内外面ロクロ痕が残 る	
59-39	〃	〃		— (1.85) — 7.1	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切りの跡平行 圧痕が認められる	
59-40	〃	〃		— (2.25) — 7.2	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	体部外面、ロクロ痕 が認められる、底部 摩耗が著しく不明	
59-41	〃	〃		— (2.85) — 6.0	平坦な底部から体部は直線的に 外上方に立ち上がる	底部糸切り、内外面 ロクロ痕が残る	
59-42	〃	〃		— (3.3) — 5.4	円盤状高台を有し、体部は直線的 に外上方に立ち上がる	体部内外面ロクロ痕 が認められる、底部 摩耗が著しく不明	
59-43	〃	〃		— (0.9) — 5.5	平坦な底部	底部糸切り、内底ロ クロ痕が残る	

表35 C区 遺構外遺物観察表 (3)

## 第4節 D区

### 調査区の概要

#### 調査区の概要

D区は、調査区の南側である。縦32m、横26m、面積896㎡を測る。地形的には昔は谷部であったと考えられる。現在は水田である。

調査区、D区を3つに分けて調査を行った。上段をA地点、中段をB地点、下段をC地点に分けて調査を進めた。

D区、A地点は、縦12m、横26m、面積312㎡を測る。遺構、遺物は確認できなかった。Ⅲ層で自然礫が出土。

東壁セクションを観察する。1層は表土（灰色）。Ⅱ層は耕作土（灰色 橙色を少量含む）。Ⅱ'層は耕作土（灰色 橙色を多量含む）。Ⅲ層は浅黄色（自然礫多数含む）

D区、B地点は、縦10m、横30m、面積300㎡を測る。遺構は確認できなかった。遺物が少量出土。Ⅱ層から中国陶磁器の破片、伊万里焼（各1点ずつ）。Ⅲ層は近世と思われる木簡が調査区の南側で11点出土（墨書のもの10点、何も書かれてないもの1点）。Ⅳ層は土師器の甕、土錘各1点、土師器の小皿3点出土。

東壁セクションを観察する。1層は表土（灰色粘質土）。Ⅱ層は耕作土（灰オリーブ粘質土）近世の遺物を含む層。Ⅲ層は青灰色粘出土（小礫を含む、木簡が出土した層）。Ⅳ層は暗青灰色粘出土（礫を含む、遺物少量含む）

D区、C地点は、縦10.5m、横27m、面積284㎡を測る。遺構は確認できなかった。遺物はⅡ層から陶磁器少量、Ⅲ層から土師器の破片が少量出土。

南壁セクションを観察する。1層は表土（灰色）、Ⅱ層は耕作土（オリーブ灰）Ⅲ層は青灰色粘質土（小礫を含む）。Ⅳ層は浅黄色（礫を含む）。

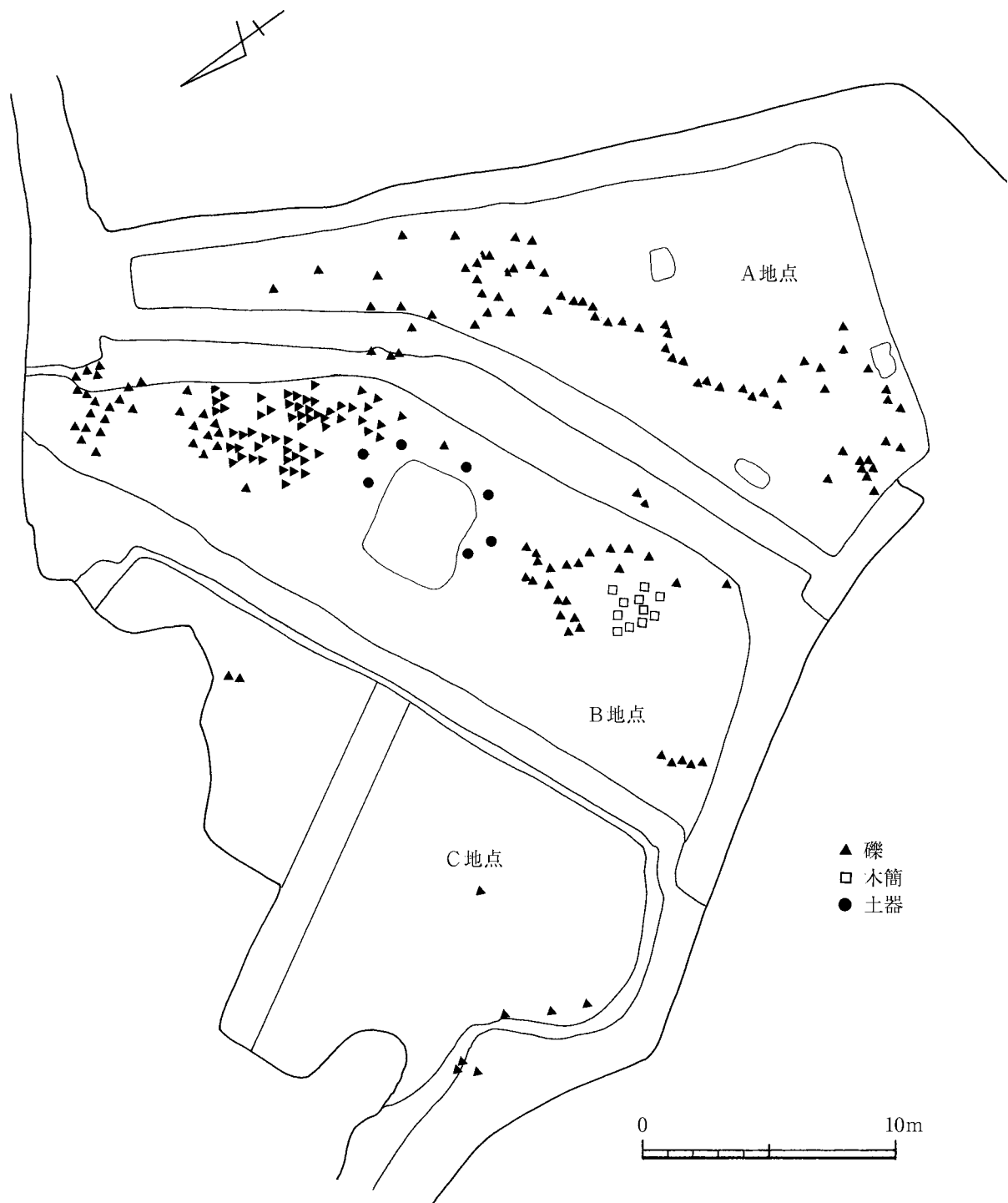


Fig. 60 D区 全体図及び出土遺物地点

D区、A、B、C地点の層序

A地点の層序

D区、調査区の東側（上段）を調査、東壁セクションを観察、層序は1層～Ⅲ層で南側半分は攪乱を受けている。遺構、遺物は認められず、Ⅲ層で自然礫を確認する。トレンチ（1×1m）を3ヶ所入れて下層を確認するが変化はなかった。

B地点の層序

D区、調査区（中段）を調査、東壁セクションを観察、層序は1層～Ⅲ層で深さ80cm、遺構は確認できなだったが、遺物がⅡ層から伊万里焼、全面施釉、内面草花文Fig. 62-6、中国陶磁器、油頭染付け、内面染付け、体部内外面施釉、Fig. 62-7、復元できた、他にも実測不能の近世の細片が出土する。Ⅲ層から木札（木簡）11点出土、1点は文字なし、他の10点は墨書で文字が書かれていた、Fig. 62-9～18、Ⅳ層から古代の甕、Fig. 62-1、土錘小型の製品、Fig. 62-5、土師器の小皿、Fig. 62-2～4、木札を除く7点が復元できた。

C地点の層序

D区、調査区の西側（下段）南壁セクションを観察、層序はⅠ層～Ⅳ層で遺構は確認できなかった、遺物はⅡ層から実測不能の近世の細片、Ⅲ層から土師器の細片が出土、復元できる遺物はなかった。

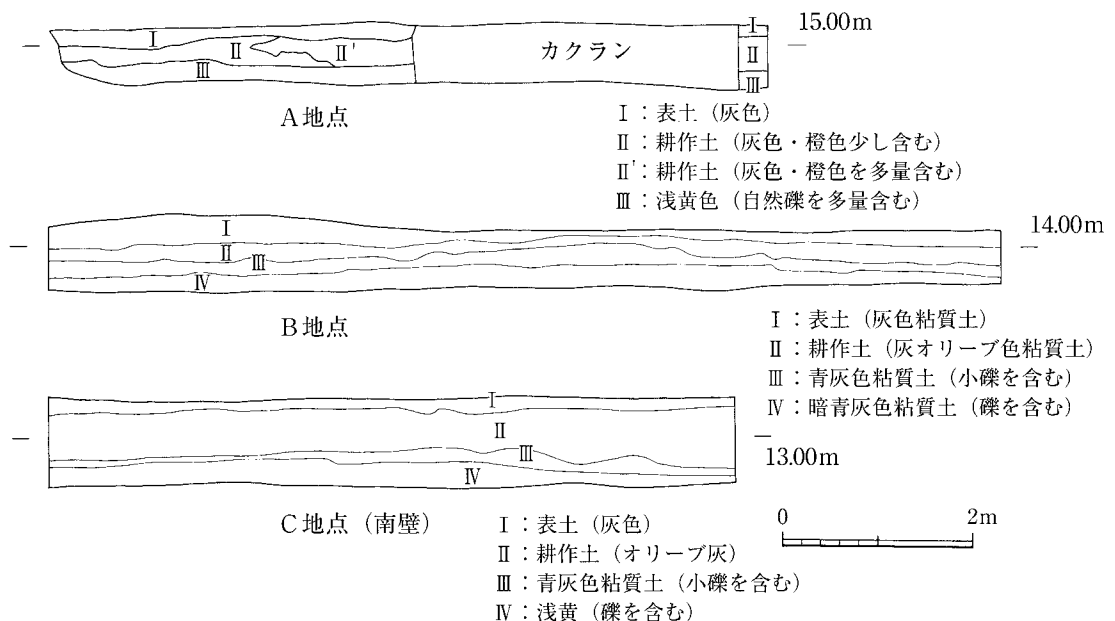


Fig. 61 D区 基本層序及びセクション図

#### D区、遺構外出土遺物 (Fig. 62)

D区、出土遺物はA地点とC地点は、礫だけで遺物は確認できなかった、B地点で古代の甕、土師器、土錘、近世の陶磁器、木簡が出土する。1、土師器の甕 (古代) Fig. 62-1、出土地点はほぼ中央、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は口縁部は「く」の字状に外傾、端部は内反する、胎土は砂粒を含む。2、土師器の小皿、Fig. 62-2、出土地点は中央やや北側、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は平坦な底部から体部は短く、口縁端部は丸く納める、底部中央に4mmの小孔が認められる。3、土師器の小皿、Fig. 62-3、出土地点はやや北側、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は平坦な底部から体部は短く、底部糸切り、ロクロ痕が残る。4、土師器の小皿、Fig. 62-4、出土地点は中央より東、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は体部は短く直線的に外上方に立ち上がる、底部糸切り、内外面ロクロ痕残る。5、土錘、Fig. 62-5、出土地点は古代の甕の東側、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は小型の土錘。6、近世陶磁器 (伊万里焼) Fig. 62-6、出土地点はほぼ中央部分、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は削りだし高台から、体部は内湾気味に立ち上がる、高台脇に三条の界線が施される、全面施釉。7、中国陶磁器 (油頭染付け) Fig. 62-7、出土地点はほぼ中央、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は体部は内湾気味に立ち上がる、内面染付け、体部内外面施釉。8、木札、Fig. 62-8、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は長方形の材の一端の右に切り込みを入れた物、文字なし。9、木札、Fig. 62-9、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は長方形の材で切り込みはなく他端を尖らせた物、文字四文字、はっきりしない。10、木札、Fig. 62-10、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は短冊型、文字三文字、はっきりしない。11、木札、Fig. 62-11、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は短冊型、文字一文字、確認する。12、木札、Fig. 62-12、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は文字四文字、確認する。13、木札、Fig. 62-13、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は文字四文字、はっきりしない。14、木札、Fig. 62-14、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は短冊型、折損、文字五文字、三文字確認する。15、木札、Fig. 62-15、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は短冊型、文字三文字、一字確認する。16、木札、Fig. 62-16、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は短冊型で表裏木目の線が走る、文字二文字、確認する。17、木札、Fig. 62-17、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は折損、文字四文字確認できる。18、木札、Fig. 62-18、出土地点は中央より南、層位はⅢ層、青灰色粘質土、形態は短冊型、折損、文字三文字確認できる。

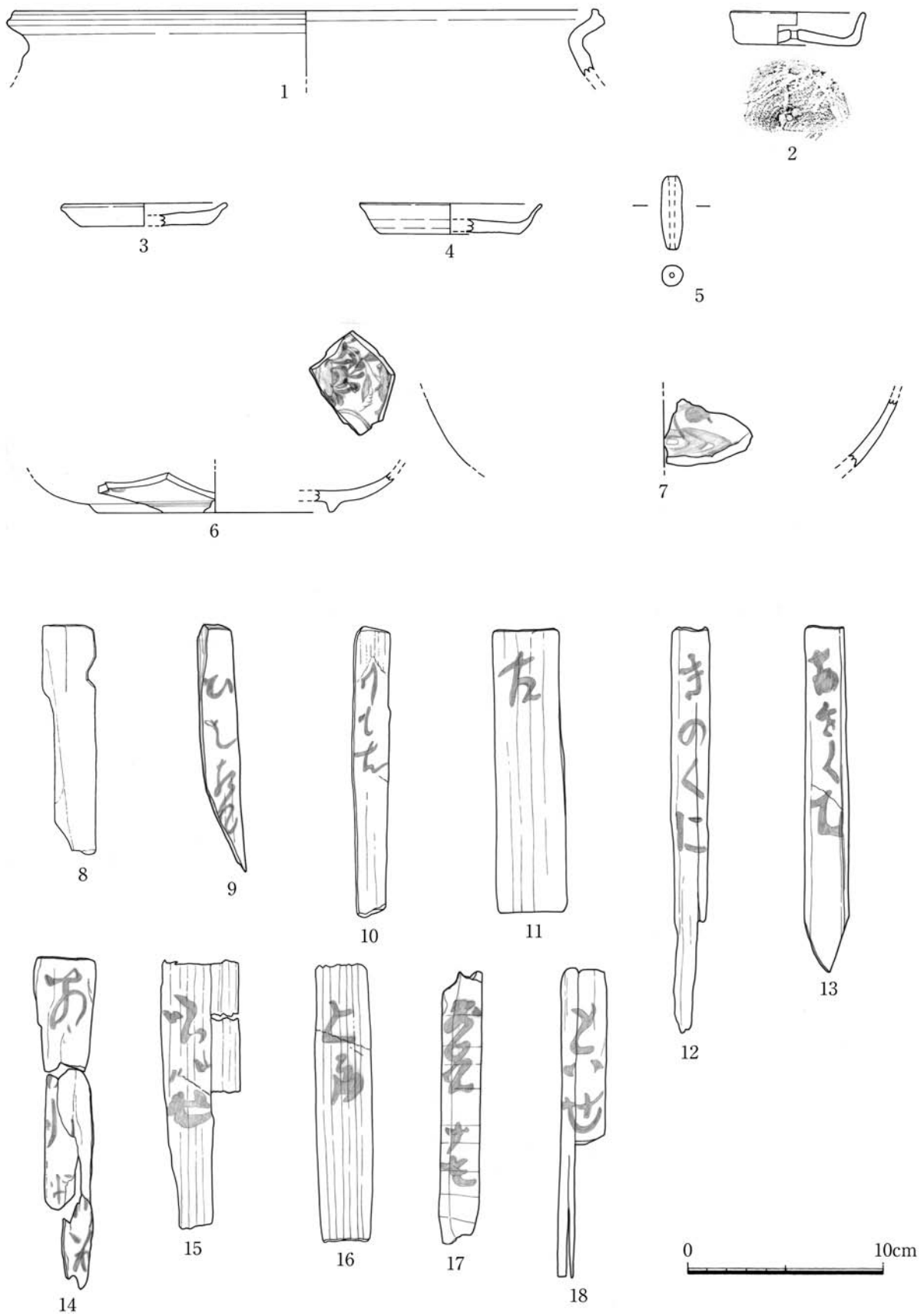


Fig. 62 D区 遺構外出土遺物実測図 (1~18)

挿図番号	遺構番号 層位	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態、文 様	手 法	備 考
62-1	Ⅲ層	土師器 (甕)		29.5 (3.3) — —	口縁部は「く」の字状に外傾する 口縁端部は内反する	全体的に摩耗が著しく不明 胎土は砂粒を含む	古代
62-2	〃	土師器 (小皿)		6.8 1.7 — 5.8	平坦な底部から、体部は短く直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる	底部 糸切り 口縁ヨコナデ調整 底部中央に4mmの小孔が認められる	
62-3	〃	〃		8.2 1.15 — 6.6	平坦な底部から、体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	底部 糸切り ロクロ痕が残る	
62-4	〃	〃		9.3 1.55 — 7.2	平坦な底部から、体部は短く直線的に外上方に立ち上がる	底部 糸切り 内外面ロクロ痕残る	
62-5	〃	土製品 (土錘)	全長 全幅 全厚 重量 孔径	3.7 1.1 1.0 4.2g 0.3			小型の製品
62-6	〃	近世陶磁器		— (2.0) — 10.0	削りだし高台から、体部は内湾気味に立ち上がる。 内面草花文 高台脇に3条の界線が施される	全面に施釉される	伊万里焼
62-7	〃	中国陶磁器		— — — —	体部は内湾気味に立ち上がる	内面染付け 体部内外面施釉	樟州、 汕頭染付け
62-8	〃	木札	長さ 幅 厚さ	11.5 2.8 0.4	文字なし 長方形の材の一端の右に切り込みを入れた物 長方形の材の一端の左側が破損	115×28×4mm	近世
62-9	〃	木簡①	長さ 幅 厚さ	12.8 2.0 0.8	文字4文字、はっきりしない 口口口口 ひ お 長方形の材で切り込みはなく、他端を尖らせたもの	128×20×8mm	〃
62-10	〃	木簡②	長さ 幅 厚さ	14.6 1.8 0.6	文字3文字、はっきりしない 口口口 と 短冊型	146×18×6mm	〃
62-11	〃	木簡③	長さ 幅 厚さ	14.5 3.5 0.5	文字1文字、確認 口 左 短冊型	145×35×5mm	〃
62-12	〃	木簡④	長さ 幅 厚さ	20.5 2.0 0.5	文字4文字、確認 口口口口 きのくに	205×20×5mm	〃
62-13	〃	木簡⑤	長さ 幅 厚さ	17.7 2.0 0.5	文字4文字、はっきりしない 口口口口 く	177×20×5mm	〃
62-14	〃	木簡⑥	長さ 幅 厚さ	17.5 3.2 0.6	文字5文字、一部はっきりする 口口口口口 お いね 短冊型 折損、文字は全体ははっきりしない	175×32×6mm	〃
62-15	〃	木簡⑦	長さ 幅 厚さ	13.7 3.7 0.8	文字3文字、一部確認 口口口 せ 短冊型	137×37×8mm	〃
62-16	〃	木簡⑧	長さ 幅 厚さ	14.0 3.0 0.5	文字2文字、はっきり確認 口口 上米 短冊型 表裏木目の線が走る	140×30×5mm	〃
62-17	〃	木簡⑨	長さ 幅 厚さ	14.0 2.3 0.4	文字4文字、文字確認 口口口口 おそ十七 折損	140×23×4mm	〃
62-18	〃	木簡⑩	長さ 幅 厚さ	15.5 2.5 0.5	文字3文字、はっきり確認 口口口 といせ 短冊型、折損	155×25×5mm	〃

表36 D区 遺構外遺物観察表 (1)



# 第V章 考 察

本章では、今回の調査で確認された縄文時代から近世までの遺物と中世の遺構から飛田坂本遺跡の性格について時代を追って考察し、周辺部の遺跡と共に考えてみたい。

## 1、縄文時代について

遺物は、平成8年度の試掘調査TR2のトレンチ、深さ2.3m、IV層（黒墨）から晩期の細片2点を確認するが平成9年度の本調査においては遺構、遺物は確認することは出来なかった。須崎市は今まで縄文時代の遺構、遺物は確認されていなかったが今回の調査で遺物が検出された事で特筆されたい。遺跡周辺には、縄文時代の遺跡として知られているのは、佐川町の不動ヶ岩屋遺跡、土佐市戸波の二宮神社近傍遺跡がある、周辺に縄文時代の遺跡が確認されていることについて須崎市にも関連が十分あると考えられる、調査が進むに連れて解明されるだろう

## 2、弥生時代について

遺物は、時期は中期から中期末で、調査区全体的にみると東側の中世の掘立て柱建物址の周辺と西側のSX5周辺の包含層から検出した、場所は2ヶ所に集中する、量は少量で7点復元できた、(壺5、甕1、不明1)他に実測不能の細片数点出土する、遺構は確認できなかった。弥生土器(神西式土器)が包含層から出土した関連は東側の山(調査区外)に弥生時代の高地性集落の存在が考えられる、遺物は山の斜面から流れ込んだと考えられる。

## 3、古代について

遺物は、中世の掘立て柱の周辺と西側の包含層から検出した(ほぼ弥生土器と同じ場所)、場所は2ヶ所に集中する、量は少量で土師器の甕Fig. 27-31、形態は「く」の字状に屈曲して外反する(搬入品)、須恵器の椀、Fig. 28-5(在地産、8中頃~9前半)、形態は貼付高台で、内湾気味に外上方に立ち上がる、底部外面墨書(2文字、□ 道)最初の文字はつきりしない、須恵器の杯蓋、Fig. 28-6、形態は天井部にやや丸みを持ち内反して綾に向かう、須恵器の皿、Fig. 28-7、土師器の甕、Fig. 28-8、土師器の甕、Fig. 57-4、須恵器の椀、Fig. 57-5、土師器の椀、Fig. 57-10、土師器の甕、Fig. 62-1、9点復元できた、他に実測不能の細片が数点出土する。

#### 4、中世について

この時期の遺構はB区の東側と、C区の東側を中心に認められ、遺物は調査区全体に土師器が中心、確認された遺構としては、掘立柱建物址4棟、土坑9基、溝4条、集石遺構(SX)6基、礫状遺構。基、石垣2基、柱穴とみられるピット100個前後を確認する。遺物では12世紀後半～13世紀後半にかけての青磁、13世紀後半の土師器、瓦器、14世紀～15世紀にかけての白磁、東播系須恵器、常滑焼までが出土しているがその中心は13世紀中頃～14世紀前半にかけてと考えられ、遺構もほぼ同時期と考えられる。今回確認した掘立柱建物址、SB-1は、3×2間で、柱間寸法にばらつきがみられるが柱穴の掘方はしっかりしている、柱穴にも遺物がみられ土師器の小皿、器壁が厚く体部が短い、土師器の杯は底部糸切り、内外面ロクロ痕が残る、青磁は外面鑄連弁文が施される、遺物から推測すると、SB-1は、13世紀後半と考えられる。SB-2は、SB-1の北側に隣接していて、規模は2×2間で柱間寸法はほぼ一定している、柱穴の掘方もしっかりしていて、柱穴に遺物がみられ、土師器の小皿、杯、時期はSB-1とほぼ同時期と考えられる。SB-3はSB-2の北側に隣接していて3×2間で、柱間寸法はばらつきがあるが、柱穴の掘方はしっかりしていて、柱穴にも遺物が含まれていて土師器の小皿、杯である、時期はSB-2とほぼ同時期であると考えられる。SB-4は、SB-3西側に隣接していて柱間は3×2間で、柱間寸法はほぼ一定している、柱穴の掘方は楕円形でばらつきがみられ、遺構内に遺物は皆無である、時期はSB-3とほぼ同時期であると考えられる。建物の規模は他に比べてやや小さいし、建物の位置など考えあわせると倉庫と考えている

SK-1は、B区で検出した不整長方形の土坑で、遺構内から土師器の杯(回転台成形)、瓦器の椀(貼付高台)、金属製品の短刀が出土、時期は掘立柱建物址とほぼ同時期と考えられる。

SD-1～SD-3はB区で検出した細長い溝であるが、規模が小さく浅いことからはっきりしない。SD-2、SD-3についても同じ考えである。

集石遺構(SX-1～SX-4)は、B区で検出した集石でどれも自然礫を方形状、円形状に配置している、集石内の掘り込みは認められない。遺物は土師器の細片が確認される程度である。性格がはっきりしないのでSXとした。

礫状遺構はB区で検出した遺構で、自然礫と河原礫を配置していて礎石と思われる河原石も存在する遺物は遺構内から多数確認される、土師器の小皿、杯、(底部糸切り、回転台成形)、瓦器の椀(貼付高台、指頭圧痕、ヨコナデ調整)、時期は掘立柱建物址とほぼ同時期と考えられる。礫状遺構としたが規模が非常に大きい、遺物がたくさん含まれている点などをふまえて、基壇状遺構の考えもすてがたい

SK-2～SK-9はC区で検出した土坑で、遺物は土師器の細片が出土する、時期は掘立柱建物址とほぼ同時期と考えている。

SD-4はC区で検出した溝で、遺物は土師器の小皿が出土する、時期は掘立柱建物址とほぼ同時期と考えている。

SX-5、SX-6はC区で検出した集石で、特にSX-5は規模が大きく遺物も多数出土する、

遺構内の掘り込みが認められ拳大の自然礫が平面的に配石されている。墓としての性格も考えられる、時期は掘立柱建物址とほぼ同時期と考えられる。SX-6は自然礫を配置し、集石内の掘り込みがなく、遺物も確認出来なかった、時期もはっきりしない。

石垣状遺構はC区で検出された石垣で、積み石は一段しかなく上段は攪乱されたと考えられる、遺物は遺構内で確認できなかったが、外周域で、土師器の小皿、杯、瓦器、青磁、東播系須恵器、備前系の細片が出土する、復元できる遺物は少なかった。時期は掘立柱建物址とほぼ同時期と考えられる。

## 5、近世について

近世の遺構は確認できなかった、遺物は遺構外遺物で量的には非常に少ない、時期は17世紀～19世紀頃までである。肥前系陶磁器が量的には多く、瀬戸・美濃産、在地産の陶器を少量含む。

D区で木札（木簡）を確認する、墨書を記した木札が旧耕作土中から出土した。これらの近世木簡については、水稲耕作にかかわる直接的な資料として重要である。特Ⅱ中世から近世、近代にかけてこのような資料がほとんど現存していないことからすれば、稲作にあつての品種改良、作付けや収穫時期などにただならぬ苦心を払った近世農村の農耕の実態について有益な示唆を与える資料として評価することが出来る。民俗史や農業史、産業史などの研究分野からも今後各方面から重要視されるものと考えられる。

### （参考文献）

- (1) 廣田佳久・前田光雄・松田直則 「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」 共同中山遺跡群  
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992・3
- (2) 廣田佳久・山崎正明・竹村三菜 「佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書」  
岩井口遺跡 二ノ部遺跡・城跡 高知県佐川町教育委員会 1995・3
- (3) 小嶋博満 「高知・飛田坂本遺跡」 『木簡研究』第19号 木簡学会 1997・11

# 写真図版



調査区発掘前 全景東側より



調査区発掘後 全景西側より

PL2



B区 東壁セクション



C区 南壁セクション



B区 掘立柱建物址（南側より）



B区 掘立柱建物址（北側より）

PL4



出土遺物狀況



出土遺物狀況



出土遺物狀況



出土遺物狀況





出土遺物狀況



出土遺物狀況



出土遺物狀況



出土遺物狀況

PL6



出土遺物狀況



出土遺物狀況



出土遺物狀況



出土遺物狀況



礫状遺構 (西側より)



礫状遺構 (南側より)



石垣状遺構 (南側より)



石垣状遺構 (西側より)



集石遺構 (SX3) 南側より



集石遺構 (SX4) 南側より



集石遺構 (SX5) 南側より



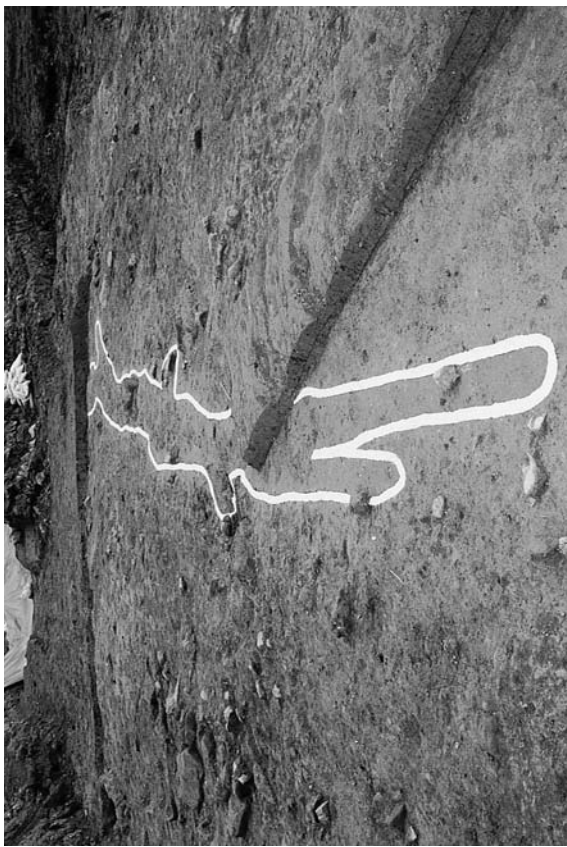
集石遺構 (SX6) 西側より



SD-1 (西側より)



SD-2 (南側より)



SD-3 (南側より)



SD-4 (南側より)

PL10



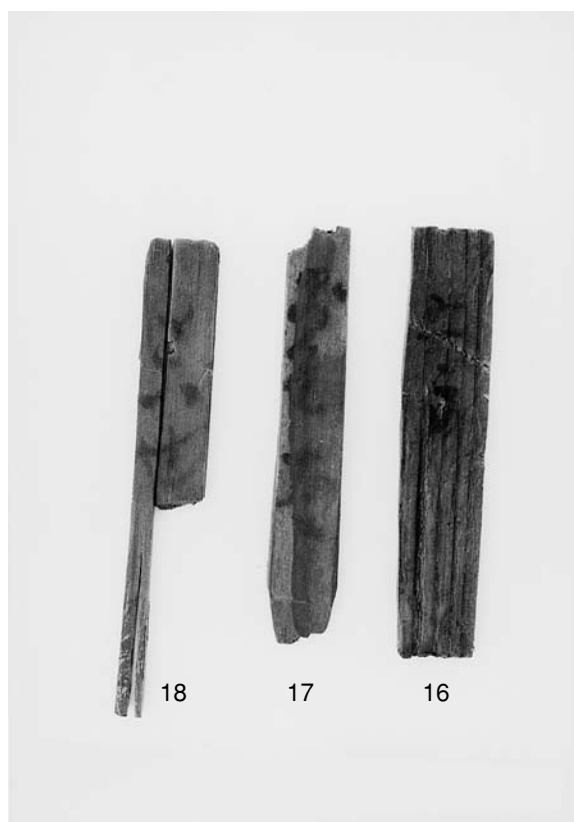
木札（木簡） Fig.62



木札（木簡） Fig.62



木札（木簡） Fig.62



木札（木簡） Fig.62

D区 出土遺物

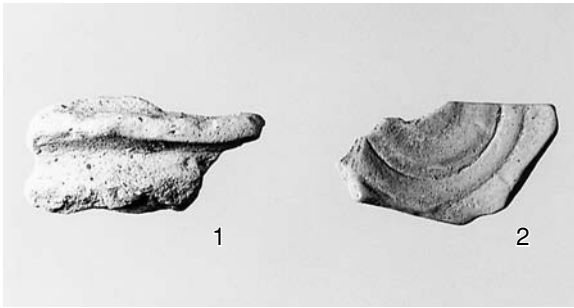


Fig.7 瓦質土器、土師器 (小皿)

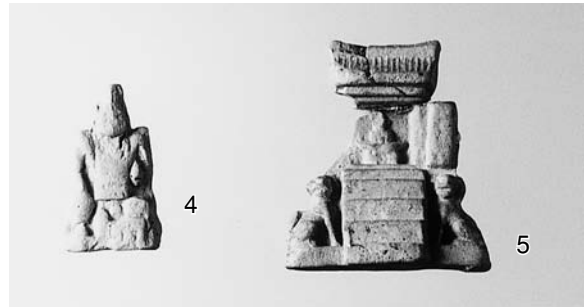


Fig.7 土製人形 2

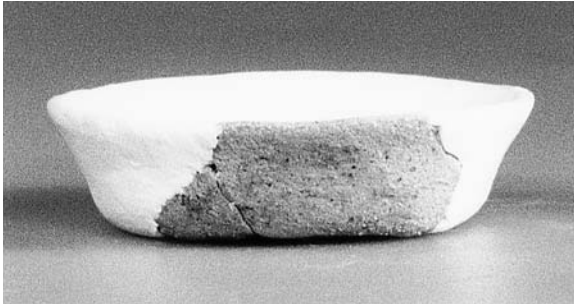


Fig.9-1 土師器 (小皿)

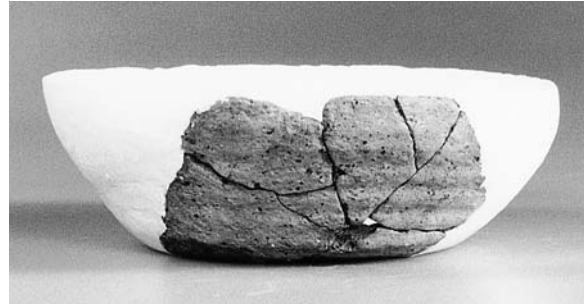


Fig.9-2 土師器 (杯)



Fig.9-3 土師器 (杯)



Fig.9-5 土師器 (杯)

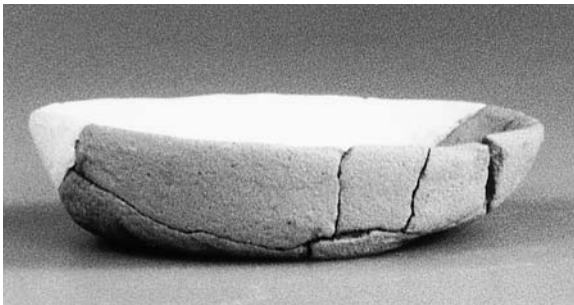


Fig.11-3 土師器 (小皿)



Fig.11-4 土師器 (杯)

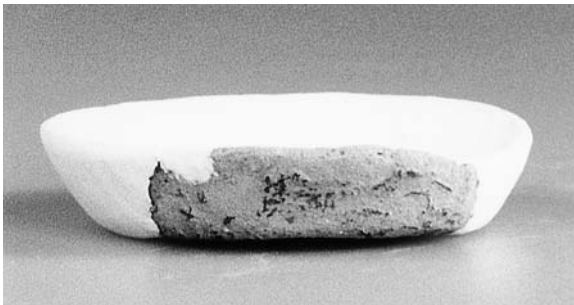


Fig.13-1 土師器 (小皿)



Fig.13-3 土師器 (杯)

PL12



Fig.16-2 青磁 (碗)

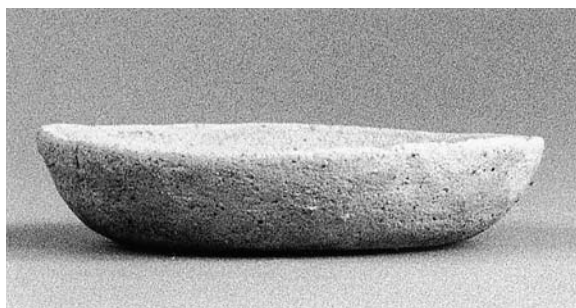


Fig.16-3 土師器 (小皿)

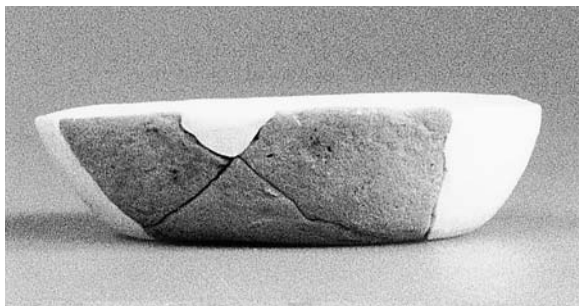


Fig.16-4 土師器 (小皿)



Fig.16-5 白磁 (杯)



Fig.16-6 土師器 (小皿)

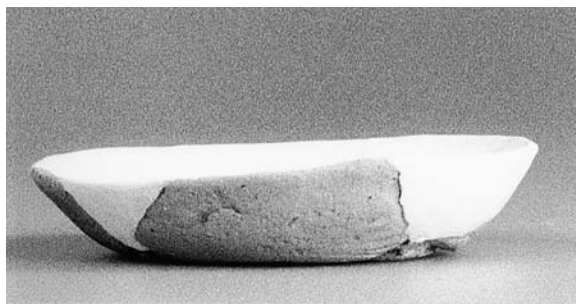


Fig.16-7 土師器 (小皿)



Fig.18-1 土師器 (杯)



Fig.18-2 土師器 (杯)



Fig.18-3 土師器 (杯)



Fig.18-5 鉄製品 (短刀)



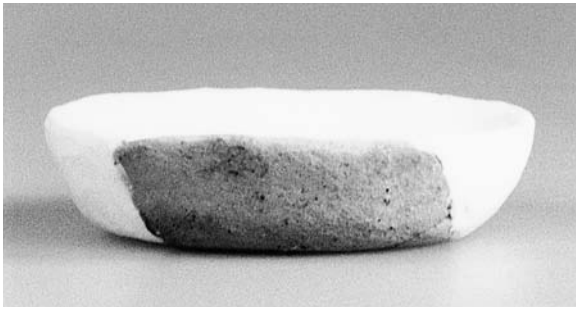


Fig.27-1 土師器 (小皿)

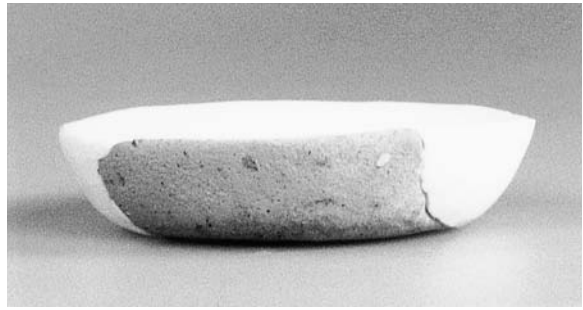


Fig.27-2 土師器 (小皿)

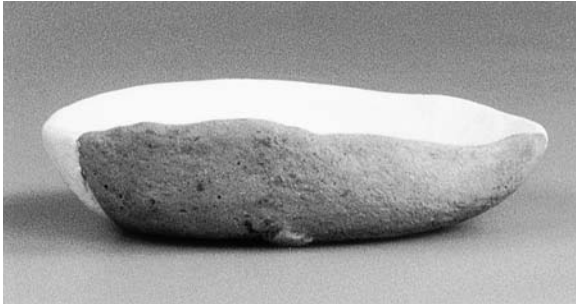


Fig.27-3 土師器 (小皿)

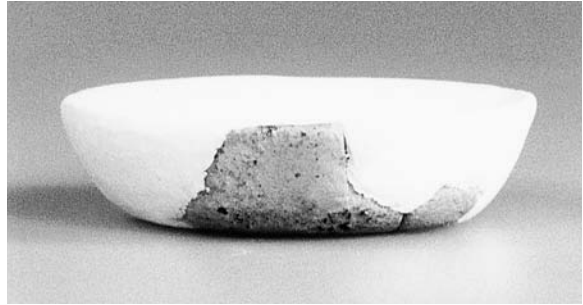


Fig.27-4 土師器 (小皿)



Fig.27-5 土師器 (小皿)



Fig.27-7 土師器 (小皿)



Fig.27-9 土師器 (小皿)

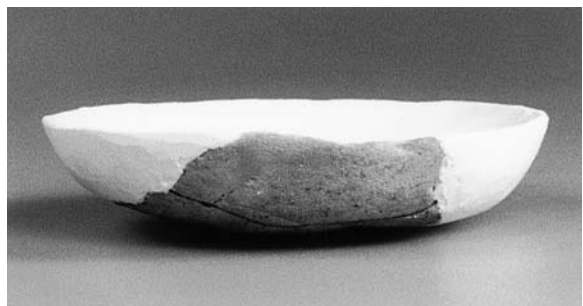


Fig.27-10 土師器 (小皿)

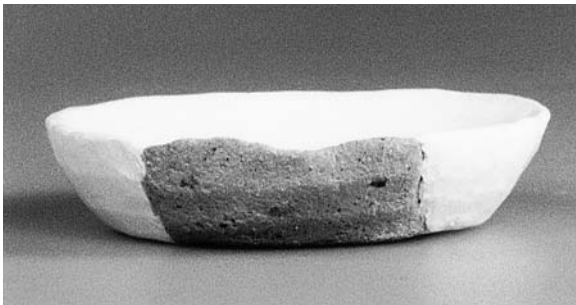


Fig.27-11 土師器 (小皿)

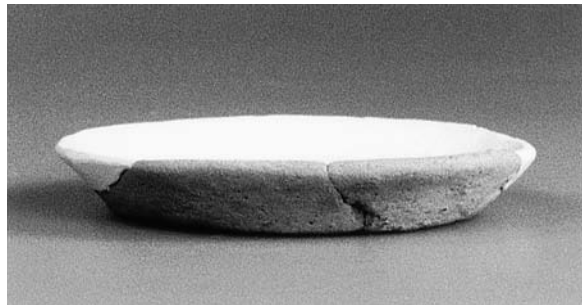


Fig.27-13 土師器 (小皿)

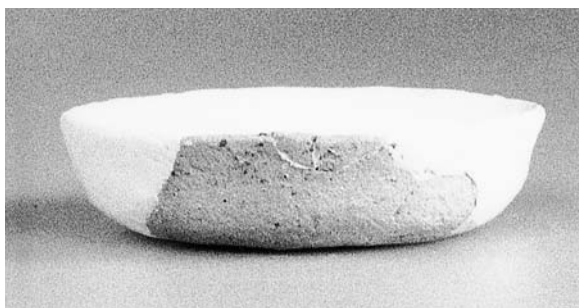


Fig.27-15 土師器 (小皿)



Fig.27-20 土師器 (杯)



Fig.27-30 瓦器 (碗)

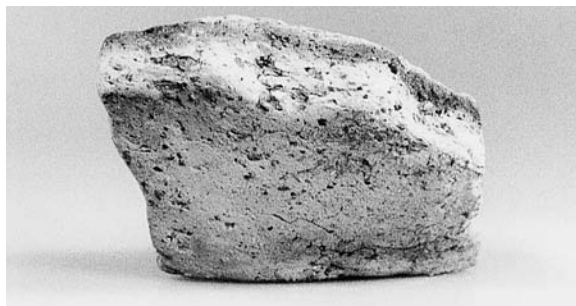


Fig.28-3 弥生 (壺)



Fig.28-5 須恵器 (碗)



Fig.29-12 肥前産

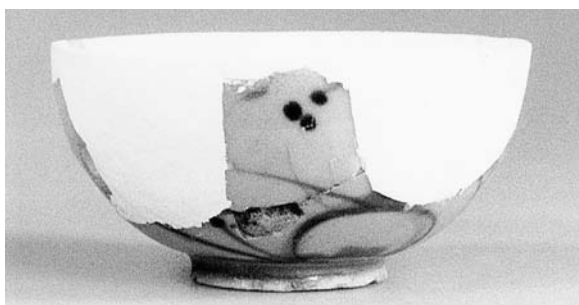


Fig.29-16 波佐見産 (碗)



Fig.30-2 土師器 (小皿)

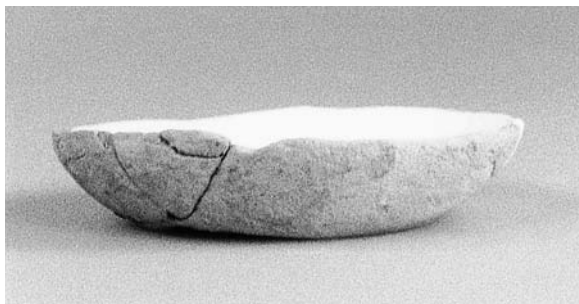


Fig.30-3 土師器 (小皿)

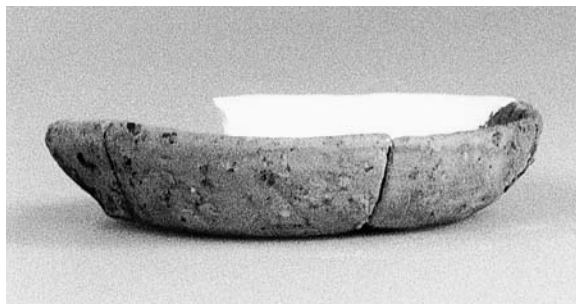


Fig.30-5 土師器 (小皿)



Fig.30-6 土師器 (小皿)

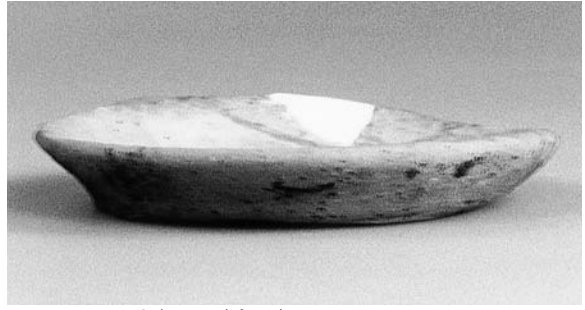


Fig.30-7 土師器 (小皿)



Fig.30-8 土師器 (小皿)



Fig.30-9 土師器 (小皿)



Fig.30-10 土師器 (小皿)



Fig.30-11 土師器 (小皿)



Fig.30-13 土師器 (小皿)



Fig.30-14 土師器 (小皿)

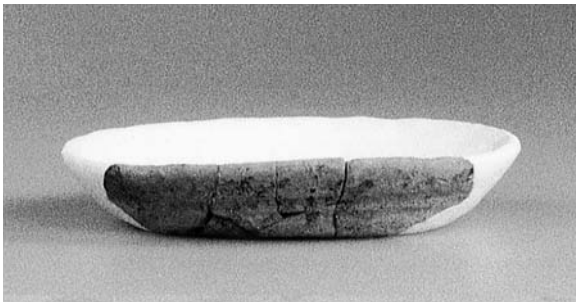


Fig.30-16 土師器 (小皿)



Fig.30-17 土師器 (小皿)



Fig.30-18 土師器 (小皿)



Fig.30-19 土師器 (小皿)



Fig.30-20 土師器 (小皿)

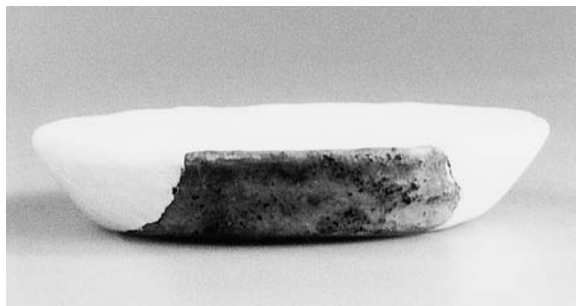


Fig.30-21 土師器 (小皿)



Fig.30-22 土師器 (小皿)



Fig.30-23 土師器 (小皿)



Fig.30-24 土師器 (小皿)



Fig.30-25 土師器 (小皿)



Fig.30-26 土師器 (小皿)



Fig.30-27 土師器 (小皿)



Fig.30-28 土師器 (小皿)



Fig.30-29 土師器 (小皿)

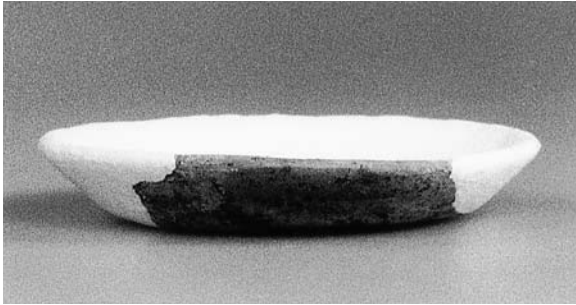


Fig.30-31 土師器 (小皿)



Fig.30-32 土師器 (小皿)



Fig.30-33 土師器 (小皿)



Fig.30-34 土師器 (小皿)



Fig.30-35 土師器 (杯)



Fig.30-37 土師器 (杯)



Fig.30-38 土師器 (杯)



Fig.30-39 土師器 (杯)

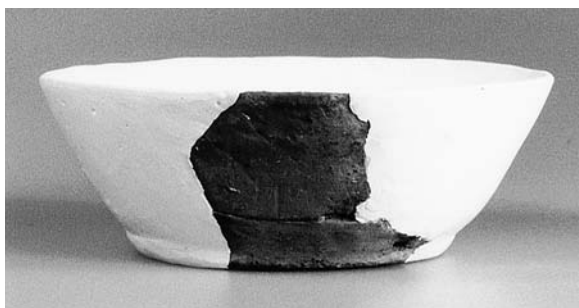


Fig.30-40 土師器 (杯)



Fig.30-43 土師器 (杯)



Fig.30-44 土師器 (杯)



Fig.31-47 土師器 (杯)



Fig.31-49 土師器 (杯)



Fig.31-50 土師器 (杯)



Fig.31-51 瓦器 (碗)



Fig.31-52 瓦器 (碗)



Fig.31-63 瓦器 (碗)



Fig.31-65 瓦器 (皿)



Fig.31-68 瓦器 (碗)



Fig.32-77 青磁 (碗)

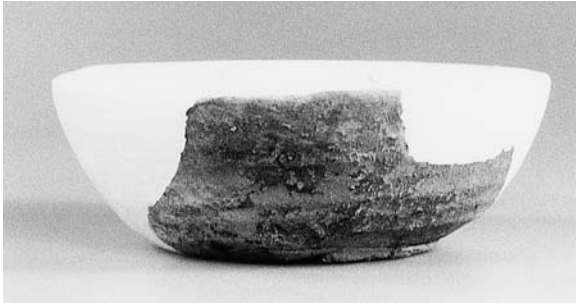


Fig.35-7 土師器 (杯)



Fig.37-8 土師器 (小皿)

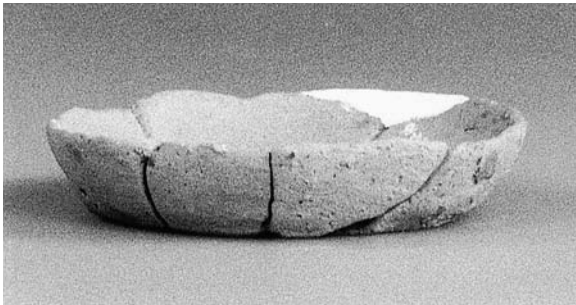


Fig.37-9 土師器 (小皿)



Fig.37-10 土師器 (小皿)



Fig.37-11 土師器 (小皿)



Fig.37-13 土師器 (杯)



Fig.37-16 土師器 (杯)



Fig.37-19 土師器 (杯)



Fig.37-21 土師器 (杯)



Fig.37-22 土師器 (杯)



Fig.39-26 土師器 (杯)



Fig.41-27 土師器 (小皿)



Fig.45-32 土師器 (杯)



Fig.49-1 土師器 (小皿)

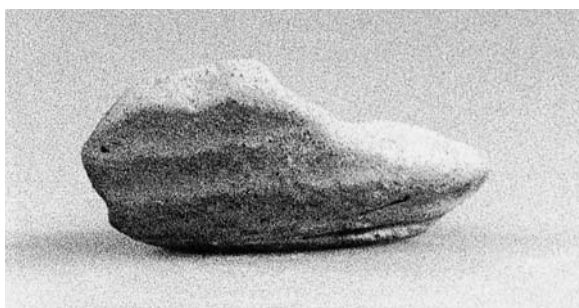


Fig.49-2 土師器 (小皿)



Fig.51-1 土師器 (小皿)



Fig.51-3 土師器 (杯)

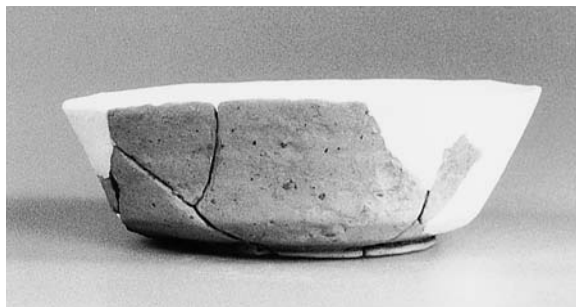


Fig.51-4 土師器 (杯)



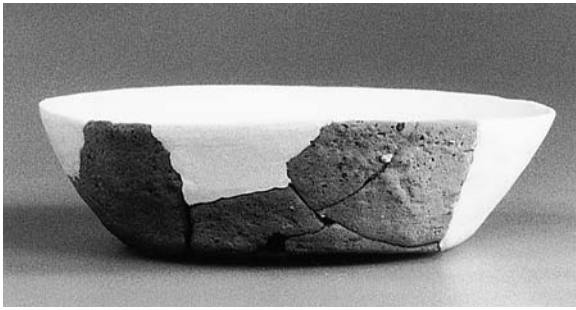


Fig.51-5 土師器 (杯)

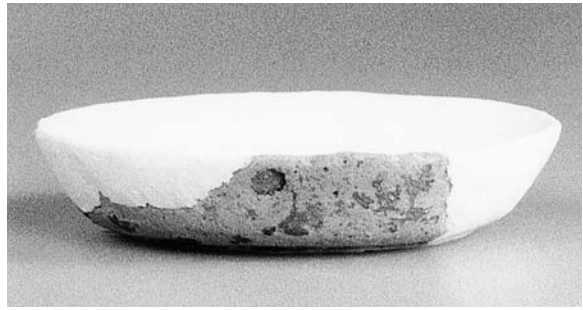


Fig.51-8 土師器 (小皿)



Fig.51-11 土師器 (小皿)



Fig.51-13 土師器 (小皿)

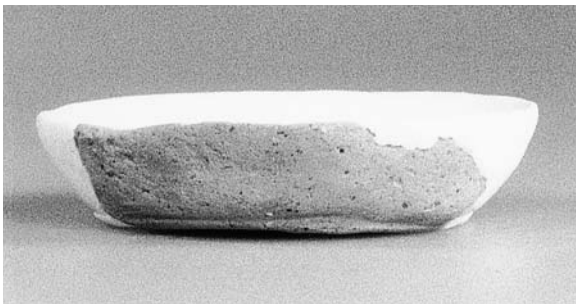


Fig.51-14 土師器 (小皿)



Fig.51-15 土師器 (小皿)



Fig.51-16 土師器 (小皿)



Fig.51-17 土師器 (小皿)



Fig.51-18 土師器 (小皿)



Fig.51-19 土師器 (小皿)



Fig.51-20 土師器 (小皿)

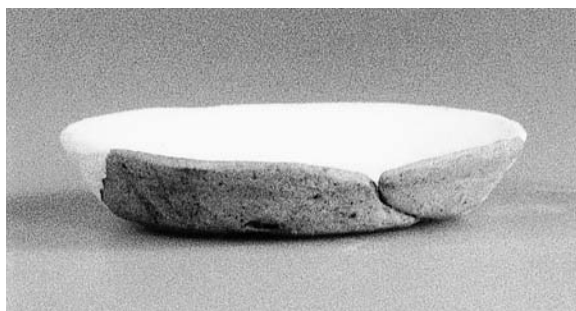


Fig.51-23 土師器 (小皿)

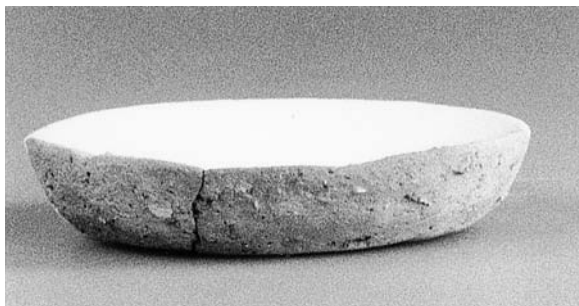


Fig.51-24 土師器 (小皿)



Fig.51-25 土師器 (杯)

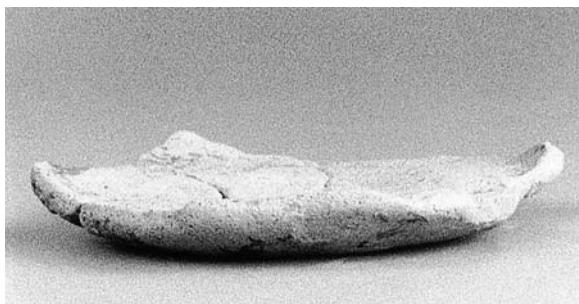


Fig.51-26 土師器 (杯)



Fig.53-2 土師器 (小皿)



Fig.53-3 土師器 (小皿)



Fig.53-6 土師器 (小皿)



Fig.53-7 土師器 (小皿)

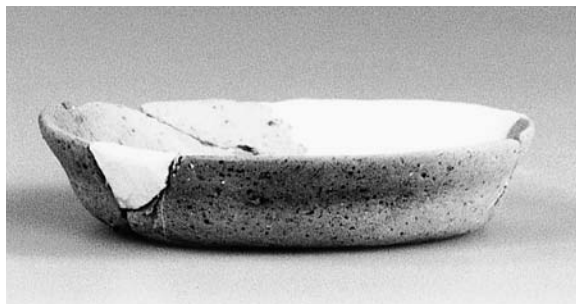


Fig.53-8 土師器 (小皿)

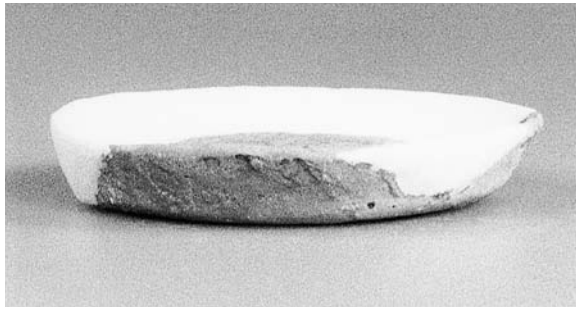


Fig.53-10 土師器 (小皿)

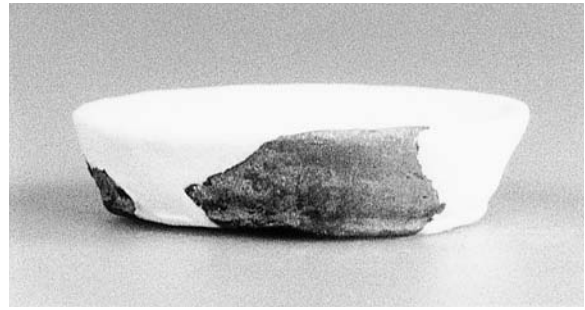


Fig.53-11 土師器 (小皿)

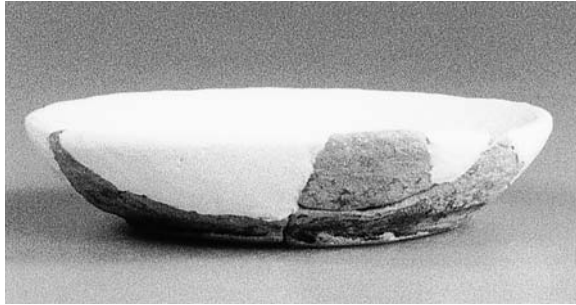


Fig.53-12 土師器 (小皿)

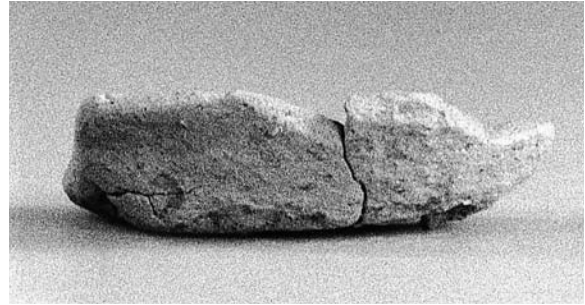


Fig.53-15 土師器 (小皿)



Fig.53-18 土師器 (小皿)



Fig.54-22 土師器 (小皿)



Fig.54-23 土師器 (小皿)

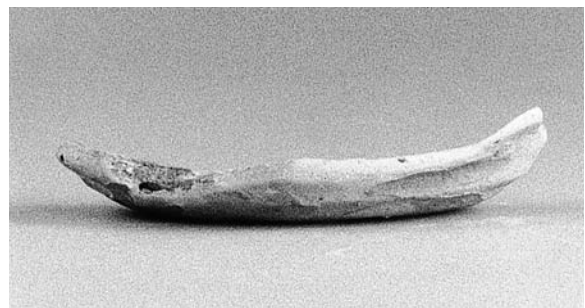


Fig.54-26 土師器 (小皿)



Fig.54-27 土師器 (小皿)

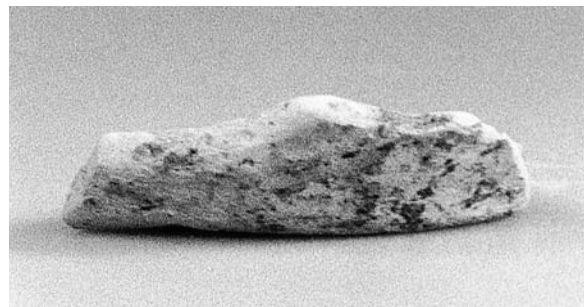


Fig.54-28 土師器 (杯)



Fig.54-30 土師器 (杯)



Fig.54-31 土師器 (杯)



Fig.57-5 須恵器 (碗)

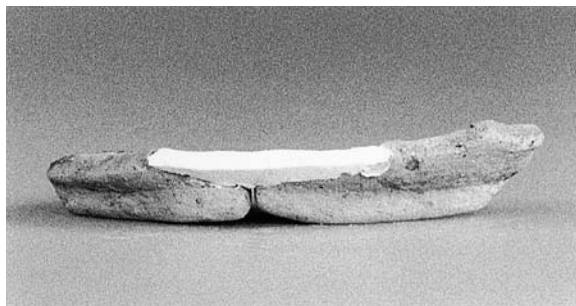


Fig.57-10 土師器 (碗)

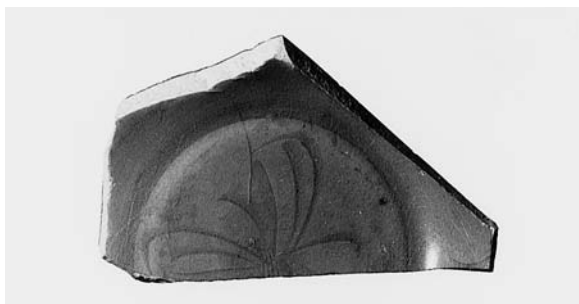


Fig.57-11 青磁 (碗)

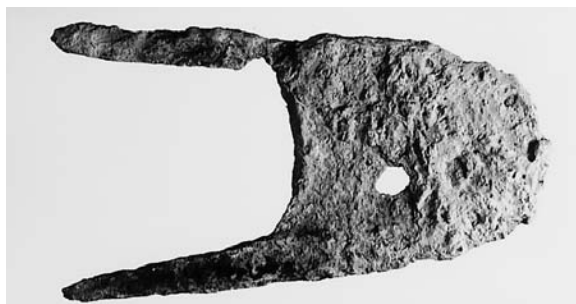


Fig.58-16 鋤先



Fig.58-18 備前産 (碗)

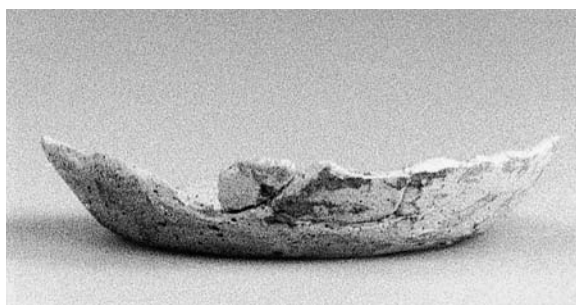


Fig.59-19 土師器 (小皿)

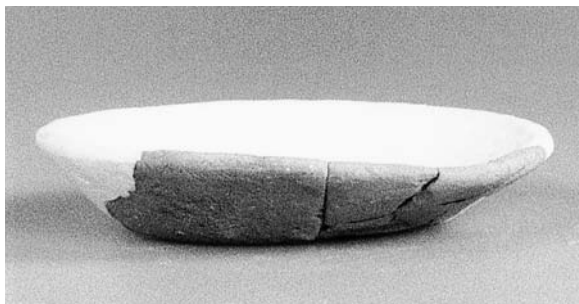


Fig.59-20 土師器 (小皿)



Fig.59-25 土師器 (小皿)



Fig.59-27 土師器 (小皿)



Fig.59-31 土師器 (小皿)



Fig.59-35 土師器 (小皿)

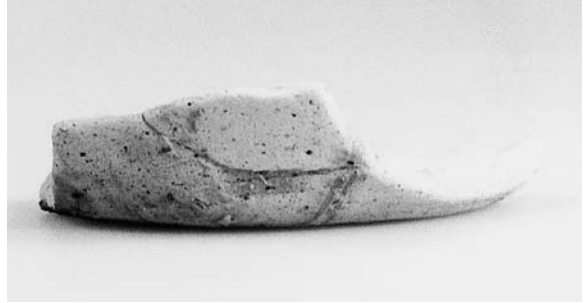


Fig.59-37 土師器 (小皿)



Fig.59-43 土師器 (杯)

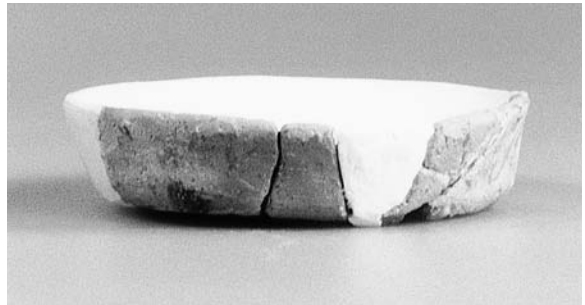


Fig.62-2 土師器 (小皿)

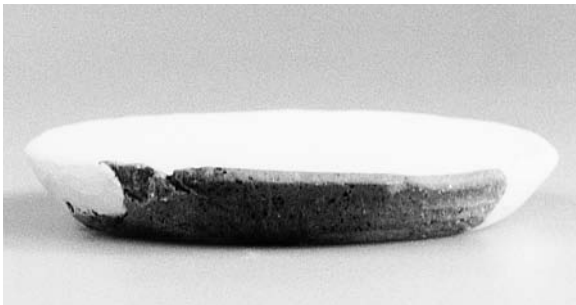
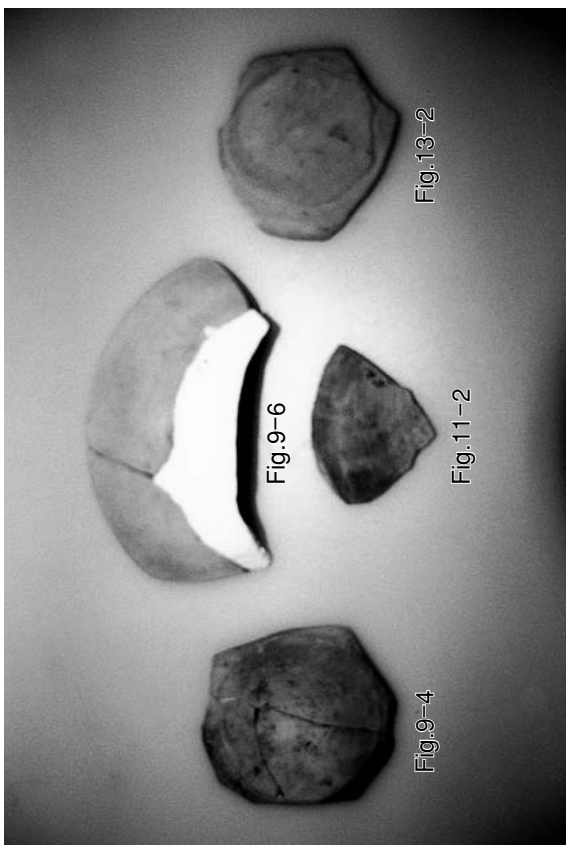
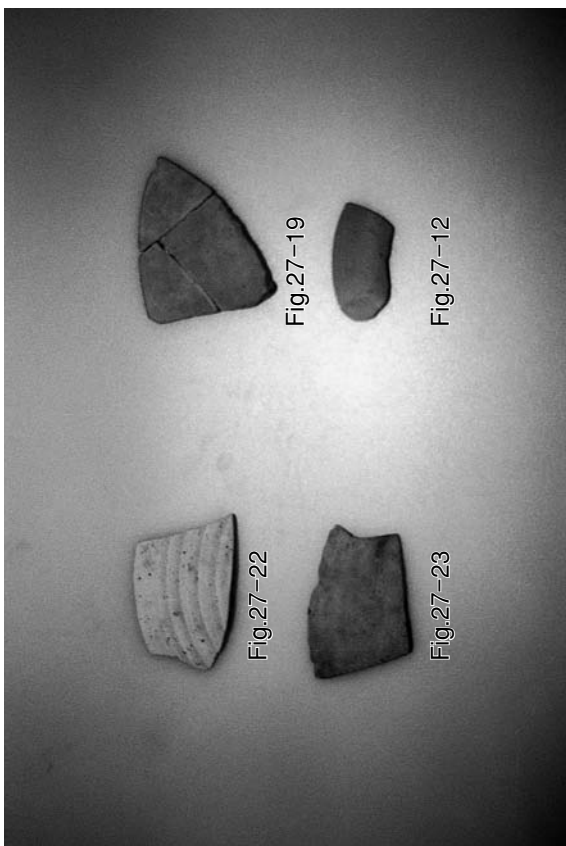


Fig.62-3 土師器 (小皿)



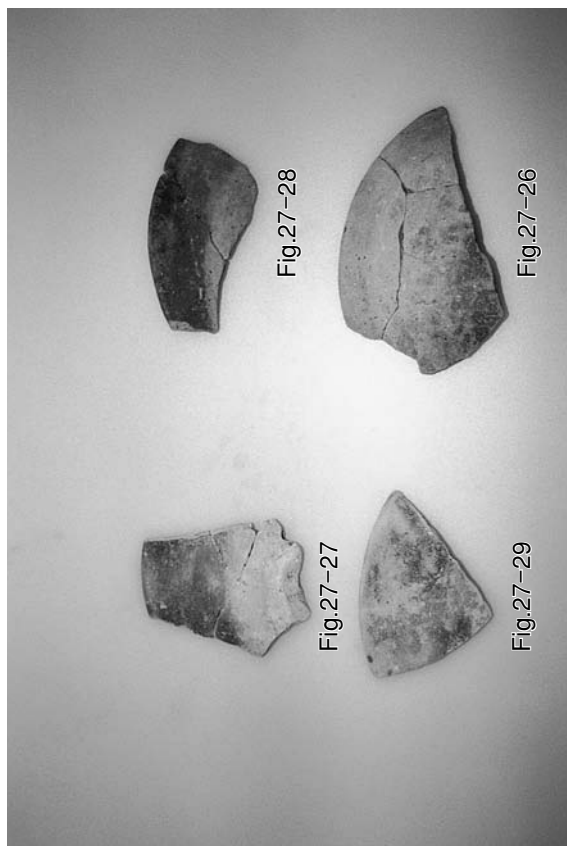
①



②



③



④

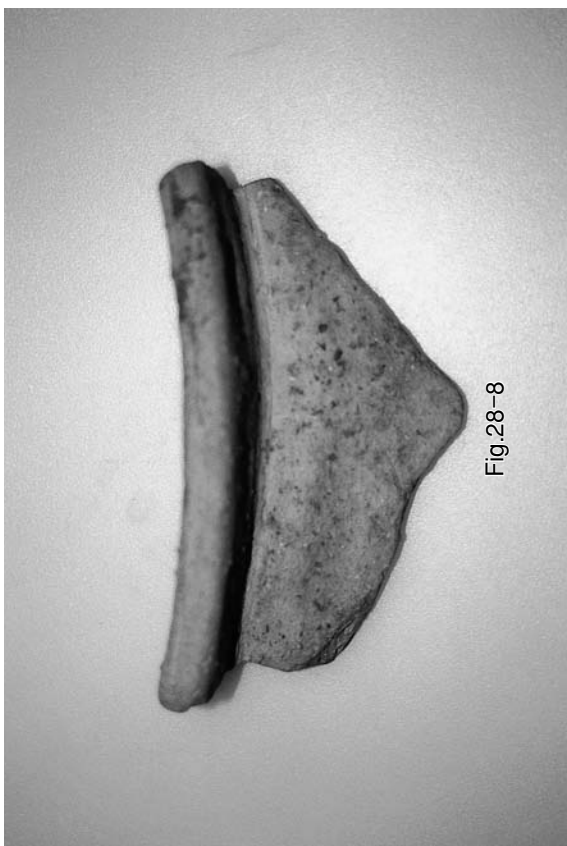


Fig.28-8

⑥



Fig.28-11

⑧

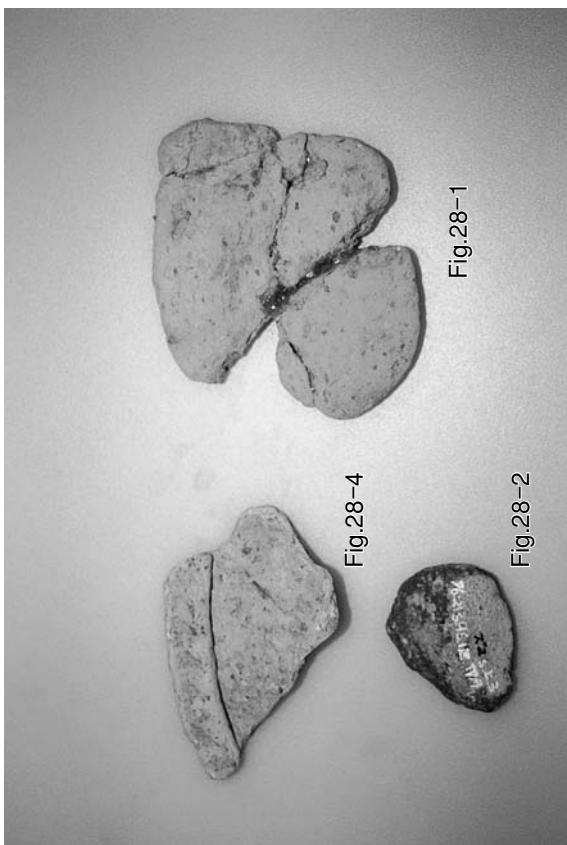


Fig.28-1

Fig.28-4

Fig.28-2

⑤

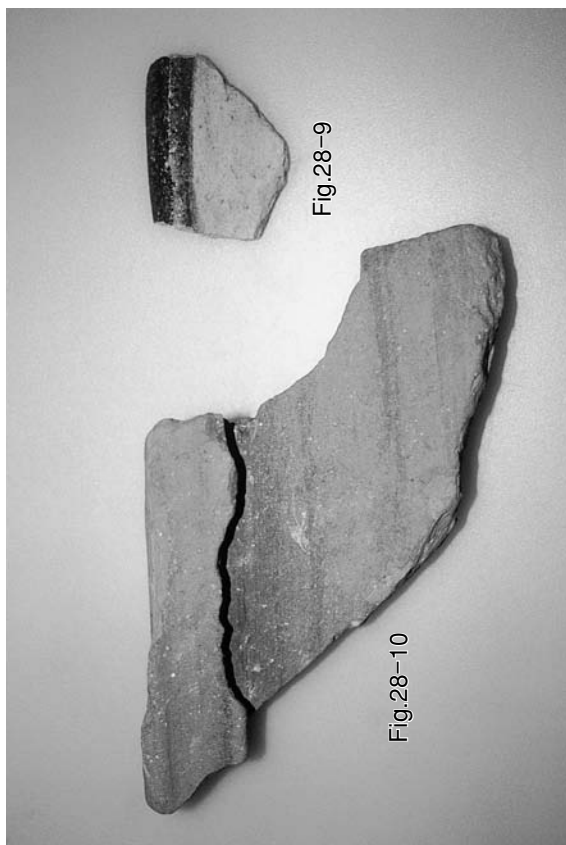
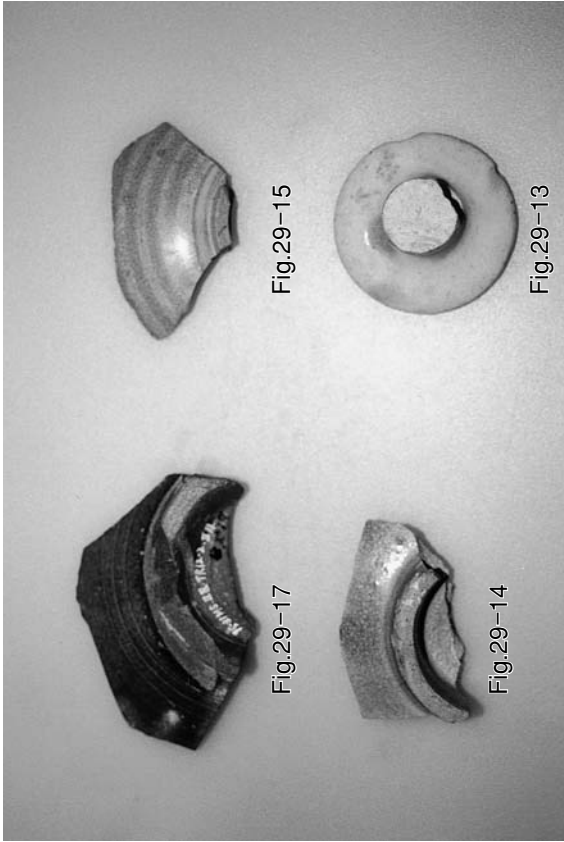


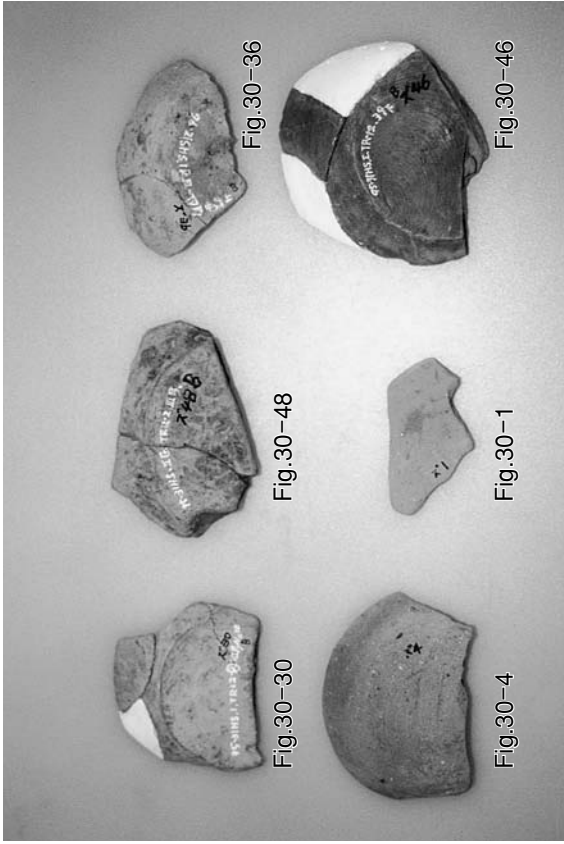
Fig.28-9

Fig.28-10

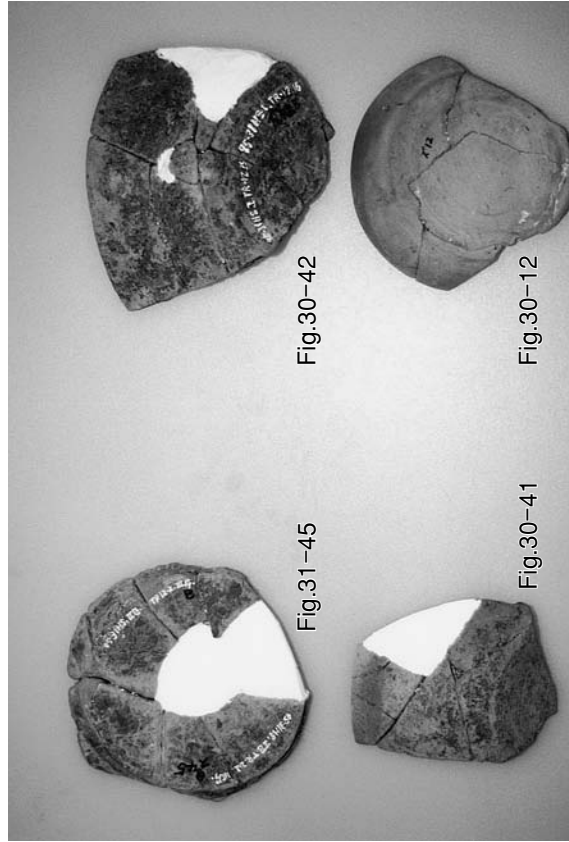
⑦



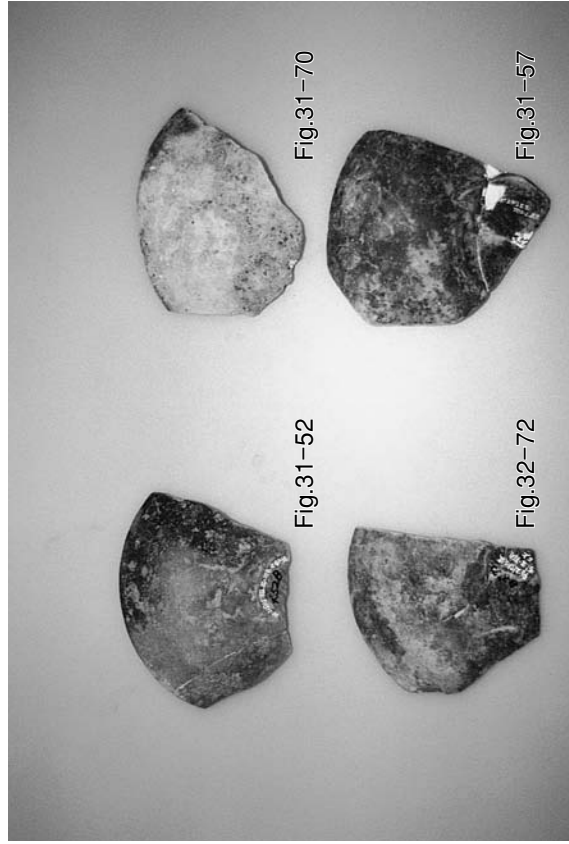
⑨



⑩

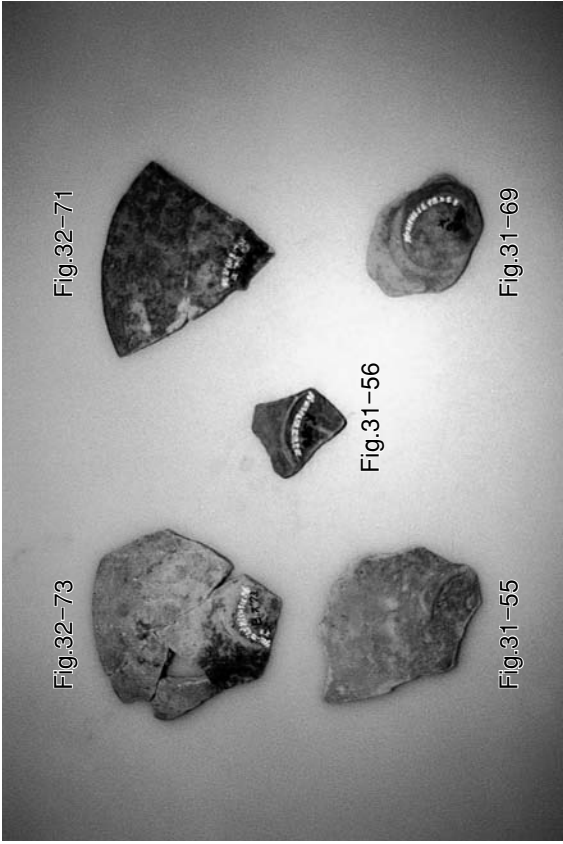


⑪

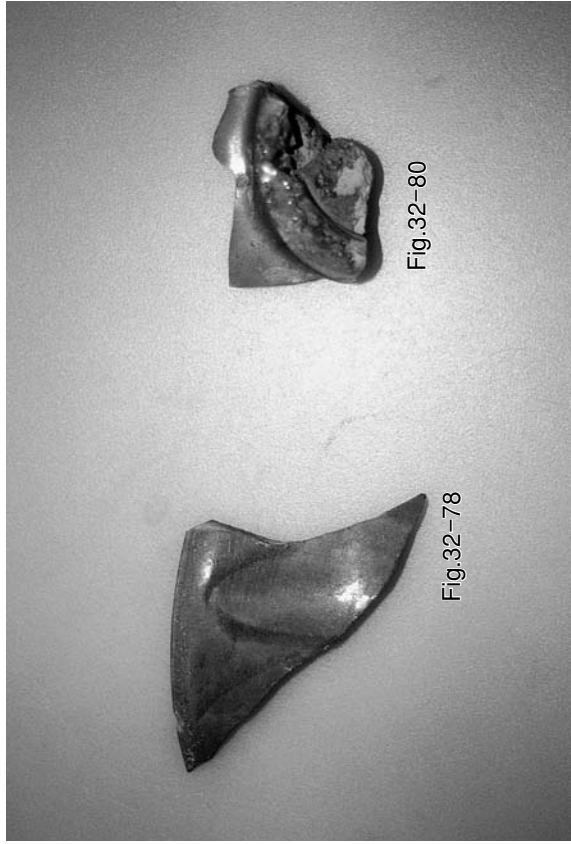


⑫

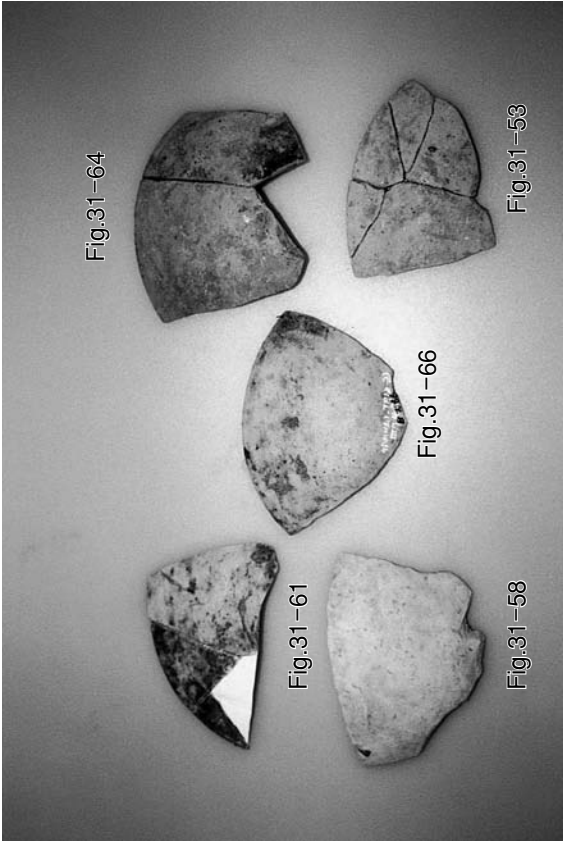




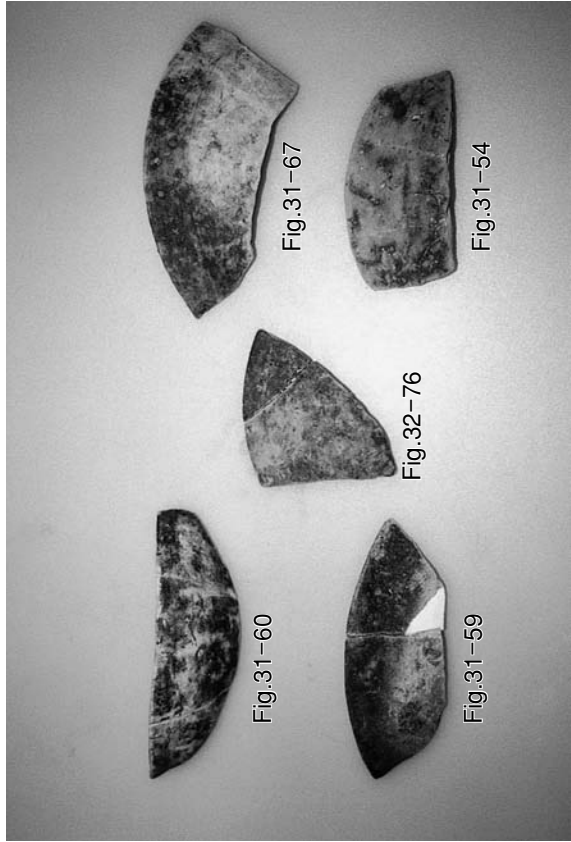
(14)



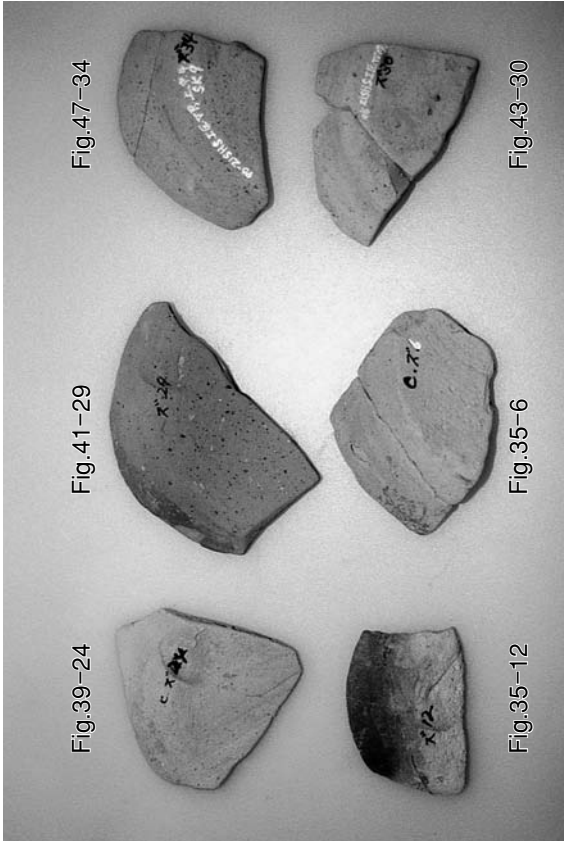
(16)



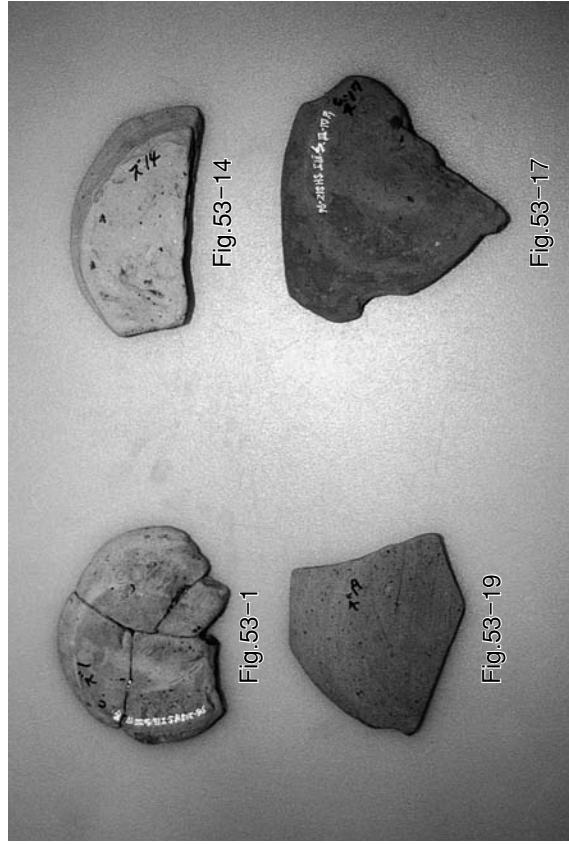
(13)



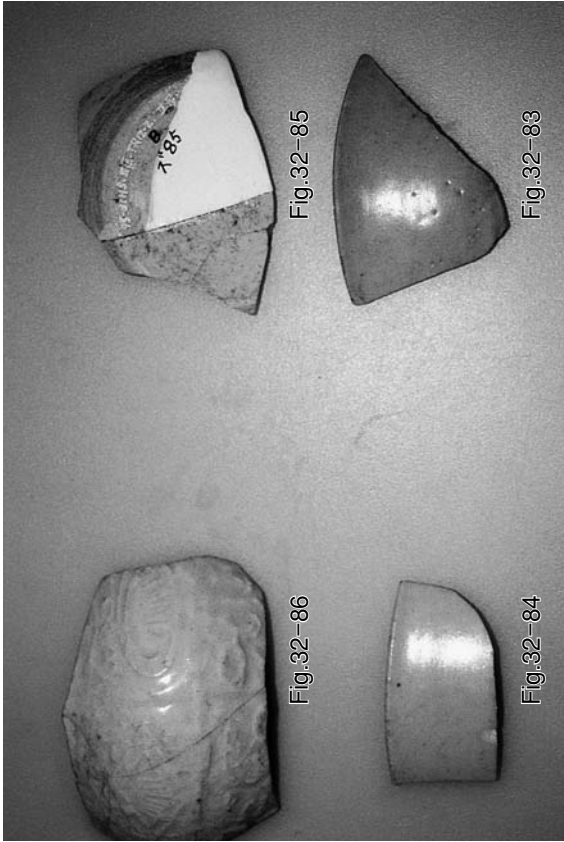
(15)



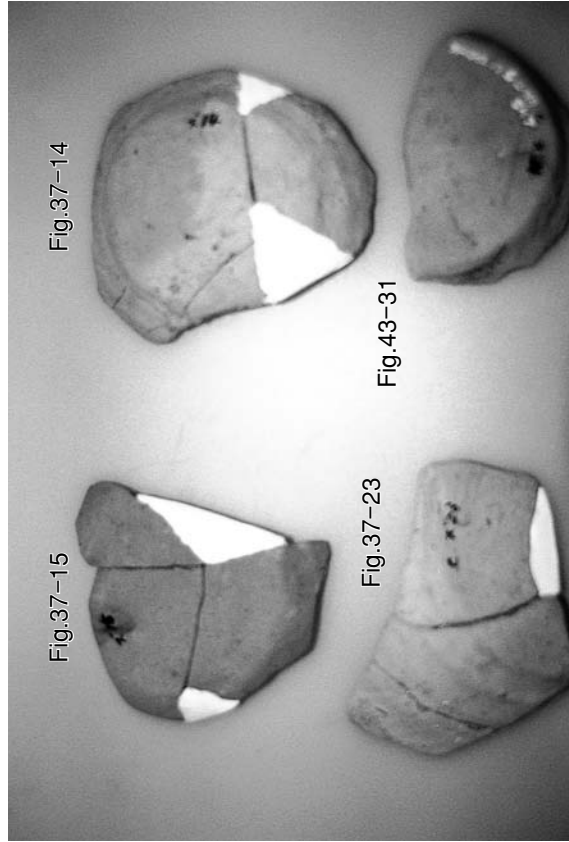
(18)



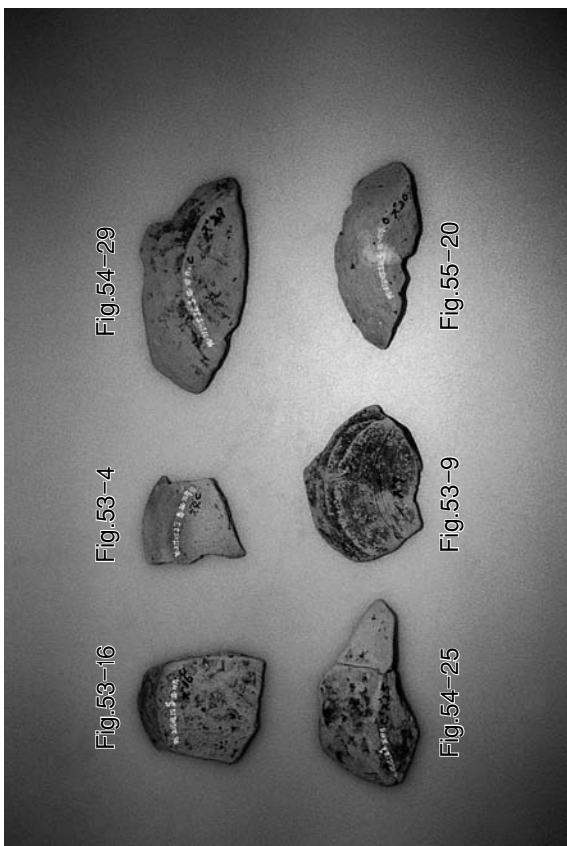
(20)



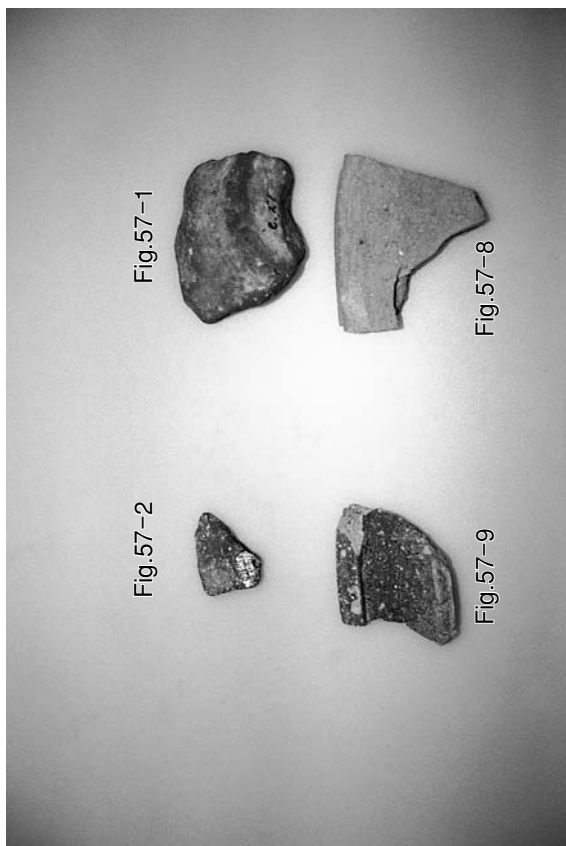
(17)



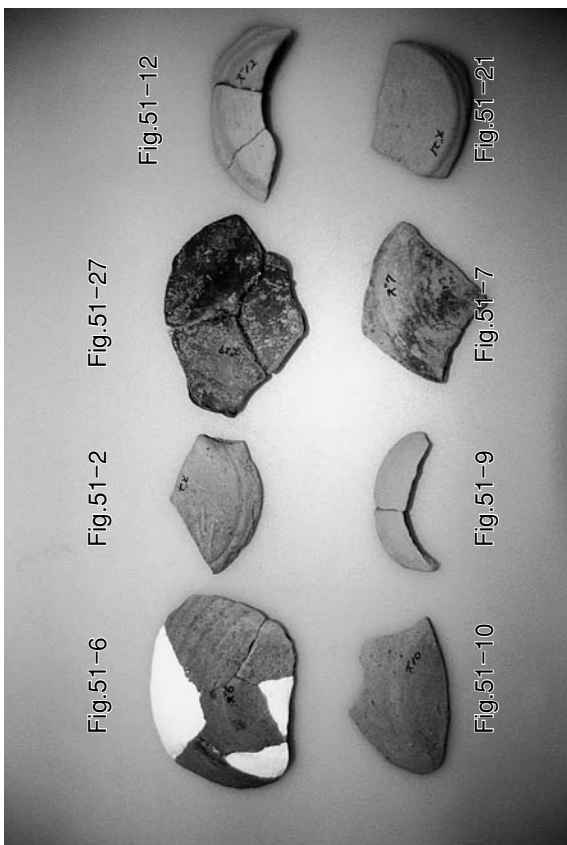
(19)



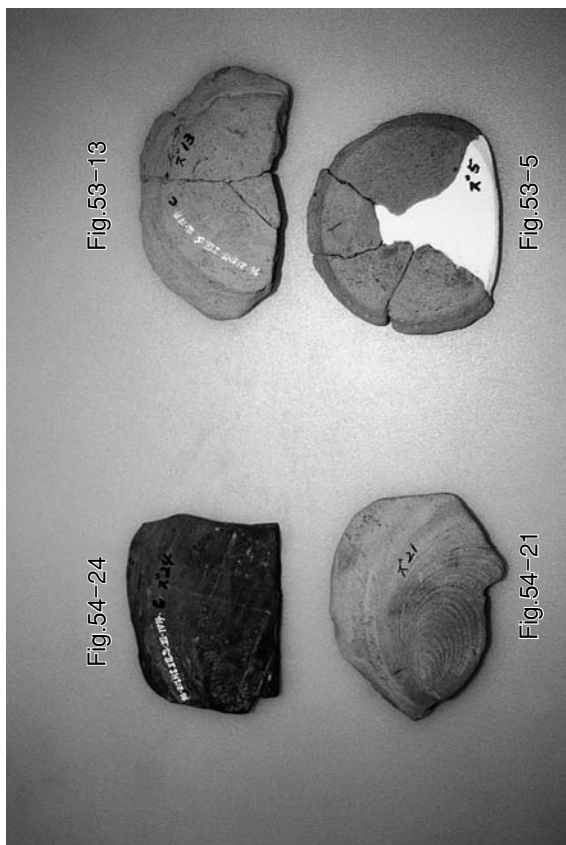
㉒



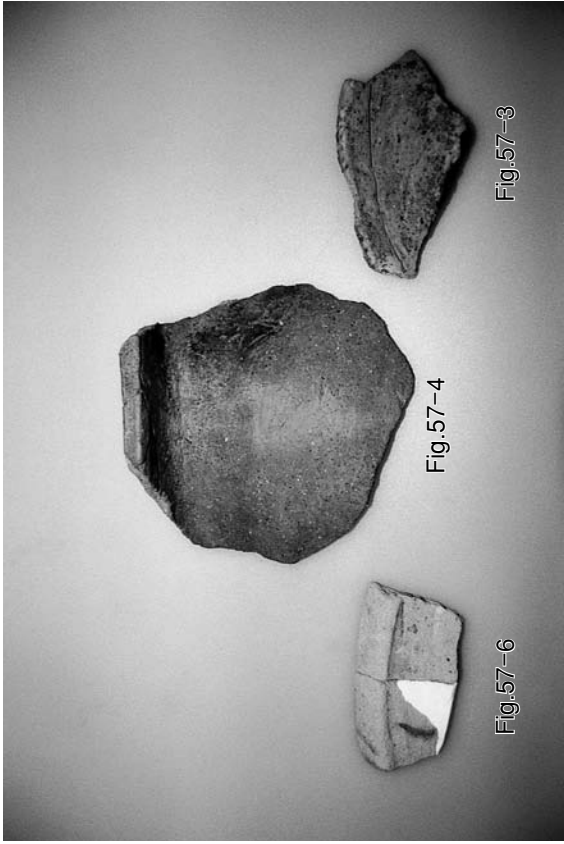
㉔



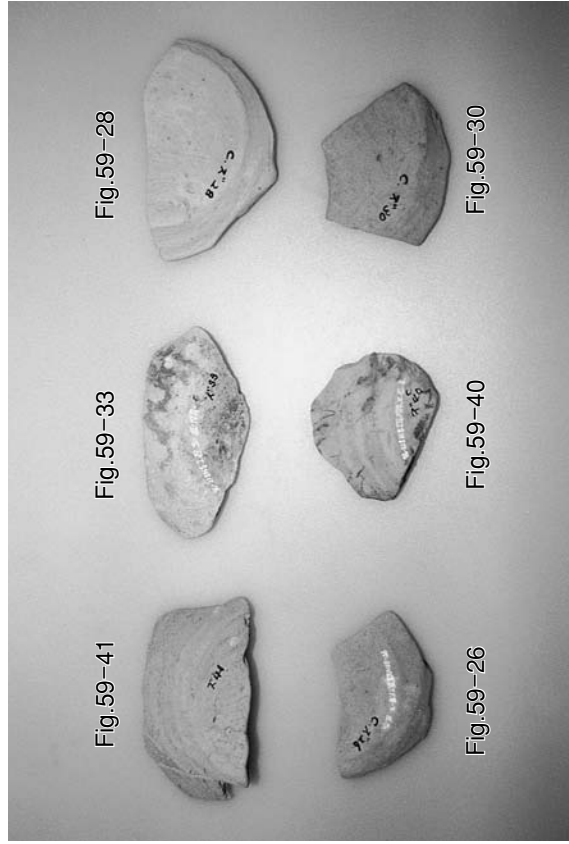
㉑



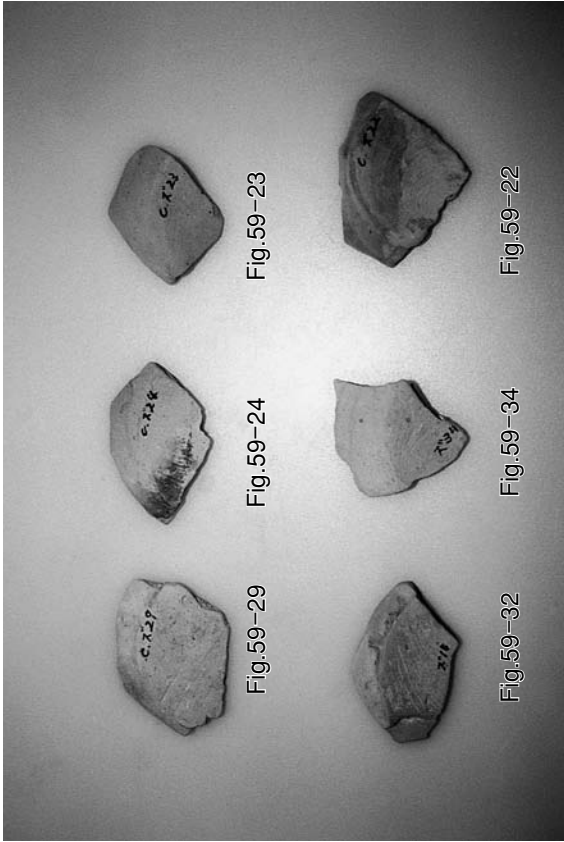
㉓



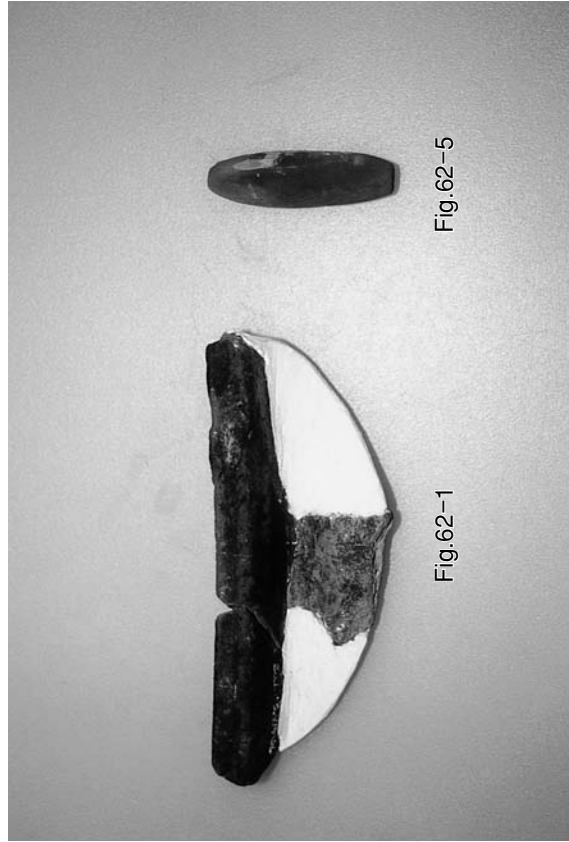
26



28



25



27



発掘調査に携わった方々

報告書抄録

ふりがな	ひださかもといせき							
書名	飛田坂本遺跡							
副書名	高知自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	小嶋博満							
編集機関	高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL (0888-64-0671)							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひださかもと 飛田坂本 いせき 遺跡	すさきし 須崎市 かんだひだ 神田飛田 あざさかもと 字坂本 あそうためさだ 吾桑為貞	39206	060024	33° 25' 07"	133° 18' 17"	1996. 0918 ) 1997. 0331	4,000㎡	高知自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
飛田坂本遺跡	掘立柱建物 その他	中世	掘立柱建物(4棟) 土坑(9基) 溝状遺構(4条) 集石遺構(SX)(6基) 礫状遺構(1基) 石垣状遺構(1基)	弥生土器 土師器 瓦器 青磁 木札(木簡)				

# 飛田坂本遺跡

四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う発掘調査報告書

---

1998

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原南泉1437-1  
Tel. 0888-64-0671

印刷 (有) 飛 鳥  
高知市針木東町21-18  
Tel. 0888-44-6022